鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 17

一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅢ

鳥取県西伯郡大山町

MONZENKAMI Y A SHIKI
門前上屋敷遺跡Ⅱ

MONZENCHIN J U YAMASHIROATO
門前鎮守山城跡

２００７

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省　倉吉河川国道事務所

鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 17

一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅢ

鳥取県西伯郡大山町

MONZENKAMI Y A SHIKI
門前上屋敷遺跡II

MONZENCHIN J U YAMASHIROATO
門前鎮守山城跡

２００７

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省　倉吉河川国道事務所

1．門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡調査地遠景（平成17年度調査後，北から）

2．門前上屋敷遺跡16区溝８・９完掘状況（南東から）

1．門前上屋敷遺跡15区中世田畠検出状況（北から）

2．門前上屋敷遺跡造成土土層断面（南西から）

門前上屋敷遺跡出土の磁器

門前鎮守山城跡土塁・堀切完掘状況（西から）

1．門前鎮守山城跡盛土遺構１断ち割り状況（東から）

2．門前鎮守山城跡土坑10土師器出土状況（北東から）

門前鎮守山城跡土坑15出土土師器

序

一般国道９号名和淀江道路の改築に伴う発掘調査は、平成１２年度から行われ、平成１８年度末時点で遺跡数は１８遺跡、調査面積は延べ１６万平方メートルに及んでいます。

この発掘調査は、平成１７年度から鳥取県直営の事業となり、鳥取県埋蔵文化財センターが担当することとなりました。

そのうち、大山町にある門前上屋敷遺跡、門前鎮守山城跡では、弥生時代の集落跡から中世の居館に関わる施設、寺院跡と考えられる大規模な造成、砦状の施設、県内では類例が少ない中世の田畠などを検出するに至り、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。

また、埋蔵文化財センターでは、発掘調査により明らかとなった遺跡や出土品を活用し、その普及啓発に努めることも重要な業務としております。

門前上屋敷遺跡、門前鎮守山城跡でも、それぞれ現地説明会を開催したほか、出土品の展示公開を行い、多くの方々にその素晴らしさを実感していただきました。

本書はその調査結果を報告書としてまとめたものです。この報告書が、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成１９年３月

鳥取県埋蔵文化財センター
所　長　　久保　穣二朗

序　文

一般国道９号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約 691㎞の幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取一島根県境）までの 92.3㎞を管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

名和淀江道路は、西伯郡大山町から米子市淀江町にかけての、国道９号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された一般国道９号のバイパス（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第 94 条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成 17・18 年度は、「門前上屋敷遺跡」、「門前鎮守山城跡」、「門前第２遺跡」、「茶畑六反田遺跡」の４遺跡について鳥取県埋蔵文化財センターと発掘調査の委託契約を締結し、発掘調査が行われました。

本書は、上記の「門前上屋敷遺跡」と「門前鎮守山城跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることを御理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた鳥取県埋蔵文化財センターの関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成１９年３月

国土交通省　倉吉河川国道事務所

所　長　　嘉本　昭夫

例　　言

1　本書は、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成 17･18 年度に行った、門前上屋敷遺跡、門前鎮守山城跡の発掘調査報告書である。

2　本報告書に収載した門前上屋敷遺跡の所在地は、鳥取県西伯郡大山町門前字上屋敷 48-1、字若宮 50、54 他２筆である。調査面積は、平成 17・18 年度合わせて延べ 7,014㎡である。

　門前鎮守山城跡の所在地は、鳥取県西伯郡大山町門前字鎮守山 114、上屋敷 48 である。調査面積は、延べ 2,702㎡である。

3　本報告書で示す標高は、２級基準点 H10-2-4、３級基準点 H10-3-6、H11-3-1 を基点とする標高値を使用した。方位は、公共座標北を示す。なお、磁北は座標北に対し約６°10′西偏、真北は約 20′東偏する。Ｘ：、Ｙ：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ｖ系の座標値である。

4　本報告にあたり、調査時遺構原図の遺構名を表記のものに変更している。

5　本報告書に記載の地形図は、大山町作成の「大山町全図 1/25,000」、大山町都市計画図２（1/5,000）の一部を使用した。

6　門前上屋敷遺跡 16 区溝８出土木製品の樹種同定を、鳥取大学農学部古川郁夫教授に依頼したところ、玉稿を賜った。また、門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡出土の鉄関連遺物については、たたら研究会委員穴澤義功氏に指導助言をいただき、あわせて試料の分類及び観察表作成（第６章第５節）をお願いした。

7　本報告にあたり、調査前・調査後航空写真撮影、調査前後地形測量、^{14}C 年代測定、門前上屋敷遺跡自然科学分析、門前上屋敷遺跡出土須恵器胎土分析を業者及び大学へ委託した。

8　現地での測量及び実測並びには遺構・遺物写真撮影は、航空写真を除いて調査員が行った。遺構図の浄書及び出土遺物の実測及び浄書は、埋蔵文化財センター並びに調査第二係（名和調査事務所）で行った。遺物写真撮影は埋蔵文化財センターで行った。

9　本報告書の執筆は、調査員がそれぞれ分担して行い、執筆者名を文末に記載した。編集は家塚、玉木、牧本がおこなった。

10　出土遺物、図面、写真等は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

11　現地調査及び報告書作成に当たって、下記の方々に御指導、御協力いただいた。

　穴澤義功、小都　隆、河合君近、小林博昭、白石　純、西尾克己、広江耕史、古川郁夫、守岡正司、門前集落（敬称略）

凡　　例

1　遺物ネーミング時に用いた当遺跡の略号は、門前上屋敷遺跡が「MNK」、門前鎮守山城跡が「門チン」である。

2　本報告書における遺構略号は、次のように表した。

　Ｐ : 柱穴・ピット

3　本報告書における実測図は、基本的に下記の縮尺で掲載したが、特殊なものについては、その都度縮尺を変更している。

⑴　遺構図－竪穴住居：1/80、掘立柱建物：1/80、土坑・集石遺構：1/40、溝：1/100、1/160
段状遺構：1/100、土塁：1/100、遺物出土状況：1/40

⑵　遺物実測図－土製品：1/2・1/4、鉄製品：1/2、1/4、石製品：1/1・2/3・1/8、銭貨：1/2

4　遺構図における表示は、特に説明がない限り以下のとおりとした。

：焼土面、：炭化物層

本文中における遺物記号は次のように表した。

Ｃ：土器を除く土製品、Ｓ：石製品、Ｍ：金属製品、Ｗ：木製品、Ｊ：玉類

土器実測図のうち、弥生土器、土師器、陶磁器は断面白抜き、須恵器は断面黒塗りで表現し、遺物実測図中における記号は、以下のとおりとした。

→：ケズリの方向（砂粒の動き）

5　遺構の測定値のうち、竪穴住居は床面の規模、床面積は壁溝を除いた規模、ピットの規模は（長軸×短軸－深さ）㎝で表した。

出土遺物観察表の法量記載における数値は、表記の部位の最大値を表し、※は推定復元値、△は残存値を示す。

6　発掘調査時における遺構番号と報告書記載時の遺構番号は、基本的に一致するが、ピット番号は、調査時のものから変更したものがある。

7　文章中で触れた土器型式名及び年代観は、縄文時代は『縄文土器大観』（小林 1989）、弥生時代は因幡・伯耆土器編年（清水 1992）、古墳時代土師器については、天神川下流編年（牧本 1996）、古代の土師器については伯耆国庁編年（巽 1983）、中世土器については八峠編年（八峠 2004）、中森編年（中森 2006）等を参考にした。

【参考文献】

小林達雄編 1989『縄文土器大観１～４』小学館
清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』正岡睦夫・松本岩雄編　木耳社 P.355 ～ 412
牧本哲雄 1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ　園第 6 遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 61　P.151 ～ 160
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店　P.34 ～ 72
巽淳一郎 1983「古代窯業生産の展開－西日本を中心にしてー」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　P .659 ～ 685
八峠　興 2004「山陰の中世土器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究ⅩⅧ』
中森　祥 2006「鳥取県における中世後期土師器の展開」『調査研究紀要１』鳥取県埋蔵文化財センター
横田賢次郎、森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』
森田勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究 N0. ２』日本貿易陶磁研究会
上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 N0. ２』日本貿易陶磁研究会
小野正敏 1982「14 ～ 16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 N0. ２』日本貿易陶磁研究会

目　次

序
序文
例言
凡例
第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯……（牧本）１
　第２節　調査の経過と方法……（牧本）２
　第３節　調査体制……（牧本）５
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境……（牧本）７
　第２節　歴史的環境……（牧本）８
第３章　門前上屋敷遺跡の調査成果
　第１節　遺跡の立地と層序……（玉木）11
　第２節　８区の調査……（玉木）35
　第３節　９区の調査……（玉木）47
　第４節　10・13 区の調査 ……（玉木）57
　第５節　11 区の調査 ……（玉木）60
　第６節　12 区の調査 ……（玉木）70
　第７節　14・15 区の調査 ……（牧本）79
　第８節　16 区の調査 ……（玉木）151
　第９節　17 区の調査 ……（玉木）169
　第 10 節　遺物観察表 …… 188
第４章　門前鎮守山城跡の調査成果
　第１節　遺跡の概要と基本層序……（牧本）216
　第２節　丘陵頂部の調査……（野口・牧本）226
　第３節　西斜面部の調査……（牧本）237
　第４節　東斜面部・丘陵裾部の調査……（家塚・牧本）239
　第５節　遺物観察表…… 266
第５章　自然科学分析の成果
　第１節　門前上屋敷遺跡出土木製品の樹種……（鳥取大学農学部　古川郁夫）270
　第２節　門前上屋敷遺跡における自然科学分析……（株式会社　古環境研究所）272
　第３節　門前上屋敷遺跡出土ガラス玉成分分析……（株式会社　パレオラボ）282
　第４節　門前上屋敷遺跡出土須恵器の胎土分析……（岡山理科大学　白石　純）284
　第５節　門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡 14 Ｃ年代測定業務（パリノ・サーヴェイ株式会社）286
　第６節　門前鎮守山城跡堀切出土炭化物の年代測定結果報告書…（株式会社加速器分析研究所）291
第６章　まとめ

第１節　古墳時代以前の門前上屋敷遺跡の集落形態……（牧本）293
第２節　古代末から中世前期の門前上屋敷遺跡の集落形態……（牧本）294
第３節　門前上屋敷遺跡からみた中世田畠の様相……（牧本）295
第４節　15・16 世紀の門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡　……（牧本）296
第５節　鉄関連遺物から見た門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡の特徴……（牧本・北・穴澤）298
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　名和淀江道路関係遺跡位置図
第２図　門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡調査区境界図
第３図　門前地区遺跡調査区割り図
第４図　門前上屋敷遺跡15区試掘トレンチ
第５図　門前上屋敷遺跡15区試掘トレンチ出土遺物
第６図　門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡位置図
第７図　周辺遺跡分布図
第８図　調査区配置図
第９図　基本層序①
第10図　基本層序②
第11図　基本層序③
第12図　縄文～古墳時代遺構配置図
第13図　古代～中世遺構配置図①
第14図　中世遺構配置図②
第15図　中世遺構配置図③
第16図　中世以降遺構配置図
第17図　遺構配置図
第18図　掘立柱建物１・出土遺物
第19図　掘立柱建物２・出土遺物
第20図　柱穴１～12
第21図　柱穴13～22・出土遺物
第22図　土坑36・出土遺物
第23図　土坑37
第24図　土坑38・出土遺物
第25図　土坑39・出土遺物
第26図　土坑40・出土遺物
第27図　土坑41
第28図　土坑42・出土遺物
第29図　土坑43
第30図　たわみ１・出土遺物
第31図　ピット出土遺物
第32図　包含層出土遺物
第33図　遺構に伴わない遺物
第34図　遺構配置図（古代以前）
第35図　柱穴23～40
第36図　柱穴出土遺物
第37図　火処１
第38図　ピット及び遺構に伴わない遺物①
第39図　遺構に伴わない遺物②
第40図　遺構配置図（中世以降・下層）
第41図　遺構配置図（中世以降・中層）
第42図　遺構配置図（中世以降・上層）
第43図　溝３・21・出土遺物
第44図　柱穴41
第45図　溝22～25・出土遺物
第46図　溝26
第47図　石列１・出土遺物
第48図　土坑44・出土遺物
第49図　遺構に伴わない遺物
第50図　遺構配置図
第51図　土坑45
第52図　土坑46
第53図　溝27・出土遺物
第54図　遺構配置図
第55図　柵列３・出土遺物
第56図　柱穴42～47
第57図　土坑47・出土遺物
第58図　土坑48
第59図　たわみ２・出土遺物
第60図　溝28・出土遺物
第61図　石列２・出土遺物
第62図　耕作痕２・３
第63図　遺構に伴わない遺物①
第64図　遺構に伴わない遺物②

第65図　遺構配置図（古代以前）
第66図　竪穴住居１
第67図　竪穴住居５
第68図　竪穴住居５出土遺物
第69図　竪穴住居６
第70図　掘立柱建物３
第71図　柱穴48～50
第72図　柱穴51～54
第73図　土坑49
第74図　土坑50
第75図　土坑51
第76図　遺構に伴わない遺物
第77図　遺構配置図（中世以降）
第78図　堀立柱建物４・出土遺物
第79図　土坑52
第80図　土坑53・54　出土遺物
第81図　溝28
第82図　遺構に伴わない遺物
第83図　調査区配置図
第84図　遺構配置図（古墳時代以前）
第85図　竪穴住居７
第86図　竪穴住居７出土遺物
第87図　竪穴住居８
第88図　竪穴住居８出土遺物
第89図　土坑55
第90図　土坑56
第91図　土坑57
第92図　土坑58
第93図　土坑59
第94図　遺構に伴わない遺物①
第95図　遺構に伴わない遺物②
第96図　遺構に伴わない遺物③
第97図　遺構に伴わない遺物④
第98図　遺構に伴わない遺物⑤
第99図　遺構配置図（古代）
第100図　段状遺構１
第101図　堀立柱建物５・出土遺物
第102図　段状遺構２
第103図　堀立柱建物６
第104図　土坑60
第105図　段状遺構１・２出土遺物①
第106図　段状遺構１・２出土遺物②
第107図　遺構に伴わない遺物
第108図　遺構配置図（中世・造成以前）①
第109図　遺構配置図（中世・造成以前）②
第110図　遺構配置図（中世・造成以前）③
第111図　堀立柱建物７・出土遺物
第112図　柵列４
第113図　堀立柱建物８～11・柵列５
第114図　堀立柱建物８
第115図　堀立柱建物９
第116図　掘立建立物10
第117図　堀立柱建物11・出土遺物
第118図　柵列５・出土遺物
第119図　土坑61・出土遺物
第120図　土坑62
第121図　土坑63・出土遺物
第122図　土坑64
第123図　集石１
第124図　道路１・２
第125図　道路１・２出土遺物
第126図　ピット出土遺物
第127図　水田１・畠１・３
第128図　水田２・畠２・３
第129図　水田１内溝出土遺物
第130図　水田１出土遺物①
第131図　水田１出土遺物②
第132図　水田２出土遺物
第133図　畠１出土遺物
第134図　畠２出土遺物
第135図　畠３出土遺物①
第136図　畠３出土遺物②
第137図　畠３出土遺物③
第138図　石列３
第139図　大畦畔１
第140図　溝29～31
第141図　大畦畔１・溝29～30出土遺物
第142図　耕作痕４
第143図　包含層出土遺物①
第144図　包含層出土遺物②
第145図　包含層出土遺物③
第146図　包含層出土遺物④
第147図　包含層出土遺物⑤
第148図　遺構に伴わない遺物①
第149図　遺構に伴わない遺物②
第150図　遺構配置図（中世・造成以降）
第151図　第２次造成土出土遺物
第152図　第２次造成土以前出土遺物①

第153図　第２次造成土以前出土遺物②
第154図　石列４
第155図　第１次造成土出土遺物
第156図　堀立柱建物12
第157図　堀立柱建物12出土遺物
第158図　柵列６出土遺物
第159図　堀立柱建物13
第160図　堀立柱建物13出土遺物
第161図　堀立柱建物14・出土遺物
第162図　堀立柱建物15・出土遺物
第163図　柱穴54・出土遺物
第164図　柱穴55・出土遺物
第165図　柱穴56・出土遺物
第166図　土坑65・出土遺物
第167図　土坑66・出土遺物
第168図　土坑67・出土遺物
第169図　ピット出土遺物
第170図　墓標１・２
第171図　墓標３～９
第172図　墓標10～13
第173図　遺構に伴わない遺物
第174図　遺構配置図（古代以前）
第175図　土坑68
第176図　土坑６
第177図　遺構に伴わない遺物
第178図　遺構配置図（中世以降・下層）
第179図　遺構配置図（中世以降・中層）
第180図　遺構配置図（中世以降・上層）
第181図　耕作痕５
第182図　溝８①
第183図　溝８②
第184図　溝８出土遺物
第185図　溝９・出土遺物
第186図　溝８・９出土遺物
第187図　耕作痕６
第188図　土坑69・出土遺物
第189図　溝19・出土遺物
第190図　溝20・落ち込み１・出土遺物
第191図　耕作痕７・出土遺物
第192図　包含層出土遺物①
第193図　包含層出土遺物②
第194図　遺構配置図
第195図　竪穴住居２ａ・ｂ・ｃ
第196図　竪穴住居２ａ・ｂ
第197図　竪穴住居２ｃ
第198図　竪穴住居２ａ・ｂ・ｃ出土遺物
第199図　竪穴住居４ａ・ｂ
第200図　竪穴住居４ａ・ｂ・出土遺物
第201図　竪穴住居９・出土遺物
第202図　遺構に伴わない遺物①
第203図　遺構に伴わない遺物②
第204図　遺構に伴わない遺物③
第205図　遺構に伴わない遺物④
第206図　堀立柱建物16
第207図　堀立柱建物17
第208図　堀立柱建物18・出土遺物
第209図　土坑70・出土遺物
第210図　土坑71・出土遺物
第211図　溝32・33
第212図　溝34・出土遺物
第213図　耕作痕８～10①
第214図　耕作痕８～10②
第215図　落ち込み２
第216図　遺構に伴わない遺物①
第217図　遺構に伴わない遺物②
第218図　門前鎮守山城跡調査前地形測量図
第219図　門前鎮守山城跡・門前上屋敷遺跡10・13・14区調査後地形測量図
第220図　門前鎮守山城跡東側調査区際土層断面
第221図　土塁・堀切
第222図　堀切
第223図　土塁・堀切土層横断面
第224図　土塁土層縦断面
第225図　堀切工具痕
第226図　土塁・堀切出土遺物
第227図　堀切内大型礫出土状況
第228図　盛土遺構２
第229図　土坑１
第230図　土坑２
第231図　土坑３
第232図　土坑４
第233図　土坑５
第234図　土坑７
第235図　土坑７出土遺物
第236図　土坑８
第237図　土坑９

第238図　集石遺構２
第239図　集石遺構２出土遺物
第240図　集石遺構３
第241図　集石遺構４
第242図　段状遺構３・４出土遺物
第243図　段状遺構３・４、土坑12
第244図　盛土遺構１出土遺物
第245図　盛土遺構１下層出土遺物
第246図　盛土遺構１
第247図　盛土遺構１土層断面
第248図　土坑10
第249図　土坑10出土遺物
第250図　土坑６
第251図　土坑11
第252図　土坑13・14
第253図　土坑15
第254図　土坑15出土遺物
第255図　段状遺構１・２
第256図　段状遺構１・２出土遺物
第257図　段状遺構５出土遺物
第258図　段状遺構５・６、集石遺構７
第259図　段状遺構６出土遺物①
第260図　段状遺構６出土遺物②
第261図　段状遺構６出土遺物③
第262図　集石遺構１
第263図　集石遺構５
第264図　溝３出土遺物
第265図　集石遺構６、溝２～４、棚状遺構
第266図　Ｄ３グリッド整地土内出土遺物
第267図　溝１
第268図　溝１出土遺物
第269図　石組遺構１・２
第270図　石組遺構１～３
第271図　石組遺構１出土遺物
第272図　石組遺構２出土遺物①
第273図　石組遺構２出土遺物②
第274図　石組井戸
第275図　石組井戸・石敷き遺構
第276図　石敷き遺構出土遺物
第277図　石蓋暗渠
第278図　道路状遺構
第279図　Ｐ８出土遺物
第280図　造成土中出土遺物
第281図　造成土上面出土遺物
第282図　造成土下包含層出土遺物①
第283図　造成土下包含層出土遺物②
第284図　門前上屋敷遺跡における植物珪酸体分析結果
第285図　門前上屋敷遺跡における花粉ダイヤグラム
第286図　門前上屋敷遺跡出土須恵器の産地推定（K_2O－CaO散布図）
第287図　門前上屋敷遺跡出土試料の産地推定（TiO_2－CaO散布図）
第288図　15・16世紀の門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡遺構配置図
第289図　門前上屋敷遺跡鉄関連遺物構成図①
第290図　門前上屋敷遺跡鉄関連遺物構成図②
第291図　門前上屋敷遺跡鉄関連遺物構成図③
第292図　門前鎮守山城跡鉄関連遺物構成図

挿表目次

表１　門前上屋敷遺跡15区試掘トレンチ出土遺物観察表
表２～25　門前上屋敷遺跡土器観察表(１)～(24)
表26　門前上屋敷遺跡石器観察表
表27～29　門前上屋敷遺跡鉄器観察表(１)～(３)
表30　門前上屋敷遺跡土製品観察表
表31　門前上屋敷遺跡木製品観察表
表32　門前上屋敷遺跡ガラス製品観察表
表33～36　門前鎮守山城跡出土遺物観察表(１)～(４)
表37　門前上屋敷遺跡における植物珪酸体分析結果
表38　門前上屋敷遺跡における花粉分析結果
表39　分析対象遺物一覧
表40　定量結果一覧
表41　分析試料の胎土分析結果一覧表
表42　門前鎮守山城跡放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果
表43　門前上屋敷遺跡放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果
表44～48　門前上屋敷遺跡鉄関連遺物観察表(１)～(５)
表49～50　門前鎮守山城跡鉄関連遺物観察表(１)～(２)

図版目次

巻頭図版１　１．門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡調査地遠景（平成17年度調査後，北から）
　　２．門前上屋敷遺跡16区溝８・９完掘状況（南東から）
巻頭図版２　１．門前上屋敷遺跡15区中世田畠検出状況（北から）
　　２．門前上屋敷遺跡造成土土層断面（南西から）
巻頭図版３　門前上屋敷遺跡出土の磁器
巻頭図版４　１．門前鎮守山城跡土塁・堀切完掘状況（西から）
　　２．門前鎮守山城跡土坑10土師器出土状況
巻頭図版５　門前鎮守山城跡盛土遺構１断ち割り状況（東から）
巻頭図版６　門前鎮守山城跡土坑15出土土師器

ＰＬ.１　１．門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡調査前状況（上空から）
　　２．門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡調査前遠景（南東上空から）
ＰＬ.２　１．８区完掘状況（南から）
　　２．掘立柱建物１完掘状況（北東から）
ＰＬ.３　１．掘立柱建物２完掘状況（南東から）
　　２．土坑36完掘状況（北東から）
　　３．土坑38完掘状況（東から）
　　４．土坑39遺物出土状況（北東から）
　　５．土坑40完掘状況（南から）
　　６．土坑41・42完掘状況（南から）
ＰＬ.４　１．９区完掘状況（東から）
　　２．溝３・21完掘状況（南東から）
ＰＬ.５　１．溝22～25完掘状況（南から）
　　２．石列１完掘状況（南から）
　　３．土坑44遺物出土状況（北から）
ＰＬ.６　１．10・13区完掘状況（北東から）
　　２．土坑46石材出土状況（南東から）
ＰＬ.７　１．11区完掘状況（北西から）
　　２．柵列３完掘状況（北東から）
ＰＬ.８　１．土坑47石出土状況（北西から）
　　２．溝28完掘状況（北から）
　　３．耕作痕３完掘状況（北東から）
ＰＬ.９　１．12区西側完掘状況（南西から）
　　２．12 区東側完掘状況（北西から）
ＰＬ.10　１．竪穴住居１完掘状況（北西から）
　　２．竪穴住居５完掘状況（北東から）
　　３．掘立柱建物３完掘状況（北から）
ＰＬ.11　１．土坑49完掘状況（東から）
　　２．土坑50完掘状況（南東から）
　　３．土坑51完掘状況（北東から）
ＰＬ.12　１．掘立柱建物４完掘状況（北西から）
　　２．土坑52石出土状況（北西から）
　　３．土坑53・54完掘状況（北東から）
ＰＬ.13　１．14区南西側完掘状況（南から）
　　２．14区北東側完掘状況（南から）
ＰＬ.14　１．15 区完掘状況（西から）
　　２．竪穴住居７完掘状況（東から）
　　３．竪穴住居８完掘状況（東から）
ＰＬ.15　１．土坑55完掘状況（北から）
　　２．土坑56完掘状況（東から）
　　３．土坑57完掘状況（西から）
　　４．土坑58完掘状況（東から）
　　５．土坑61遺物出土状況（南東から）
　　６．段状遺構１・２・道路１・２完掘状況（北西から）
ＰＬ.16　１．田畠完掘状況（北から）
　　２．水田２・畠２完掘状況（東から）
ＰＬ.17　１．水田２畦土層断面（東から）
　　２．畠２断ち割り状況（南東から）
　　３．道路１・２完掘状況（東から）
ＰＬ.18　１．造成土面完掘状況（南東から）
　　２．造成土際石列４検出状況（北から）
　　３．掘立柱建物12～15、柵列６完掘状況（北東から）
ＰＬ.19　１．土坑68完掘状況（東から）
　　２．土坑６完掘状況（南東から）
　　３．耕作痕７（南西から）
　　４．溝８完掘状況（東から）
ＰＬ.20　１．溝８・９完掘状況（東から）
　　２．溝８・９土層断面（西から）
ＰＬ.21　１．竪穴住居２完掘状況（東から）
　　２．竪穴住居４完掘状況（東から）
　　３．竪穴住居９完掘状況（北西から）
　　４．掘立柱建物16～18完掘状況（北から）

５．耕作痕８～10検出状況（北から）
６．溝34完掘状況（北から）
ＰＬ.22　８・９・17区出土遺物
ＰＬ.23　10・11・13区出土土器（１）
ＰＬ.24　11・12区出土遺物
ＰＬ.25　14・15区出土土器（１）
ＰＬ.26　14・15区出土土器（２）
ＰＬ.27　14・15区出土土器（３）
ＰＬ.28　14・15区出土土器（４）
ＰＬ.29　14・15区出土土器（５）
ＰＬ.30　14・15区出土土器（６）
ＰＬ.31　14・15区出土土器（７）
ＰＬ.32　14・15区出土土器（８）
ＰＬ.33　14・15区出土土器（９）
ＰＬ.34　14・15区出土土器（10）
ＰＬ.35　14・15区出土土器（11）
ＰＬ.36　14・15区出土土器（12）
ＰＬ.37　14・15区出土土器（13）
ＰＬ.38　14・15区出土土器（14）
ＰＬ.39　14・15区出土土器（15）
ＰＬ.40　16区出土遺物
ＰＬ.41　16区溝８出土種実
ＰＬ.42　17区出土遺物
ＰＬ.43　17区他出土遺物
ＰＬ.44　門前上屋敷遺跡出土鉄製品
ＰＬ.45　門前上屋敷遺跡出土鉄滓
ＰＬ.46　門前上屋敷遺跡出土鉄製品Ｘ線写真（１）
ＰＬ.47　門前上屋敷遺跡出土鉄製品Ｘ線写真（２）
ＰＬ.48　門前上屋敷遺跡出土鉄製品Ｘ線写真（３）・羽口
ＰＬ.49　門前上屋敷遺跡出土石器（１）
ＰＬ.50　門前上屋敷遺跡出土石器（２）
ＰＬ.51　門前上屋敷遺跡出土石器（３）・ガラス製品
ＰＬ.52　１．調査前遠景（北西上空から）
２．調査地完掘状況（西上空から）
ＰＬ.53　１．西側斜面遺構完掘状況（西から）
２．土塁完掘状況（北西から）
ＰＬ.54　１．堀切完掘状況（北西から）
２．堀切完掘状況（東から）
ＰＬ.55　１．堀切底面工具痕検出状況（西から）
２．堀切土層断面C-C´ライン（西から）
３．堀切土層断面D-D´ライン（西から）
ＰＬ.56　１．土塁西側土層縦断面１（北西から）
２．土塁西側土層断面２（北西から
３．土塁東側土層縦断面（北西から）
ＰＬ.57　１．盛土遺構２完掘状況（東から）
２．盛土遺構２完掘状況（南から）
ＰＬ.58　１．土坑１完掘状況（南から）
２．土坑２炭化材出土状況（北西から）
３．土坑３完掘状況（南から）
４．土坑４完掘状況（北西から）
５．土坑４炭化材出土状況（西から）
６．土坑５炭化材出土状況（北西から）
ＰＬ.59　１．土坑７・８完掘状況（南から）
２．土坑９完掘状況（西から）
３．集石遺構２検出状況（北西から）
４．集石遺構３検出状況（北から）
５．集石遺構４検出状況（北から）
ＰＬ.60　１．段状遺構３完掘状況（北西から）
２．段状遺構３完掘状況（南から）
３．段状遺構３掘り下げ状況（南から）
４．段状遺構４完掘状況（南から）
ＰＬ.61　１．盛土遺構１完掘状況（東から）
２．盛土遺構１完掘状況（南から）
３．盛土遺構１断ち割り状況（東から）
ＰＬ.62　１．盛土遺構１断ち割り状況２（北西から）
２．土坑10鉄鍋検出状況（西から）
３．土坑10鉄鍋出土状況１（北西から）
４．土坑10鉄鍋出土状況２（北東から）
ＰＬ.63　１．土坑10鉄鍋内土師器出土状況１（北東から）
２．土坑10鉄鍋内土師器出土状況２(北から)
３．土坑10完掘状況（東から）
ＰＬ.64　１．土坑６完掘状況（北西から）
２．土坑11完掘状況（西から）
３．土坑13完掘状況（北から）
４．土坑14完掘状況（南東から）
５．土坑15遺物出土状況（南東から）
ＰＬ.65　１．段状遺構１完掘状況（南東から）
２．段状遺構２完掘状況（西から）
ＰＬ.66　１．段状遺構１盛土土層断面（南東から）
２．段状遺構２盛土土層断面（東から）
３．段状遺構５完掘状況（東から）
４．段状遺構６完掘状況（北から）
５．段状遺構６遺物出土状況（北から）
６．集石遺構１検出状況（北西から）

ＰＬ.67　１．集石遺構５検出状況（北西から）
２．集石遺構６、溝２～４完掘状況(東から)
３．集石遺構７検出状況（西から）
４．溝１完掘状況（北から）
５．石組遺構１・２・３完掘状況(南東から)
ＰＬ.68　１．石組遺構１・２掘り下げ状況(南東から)
２．石組遺構１石積み状況（南西から）
３．石組遺構３掘り下げ状況（東から）
ＰＬ.69　１．石組井戸、石敷き遺構完掘状況(南から)
２．石蓋暗渠検出状況（西から）
３．石蓋暗渠蓋除去状況（西から）
ＰＬ.70　門前鎮守山城跡出土遺物（１）
ＰＬ.71　門前鎮守山城跡出土遺物（２）土坑10
ＰＬ.72　門前鎮守山城跡出土遺物（３）土坑15（１）
ＰＬ.73　門前鎮守山城跡出土遺物（４）土坑15（２）
ＰＬ.74　門前鎮守山城跡出土遺物（５）
ＰＬ.75　門前鎮守山城跡出土遺物（６）
ＰＬ.76　門前鎮守山城跡鉄関連遺物
ＰＬ.77　１．門前鎮守山城跡鉄器Ｘ線写真
２．門前鎮守山城跡段状遺構６出土粒状滓
３．門前鎮守山城跡段状遺構６出土鍛造薄片
４．門前鎮守山城跡出土古銭
ＰＬ.78　門前上屋敷遺跡出土材写真（１）
ＰＬ.79　門前上屋敷遺跡出土材写真（２）
ＰＬ.80　門前上屋敷遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）
ＰＬ.81　門前上屋敷遺跡の花粉・胞子
ＰＬ.82　上　分析対象遺物
（左・資料№１、右・資料№２）
下　スペクトル図
（緑・資料№１、茶・資料№２）

文中写真目次

文中写真１　掘立柱建物８～11・柵列５
文中写真２　Ｐ８遺物出土状況
文中写真３　墓標検出状況
文中写真４　墓標
文中写真５　溝８石検出状況
文中写真６　溝８出土種実

第１章　調査の経緯

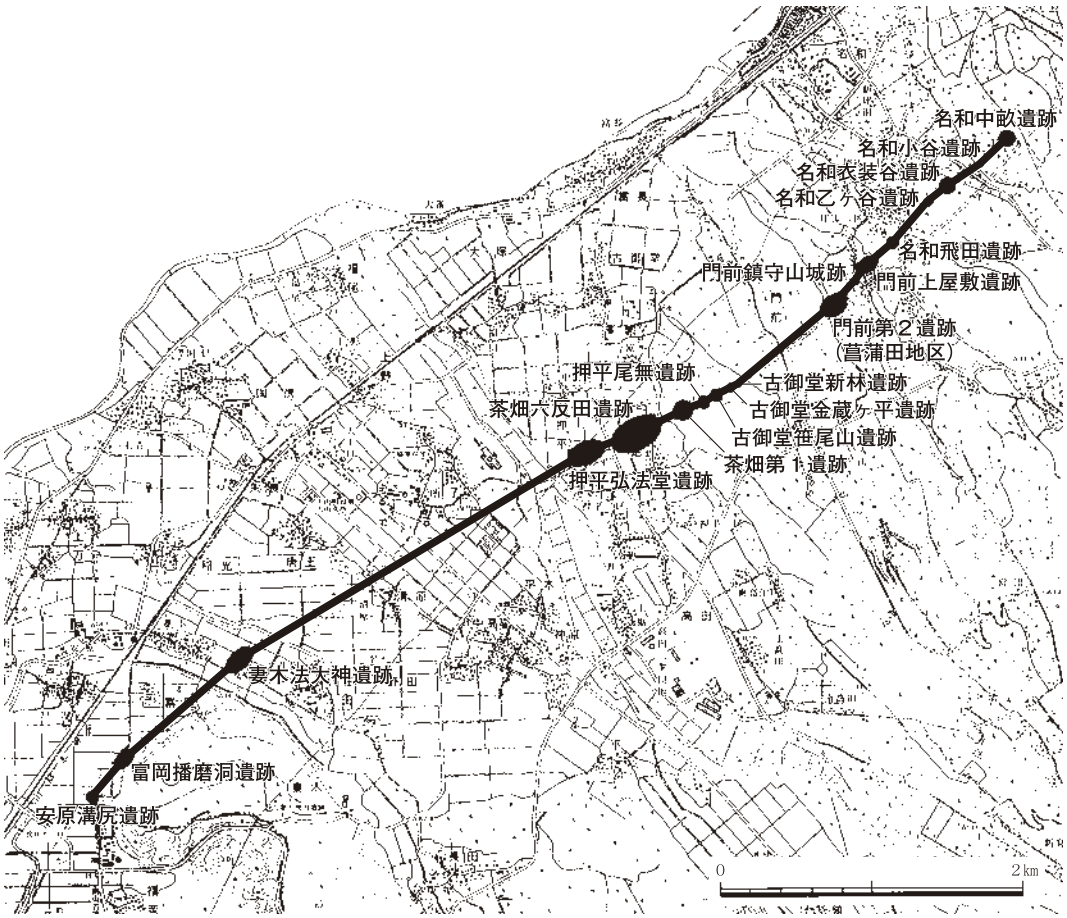
第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、平成 17・18 年度に一般国道９号名和淀江道路の改築に伴い行った、西伯郡大山町門前地内の工事予定地に存在する、周知の埋蔵文化財包蔵地である門前上屋敷遺跡と門前鎮守山城跡の記録保存を目的としたものである。なお、門前上屋敷遺跡は、第２・３次調査となる。

山陰地方では、国道９号線の交通混雑緩和、荒天時の交通障害解消、災害時の緊急輸送の代替道路確保及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県西部地域では、米子道路、名和淀江道路が自動車専用道路として計画、施工されている。

このうち大山町（旧大山町・名和町）を通る名和淀江道路の計画地内及び隣接地には、多数の周知の遺跡があり、建設に先立って計画地内の遺跡並びに遺跡の範囲を確認する必要性が生じた。このため、平成２年度から大山町、名和町各教育委員会（いずれも当時）によって、国庫補助事業として逐次試掘・確認調査が行われた。

その結果を受け、文化財保護法に基づく手続きを踏まえ、平成 12 年度から平成 16 年度にかけて、（財）鳥取県教育文化財団が調査主体となり、安原溝尻遺跡など 17 箇所の遺跡の発掘調査を行い、各報告書が刊行された。



第１図　名和淀江道路関係遺跡位置図

門前上屋敷遺跡、門前鎮守山城跡は、旧名和町教育委員会が平成 14 年度に国庫補助事業として試掘調査を行い、遺構及び遺物を確認したものである。その結果を受け、平成 16 年度には、（財）鳥取県教育文化財団が門前上屋敷遺跡のうち、橋脚及び側道部分（１～７区）を調査し、報告書を刊行している。

平成 17 年４月からは、調査組織の改組があり国土交通省関連事業については、鳥取県埋蔵文化財センターが調査主体となり、発掘調査を行うこととなった。

平成 17 年度は、門前上屋敷遺跡では、当初側道及び橋脚部分（８～ 10 区）のみが対象であったが、急遽工事に設計変更が生じ緑地帯部分（14 区）、排水管埋設箇所（11 ～ 13 区）も追加となった。また、門前鎮守山城跡では、丘陵部及び丘陵裾部が対象地となった。国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所は、文化財保護法第 94 条に基づく埋蔵文化財発掘の通知を行った上、鳥取県教育委員会教育長の指示により、鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を担当着手し、文化財保護法第 99 条に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を行った。

平成 18 年度は、門前上屋敷遺跡の町道迂回路及び緑地帯部分（15 区）、農道敷設箇所（16 区）及び植樹帯部分（17 区）が調査対象となり、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所は、文化財保護法第 94 条に基づく埋蔵文化財発掘の通知を行った上、鳥取県教育委員会教育長の指示により、鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を担当着手し、文化財保護法第 99 条に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を行った。

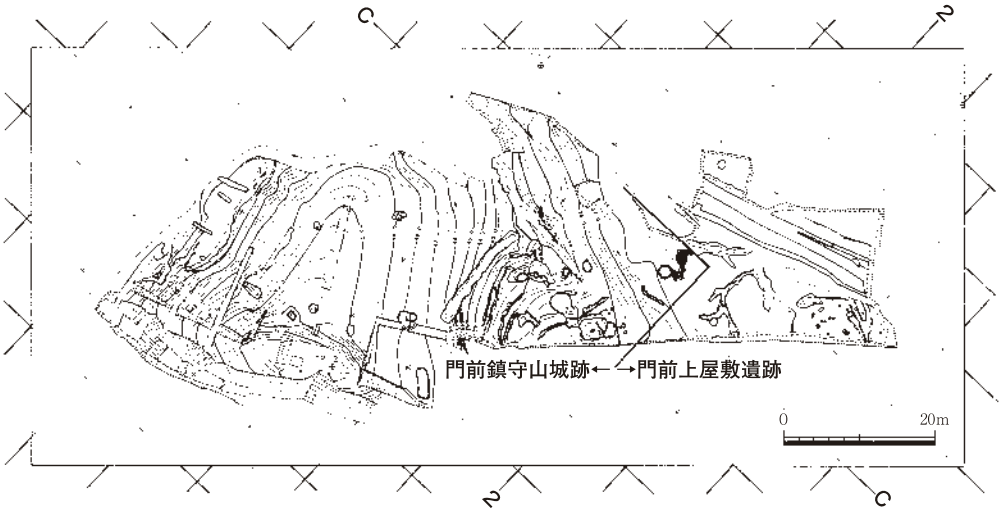
【参考文献】

名和町教育委員会 2000『名和町内遺跡分布調査報告書』名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第 26 集
名和町教育委員会 2004『名和町内遺跡発掘調査報告書』名和町文化財調査報告書第 33 集
大山町教育委員会 1990『大山町内遺跡発掘調査報告書　安原所在遺跡・平第２遺跡』大山町埋蔵文化財調査報告書 10
鳥取県教育文化財団 2005『門前上屋敷遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 105

第２節　調査の経過

１　遺跡、調査区の名称と調査方法

門前鎮守山城跡と門前上屋敷遺跡は互いに隣接し、本来は一体となる遺跡と考えてよいが、便宜的に丘陵から山裾部分を門前鎮守山城跡、平坦部分を門前上屋敷遺跡として分けることとし、門前鎮守



第２図　門前上屋敷・門前鎮守山調査区境界図

山城跡の基準杭での２ラインを境に遺跡名を変えることとした。（第２図）

平成 17 年度門前上屋敷遺跡の調査地は、調査区が細切れであるために、（財）鳥取県教育文化財団調査に引き続き順に便宜的に名称を付したものである。現況では８区は畑地及び住宅地、９区は水田及び畑地、10 区は住宅地及び道路である。その後設計変更があり、排水管埋設箇所（11 区～ 13 区）、緑地帯部分（14 区）も調査対象となった（第３図）。現況は、11 区～ 13 区は畑地及び道路、14 区は宅地である。

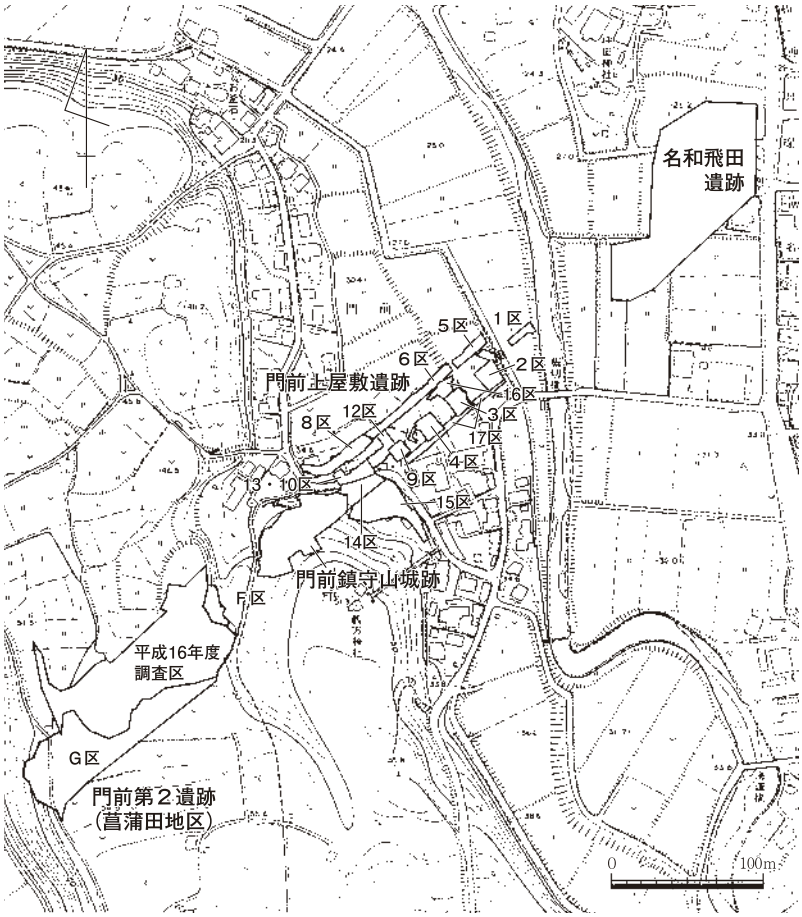
各地区とも、事前に世界測地系公共座標に載る基準点及び方眼杭の設置を業者委託し、調査区内に 10 m方眼の基準杭を設定し、グリッドを設けた。その結果、東西軸は北からＡ～W、南北軸は東から２～ 14 となった。グリッド名は、東西南北軸交点の北東側杭の名称をとって呼称することとし、座標はＢ 14 杭（X: － 54360 m、Y: － 62690 m）、Ｖ２杭（X: － 54240 m 、Y: － 62890 m）などとなった。11 区については、年度中途からの追加の調査区で狭小であったために、10 m間隔での方眼杭が設置できなかったために、なるべく公共座標軸に載るような基準点を設置した。座標は、－Ｆ（－３）Ｅ１杭（X: － 55720 m、Y: － 75769 m）、－Ｆ（－４）Ｎ６杭（X: － 55714 m、Y: － 75760 m）となった。標高値は、３級基準点 H10-3-6 の 31.015 mを使用した。

さらに、14 区については、地形的な特徴を勘案し門前鎮守山城跡のグリッド名を基本的に踏襲し、調査員により方眼杭を設置した。

平成 18 年度門前上屋敷遺跡の調査地は、現況は 15 区が宅地、16・17 区が畑地である。この地区の基準点及び方眼測量は、平成 17 年度末に業者委託し、世界測地系公共座標に載るように調査区内に 10 m方眼の基準杭を新たに設定し、グリッドを設けた。座標は、Ｂ２杭（X：－ 55740 m、Y: － 75760 m）、Ｋ 10 杭（X: － 55830 m、Y: － 75840 m）などとなった。標高値は、３級基準点 H11-3-1 の 34.397 mを使用した。

門前鎮守山城跡の調査地は、本線掘削部分及び橋脚部分で、現況は山林及び宅地である。

調査に先立ち、４月 13 日から業者委託により調査前地形測量、竹木伐採後調査区に 10 mおきに基準杭を設置し、グリッドを設け、東西軸は北からＡ～Ｈ、南北軸は東から１～７とした。グリッド名は、東西南北軸交点の北東側杭の名称を取って呼称することとし、座標はＢ２杭（X: － 55810 m、Y: － 75860 m）、Ｈ８杭（X:



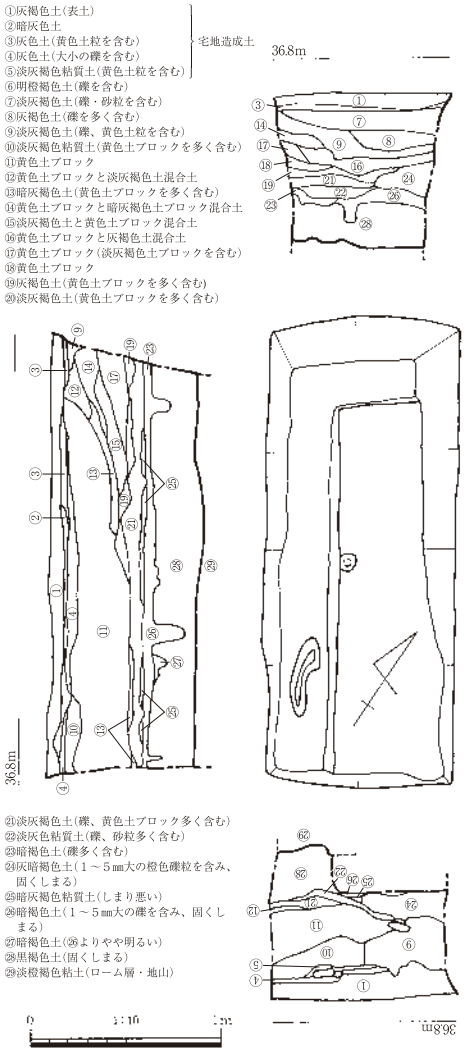
第３図　門前地区遺跡調査区割り図

－ 55870 m、Y: － 75910 m）となった。標高値は、２級基準点 H10-2-4 の 33.107 mを使用した。

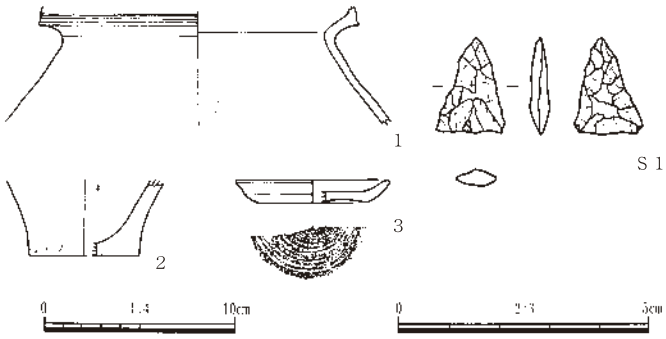
いずれの遺跡も、検出した遺構･遺物の記録には、平板、光波トランシット及び自動レベルを用い、簡易遣り方測量及び光波トランシットによる座標測量を行った。現地での写真撮影は 35㎜判、ブロニー（６×７）判及び４×５判カメラにより地上又は写真用ヤグラ上から行った。また、遺跡完掘状況写真については、ラジコンヘリコプターからの空中写真撮影（ブロニー判カメラ使用）も併せて行った。遺物写真撮影は平成 18 年度に行い、ブロニー（６×７）判及び４×５判カメラを用いた。いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用した。

２　調査の経過（平成 17 年度）

門前上屋敷遺跡の調査は、４月 25 日に重機による表土剥ぎ作業及び作業員オリエンテーションを行い、９区については 4 月 26 日から６月 30 日にかけて人力による検出作業を行った。その結果、中・近世の石列、溝、弥生時代中期の竪穴住居、掘立柱建物等を検出した。８区は、建物を撤去した後の６月２・３日に重機による表土剥ぎ作業を行い、６月６日から９月２日にかけて検出作業を行った。その結果、近世の掘立柱建物、中世の土坑等を検出した。12 区は、９月１日に重機による表土剥ぎ作業を行い、９月２日から 10 月 20 日にかけて検出作業を行った。その結果、中世の掘立柱建物、土坑、溝、弥生時代の掘立柱建物、縄文時代の落とし穴などを検出した。11 区は、11 月 17 日に重機による表土剥ぎ作業を行い、10 月 18 日から 12 月８日にかけて検出作業を行った。その結果、中･近世の石列、耕作痕、中世の掘立柱建物、土坑等を検出した。10・13 区は、集落内の町道を迂回させた後に、11 月 24・25 日に重機による表土剥ぎを行い、11 月 30 日から 12 月 21 日にかけて検出作業を行った。その結果､中･近世の溝､土坑、縄文時代の落とし穴を検出した。現道下には上下水道があり、幅１～２m分は遺構検出面以下まで掘削が及んでいた。14 区は、9 月 22 日から平成 18 年１月 31 日にかけて検出作業を行った。その結果、中世の造成面、土坑、溝等を検出した。調査面積は、各調査区とも遺構面２面の延べ 2,210㎡となった。



第４図　門前上屋敷遺跡15区試掘トレンチ



第５図　門前上屋敷遺跡15区試掘トレンチ出土遺物

また、緑地帯部分で確認された造成土の範囲を捉える必要が生じたために、町道迂回路工事範囲に当たる箇所（後に 15 区と呼称）に、試掘トレンチ１箇所を設定し８月 24 日から８月 31 日にかけて

掘り下げを行った。その結果、造成土の範囲が更に南側まで及ぶことが確認されるとともに、遺構面が４面程度あることが推察され、遺物も採取された（第４・５図参照）。このため、国土交通省との協議の結果、当初計画では調査対象外であった町道迂回路部分が平成 18 年度の調査対象となった。しかし、この時点で確認した造成土は、後の本調査で江戸時代以降の造成土であったことが判明している。

門前鎮守山城跡の調査は、竹木伐採中の５月 25 日に調査前航空写真撮影を行い、５月 30・31 日に東側丘陵裾部を重機によって表土剥ぎを行った。検出作業は、平成 17 年６月６日から平成 18 年１月 31 日にかけて行った。その結果、土塁、堀切、盛土遺構、段状遺構、土坑、石組み遺構、石組井戸、石敷き遺構などを検出した。調査面積は、一部遺構面２面の延べ 2,702㎡となった。

門前上屋敷遺跡、門前鎮守山城跡の遺物整理作業及び報告書作成は、調査期間の延長により、当該年度での作成が困難となり、国土交通省と協議の結果、平成 18 年度に行うこととなった。

３　調査の経過 (平成 18 年度)

平成 18 年度は、門前上屋敷遺跡 15 ～ 17 区が調査対象となった。一部の調査区の表土剥ぎ作業については、年度当初からの作業実施を向かえるため平成 17 年３月６日から９日にかけて行った。道路工事の進捗を勘案し、16・17 区から調査を開始した。４月５日に作業員オリエンテーション及び人権研修を行い、４月６日から６月９日にかけて検出作業を行い、その結果、平成 16 年度に検出された中世の大溝の延長部分、掘立柱建物、中世の耕作痕、弥生時代中期の竪穴住居などを検出した。

15 区は、５月 12 日から８月 31 日にかけて重機表土剥ぎ及び検出作業を行った。その結果、中世の造成面、造成面上で掘立柱建物、柵列など、造成以前の中世の田畠、土坑、掘立柱建物、平安時代の段状遺構、弥生時代中期の竪穴住居などを検出した。その後測量作業を行い、すべての作業を９月 15 日に終了した。調査面積は、各調査区とも遺構面４面の延べ 4,804㎡となった。

門前上屋敷遺跡、門前鎮守山城跡の遺物整理作業は、６月１日から行い、報告書を平成 19 年３月に刊行した。

第３節　調査体制

〇平成 17 年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所　　長　　田中　弘道

次　　長　　戸井　　歩（兼総務係長）

総　務　係

副　主　幹　　福田　高之

発掘事業室

室　　長　　加藤　隆昭（兼調整係長）

調　整　係

文化財主事　　八峠　　興

調査第二係（名和調査事務所）

係　　長　　牧本　哲雄（門前鎮守山城跡担当）

文化財主事　　家塚　英詞（門前鎮守山城跡担当）、野口　良也（門前鎮守山城跡・茶畑六反田遺跡担当）
　　玉木　秀幸（門前上屋敷遺跡担当）

○平成 18 年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所　　長　　久保　穣二朗
次　　長　　戸井　　歩（兼総務係長）
総　務　係
副　主　幹　　福田　高之
発掘事業室
室　　長　　加藤　隆昭（兼調整係長）
調　整　係
文化財主事　　濵　　隆造
調査第二係（名和調査事務所）
係　　長　　牧本　哲雄
文化財主事　　玉木　秀幸、北　浩明

門前上屋敷遺跡　調査日誌抄

平成17年度
４月25日　オリエンテーション
４月26日　９区調査開始
６月７日　８区調査開始
６月30日　９区調査終了
８月22日　８区谷部掘り下げ
９月２日　８区調査終了
９月12日　12区調査開始
10月18日　11区調査開始
10月20日　12区調査終了
11月30日　10・13区調査開始
12月８日　11区調査終了
12月21日　10・13区調査終了
平成18年度
４月５日　オリエンテーション
４月６日　17区調査開始
４月17日　16区調査開始
５月26日　15区調査開始
６月２日　16区調査終了
６月７日　17区調査終了
７月11日　15区畠・水田検出
７月30日　現地説明会開催。65名の参加
８月29日　竪穴住居検出、掘り下げ
８月31日　15区完掘写真。現地作業終了
９月15日　測量作業終了
９月16日　報告書作成
３月30日　報告書刊行

門前鎮守山城跡　調査日誌抄

平成17年度
４月25日　オリエンテーション
５月17日　調査区内立木伐採（～６月８日）
５月20日　調査前航空写真撮影
５月30日　重機表土剥ぎ作業（～６月２日）
６月６日　丘陵頂部から検出作業開始
７月12日　土坑５・６、集石遺構１・２検出
８月17日　堀切掘り下げ開始。盛土遺構２断ち割り
９月５日　台風14号対策
９月21日　堀切完掘写真撮影
10月３日　石組遺構１・２平面図作成
10月21日　盛土遺構1下層で鉄鍋出土（土坑10）
11月６日　現地説明会開催。40名の参加。
12月９日　重機による造成土除去（～15日）
12月21日　石組遺構１・２完掘状況写真撮影
１月５日　石組遺構平面図作成
１月６日　段状遺構６で鉄滓出土
１月10日　石組暗渠検出
１月16日　石組井戸・石敷き遺構検出
１月17日　調査区完掘状況写真
１月18日　土坑15検出。土師器杯多数出土
１月26日　段状遺構５・６、石組井戸完掘状況写真撮影
１月31日　石組遺構１～３完掘写真撮影。現場作業終了
２月～３月　報告書作成作業
平成18年度
６月１日　遺物整理作業開始。報告書作成作業
３月30日　報告書刊行

第２章　遺跡の位置と環境

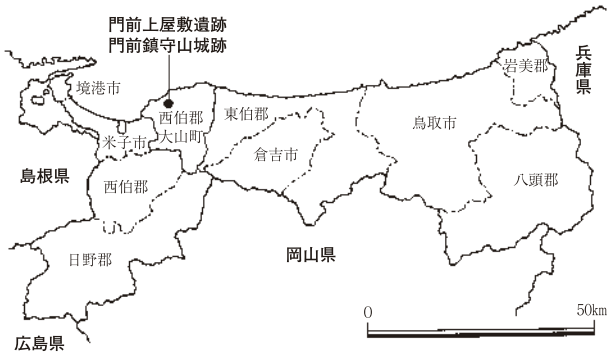
第１節　地理的環境

門前上屋敷遺跡、門前鎮守山城跡が所在する大山町は、平成 17 年３月 28 日に旧中山町、旧名和町、旧大山町が合併して誕生した町である。この町名は、中国地方最高峰であり鳥取県のシンボル的な存在でもある「大山」が所在することに由来する。当町は鳥取県西部、西伯郡の東部を占める位置にあり、県庁所在地の鳥取市からは西へ約 80km、県西部中核都市の米子市からは東へ約 20km の位置にある。町域は、南端の大山（1,729 m）を頂点に、船上山（615 m）から金屋付近の日本海に至る線を東辺とし、西辺は大山を頂点に下槙原・孝麗山（751 m）を結び保田付近の日本海に至る、南北に細長く不整逆三角形状に広がる形を呈す。東西約 15㎞、南北約 20㎞、総面積は約 189.8㎢を測り、人口は約 18,800 人（平成 18 年末）の農畜産業・観光を主な産業にする町である。

本町の地勢は、大山山系から放射状に流れる小河川により開削並びに侵食され残った、手指状に走る台地上の尾根と急峻な小渓谷が繰り返す火山性台地と、甲川、下市川、真子川、名和川、阿弥陀川流域に発達した平野部からなる。平野部は、肥沃な黒ボク地帯で、特に阿弥陀川流域は県内でも屈指の広さとなる扇状地を形成している。台地は、御来屋砂礫層上に主に大山火山灰土の堆積したもので、海岸線付近まで延びている。町内には、前述の大山山麓に源流を発する河川の他、大小計 12 本の川が日本海に注いでいる。

日本海に面した地域では、御崎港、御来屋港を中心に沿岸漁業が盛んで、ヒラメ・ハマチ・タイ・アジなどの水揚げがあり、特にウニ・板ワカメは特産品になっている。町域北側から中部域は、農業を中心とした第１次産業が盛んである。低地では水田、台地上ではブロッコリー、スイカ、果樹などの栽培が盛んである。旧名和地域は台地上にあるという特性から、多数の溜め池が形成され、農業用水として利用されている。町域南側は、高原を利用した畜産が盛んであるとともに、国立公園にも指定されている他、大山寺・大神山神社などの著名な文化財もある。また、冬季には多くのスキー客で賑わっており、四季を通じて自然豊かな景勝地を求めて多くの観光客が訪れる県内でも屈指の観光地になっている。

町内の遺跡の多くは、丘陵及び台地上に営まれている。門前上屋敷遺跡は、門前集落内の標高約 29.5 ～ 37.6 mの名和川が形成する河岸段丘上に立地している。門前鎮守山城跡は、門前上屋敷遺跡の西側に隣接し、標高約 55 mの丘陵上から丘陵裾部に展開する。（牧本）



第6図　門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡位置図

第２節　歴史的環境

旧石器時代　鳥取県内では旧石器時代の遺構を伴う遺跡は発見されていないが、近年大山山麓では発掘調査によって、後期旧石器遺物が確認されるようになった。門前第２遺跡（西畝地区）では、ＡＴ火山灰層以下（25,000 年以前）で黒曜石製ナイフ形石器･黒曜石剥片を含む石器群が確認されている。名和小谷遺跡では、出土層位は不明であるが黒曜石製国府型ナイフ形石器が出土している。

縄文時代　当該地域は、広大な大山山麓にあり、県内においてもこの時期の遺跡が多数存在する地域となっている。退休寺、羽田井、上大山、陣構、坊領、荘田などでは、草創期と考えられる有茎尖頭器が見つかっているが､層位的にはいずれも確認されていない。早期では､門前第２遺跡（菖蒲田地区）で押型文土器とともに 10 基の配石群が検出されている他、遺構は伴わないが赤坂後ロ山遺跡、退休寺飛渡り遺跡、古御堂金蔵ヶ平遺跡、上大山第１遺跡、角塚遺跡、高田第４遺跡、蛇居谷遺跡、大道原遺跡、塚田遺跡、蔵岡第１遺跡などで押型文、茶畑山道遺跡で撚糸文土器が出土している。前期では、石器工房と推定される下市築地ノ峯東通第２遺跡、名和乙ヶ谷遺跡で玦状耳飾が出土している。中期では、貯蔵穴が確認された細工塚遺跡などがある。後期では、南川遺跡で石組炉を備えた住居跡、晩期では、大塚第 3 遺跡で住居跡が見つかっている。その他、落とし穴が八重第 3 遺跡、小松谷遺跡、下甲抜堤、赤坂後ロ山遺跡など多数の遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地縁辺部が利用された様子が窺われる。

弥生時代　この時期本格的に稲作を中心とした社会が形成される。前期には米子市目久美遺跡で水田が確認されているが、この地域では、当該期の稲作関連遺構は発見されていない。前期の遺構は少なく、大塚岩田遺跡で環濠の可能性のある溝が検出されている他、樋口第１遺跡、三谷遺跡、上野第１・２遺跡、塚田遺跡、大道原遺跡などで土器が出土している。

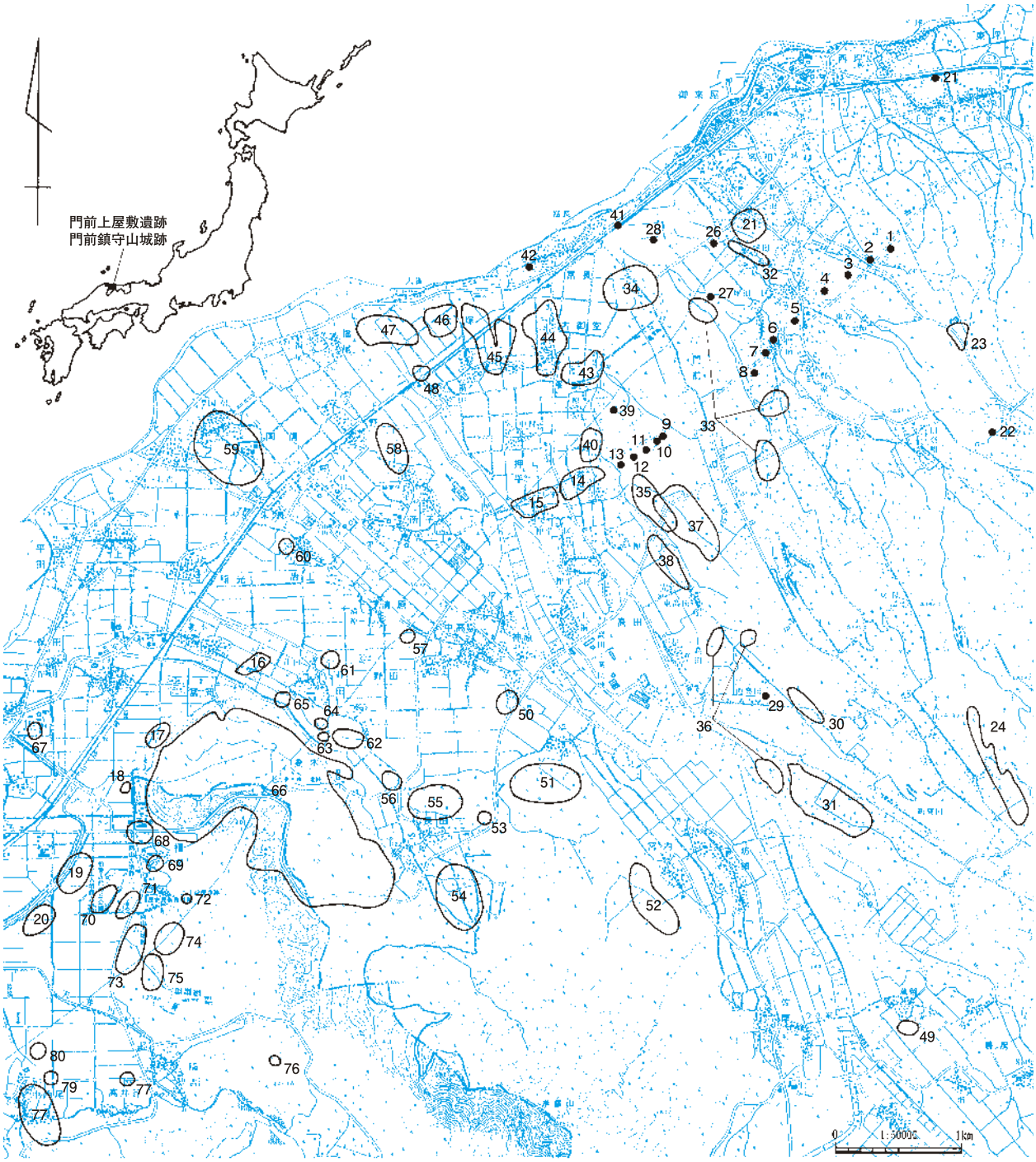
中期になると遺跡数が増え、集落遺跡として細工塚遺跡、退休寺遺跡、退休寺飛渡り遺跡、殿河内落合遺跡、押平弘法堂遺跡、門前上屋敷遺跡等が挙げられる。また、茶畑山道遺跡、茶畑第１遺跡では独立棟持柱を備える大型掘立柱建物、分銅形土製品、搬入土器を含む集落が検出され、当該地域の拠点的な集落と考えられている。

後期には､退休寺遺跡､八重第 3 遺跡､大塚塚根遺跡､押平尾無遺跡､茶畑第 2 遺跡､茶畑六反田遺跡､茶畑山道遺跡、茶畑第１遺跡、東高田遺跡など丘陵上に集落遺跡が多数造営されるようになる。その中で国史跡妻木晩田遺跡は、弥生時代中期以降約 170ha からなる複数の丘陵上に、夥しい数の住居・倉庫、首長墓である四隅突出型墳丘墓、環濠などが作られるなど、集落研究にとって重要な遺跡である。当該期には、松尾頭地区において、首長居宅と考えられる竪穴住居と近接して祭殿と考えられる二面庇の高床建物も確認されている。終末期には、首長墓である徳楽墳丘墓、松尾頭１・２号墓が築造されている。

古墳時代　古墳時代に入ると大型前方後円墳が各地に出現する。当該地域では、各時期において前方後円墳は確認されていない。前期では、小規模な方墳が茶畑第１遺跡で確認されているにすぎない。

当該地域の古墳は、ほとんどが中期から後期にかけてのものであるが、中期のもののうち、高塚古墳、ハンボ塚古墳は、葺石・埴輪などの外表施設を持つ大型円墳で、首長墳の内容を持つ。

後期になると御崎古墳群、束積古墳群、三谷古墳群、高田古墳群、門前古墳群、豊成古墳群、坪田古墳群、富長山村古墳群、蔵岡古墳群、宮内古墳群、平古墳群などが形成されている。このうち、御



第７図　周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	名和中畝遺跡	17	富岡播磨洞遺跡	33	門前古墳群	49	蔵岡第１遺跡	65	大道原遺跡
2	名和小谷遺跡	18	安原溝尻遺跡	34	富長山村古墳群	50	中高遺跡	66	妻木晩田遺跡
3	名和衣装谷遺跡	19	福岡遺跡	35	茶畑古墳群	51	平古墳群	67	今津岸ノ上遺跡
4	名和乙ヶ谷遺跡	20	井手胯遺跡	36	高田古墳群	52	宮内古墳群	68	晩田遺跡
5	名和飛田遺跡	21	龍光寺堀遺跡	37	茶畑第２遺跡	53	徳楽方墳	69	下楚利遺跡・宮廻遺跡
6	門前上屋敷遺跡	22	栃原窯跡	38	東高田遺跡	54	源平山古墳群	70	瓶山古墳群
7	門前鎮守山城跡	23	角塚遺跡	39	原３号墳	55	長田古墳群	71	向山古墳群
8	門前第２遺跡	24	上大山第１遺跡	40	茶畑山道遺跡	56	客尾山古墳群	72	上淀廃寺
9	古御堂新林遺跡	25	長者原遺跡	41	荒田遺跡	57	清原遺跡	73	彼岸田遺跡
10	古御堂金蔵ヶ平遺跡	26	ハンボ塚古墳	42	富長城跡	58	上野遺跡群	74	小枝山古墳群
11	古御堂笹尾山遺跡	27	門前礎石群	43	文殊領屋敷遺跡	59	国信遺跡	75	城山古墳群
12	押平尾無遺跡	28	南川遺跡	44	古御堂遺跡	60	唐王遺跡	76	四十九谷横穴墓群
13	茶畑第１遺跡	29	高田原廃寺	45	大塚塚根遺跡	61	新田原遺跡	77	稲吉角田遺跡
14	茶畑六反田遺跡	30	高田第４遺跡	46	大塚岩田遺跡	62	塚田遺跡	78	中西尾古墳群
15	押平弘法堂遺跡	31	高田第 10 遺跡	47	大塚第３遺跡	63	荘田古墳群	79	鮒ヶ口遺跡
16	妻木法大神遺跡	32	坪田古墳群	48	大塚屋敷遺跡	64	原畑遺跡	80	河原田遺跡

崎古墳群では塊石を用いた箱式石棺を有し、鳥取県中部地域に特徴的に見られる壺形埴輪が出土しており、他地域との関連が窺われる。また、岩屋堂古墳、長野２号墳、岩屋平古墳、三谷 16 号墳、束積 11 号墳、高田 26 号墳、茶畑 12 号墳、豊成 28 号墳、蔵岡古墳群、宮内１・２号墳、平 24 号墳など内部主体に切石積み横穴式石室を持つものが、米子市淀江町域まで広がっており、同一文化圏を形成している。また、高田 25 号墳は、横穴式石室内に家形石棺を内包する。当該域は、豊成横穴墓群など横穴墓群も形成されており、古墳築造集団より下位に位置付けられる葬制も混在する地域である。この時代の集落は、依然丘陵上に営まれる傾向が強く、前期の茶畑第１遺跡、中期から後期の押平尾無遺跡、古御堂笹尾山遺跡、名和中畝遺跡、仁王堂遺跡がある。低地部では大塚塚根遺跡などがある。

奈良～平安時代　７世紀後半以降、山陰地方で仏教文化受容の痕跡が認められる。現在県内では 22 ヵ所の古代寺院が見つかっており、当該地域では高田原廃寺がある。ここでは、乱石積基壇や溝状遺構が検出され、上淀廃寺式の単弁十二葉蓮華文軒丸瓦が出土している。その他、名和神社付近が、『延喜式』に記載された古代山陰道の和奈駅（奈和の誤記か）として推定されているが、明確にはなっていない。また、阿弥陀川河口付近の大塚屋敷遺跡では、倉庫群と考えられる掘立柱建物群が見つかっている。栃原窯跡は須恵器窯と考えられているが、上寺谷遺跡の製鉄炉やその周辺での鉄滓表採事例などから、炭窯の可能性も指摘されている。細工塚遺跡では、大型の掘立柱建物群が検出され、平安時代には、官衙関連の遺構や有力層の建物が検出されている。長者原遺跡では礎石建物、区画溝、大量の炭化米がみつかっており、正倉と推定されている。名和衣装谷遺跡では２棟の大型掘立柱建物や鉄滓、緑釉・灰釉陶器が見つかっており、郡司層の居宅又は郡衙下部の鉄生産に関わる遺構と考えられている。茶畑六反田遺跡では、条里区画の一部と見られる溝が検出され、緑釉陶器や墨書土器が出土している。名和乙ヶ谷遺跡では、道路状遺構が検出されている。また、大山寺は、密教隆盛とともに信仰の中心的な役割を果たし、地方豪族に並ぶ僧兵勢力を有すようになる。平安時代末期には末法思想が広まる中、和鏡８枚などを含む壹宮経塚が作られている。

中世　律令体制の崩壊とともに封建制社会が形成される。門前上屋敷遺跡では、屋敷地を区画すると考えられる大溝、交易品としての青白磁が検出されている他大規模な造成が認められ、居館又は寺院跡の指摘もある。門前礎石群は、青白磁・青花などの出土から中世以降の礎石建物と考えられる。その他、旧名和町域には、名和長年をはじめとする名和氏一族に関わるとされる旧跡が各所に見られる。その他、箆津豊後守敦忠の居城とされる岩井垣城、天守山城、香原山城、松尾城などの他、富長城、長野城、末吉城、福尾城など日本海沿岸部にも多く砦跡が築かれている。また、門前第２遺跡では、中世から近世・近代にかけての大規模な墓地が形成されている。

近世　寛永９（1632）年に池田光仲が鳥取藩主となり、因伯は幕末まで池田氏の治世となる。この時代、御来屋は伯耆街道の宿駅、藩の運上米の積出港として重要な位置を占めた。（牧本）

【参考文献】

名和町誌編纂委員会編　1978『名和町誌』
鳥取県埋蔵文化財センター　1986『鳥取県の古墳』
鳥取県埋蔵文化財センター　1988『旧石器・縄文時代の鳥取県』
鳥取県埋蔵文化財センター　1989『歴史時代の鳥取県』
内藤正中・真田廣幸・日置粂左ヱ門　1997『県史 31　鳥取県の歴史』山川出版社
鳥取県教育委員会　2004『鳥取県中世城館分布調査報告書』第２集（伯耆編）
発掘調査報告書類については割愛させていただいた。

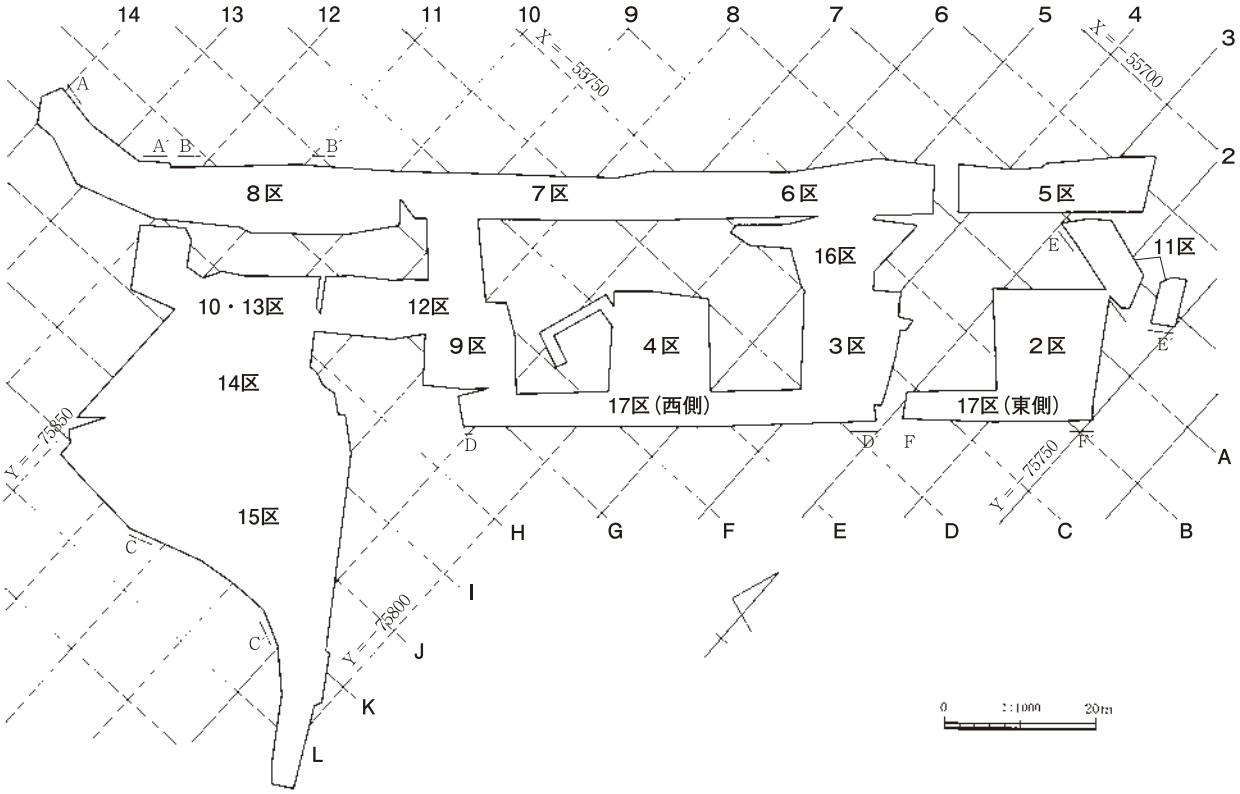
第３章　門前上屋敷遺跡の調査成果

第１節　遺跡の立地と層序

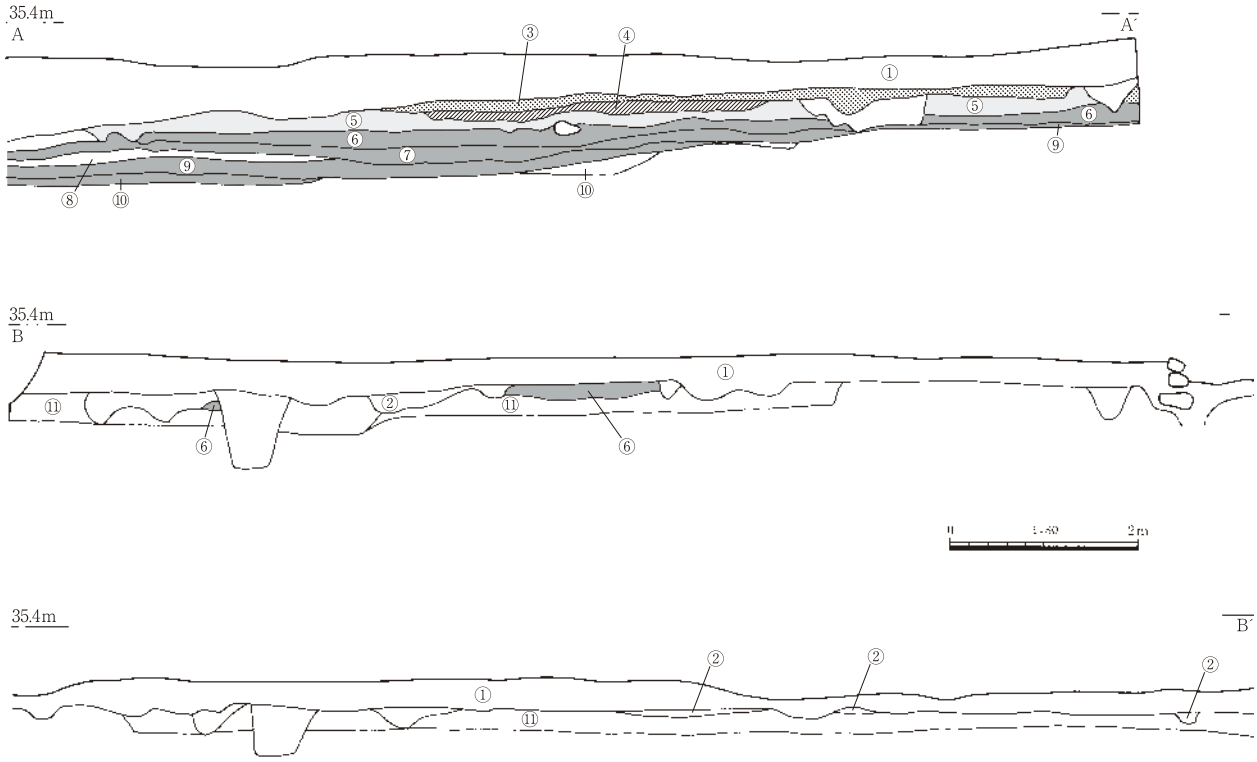
門前上屋敷遺跡は西伯郡大山町大字門前字上屋敷、若宮、倉垣にかけて所在する。東側には名和飛田遺跡、西側には門前鎮守山城跡、門前第２遺跡が位置している。調査部分は、橋脚及び工事による影響箇所のみと断片的で、全容がつかみ難くなっている。調査区は全部で 17 区設定しており、その配置は第８図に示したとおりである。なお、調査は平成 16 年度から 18 年度にかけて行われており、このうち平成 16 年度のものは（財）鳥取県教育文化財団が調査を行い、すでに報告書が刊行されている。ここで報告するものは平成 17・18 年度に調査した８区から 17 区までである。

遺跡は名和川西岸の河岸段丘上に立地する。このためか、遺跡内には河川の浸食によって形成された段が３段認められ、これらは西に向かって高くなる。それぞれ上段・中段・下段とすると、上段にあたる調査区が３・４・６～10・12～16・17 区西側であり、中段が２・５・11・17 区東側、下段が１区と 11 区東側である。これらの地形であるが、東側に緩やかに下るほぼ平坦なものとなっている。

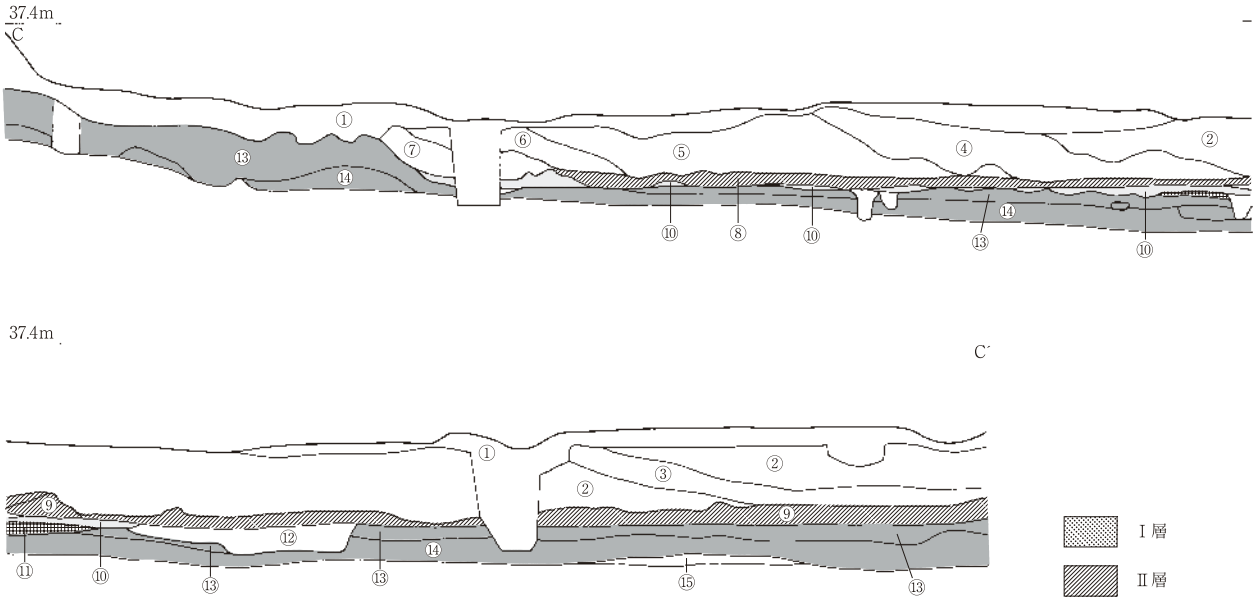
層序は上段・中段・下段でそれぞれ様相が異なっている。上段では赤褐色ロームや黄褐色ロームといった大山中部火山灰層の上に、姶良Ｔｎ火山灰層（以下ＡＴ）やソフトローム、クロボク、灰褐色を呈する中世以降の耕作土が堆積する。一方、中・下段は名和川の氾濫原にあたり、中段では大山中部火山灰層の上に淡灰褐色細砂層が厚く堆積し、その上に中世以降の灰褐色を呈する耕作土が薄く堆積する。下段では大山中部火山灰層の上に礫層が厚く堆積する。なお、調査を行うにあたり、上段で



第８図　調査区配置図

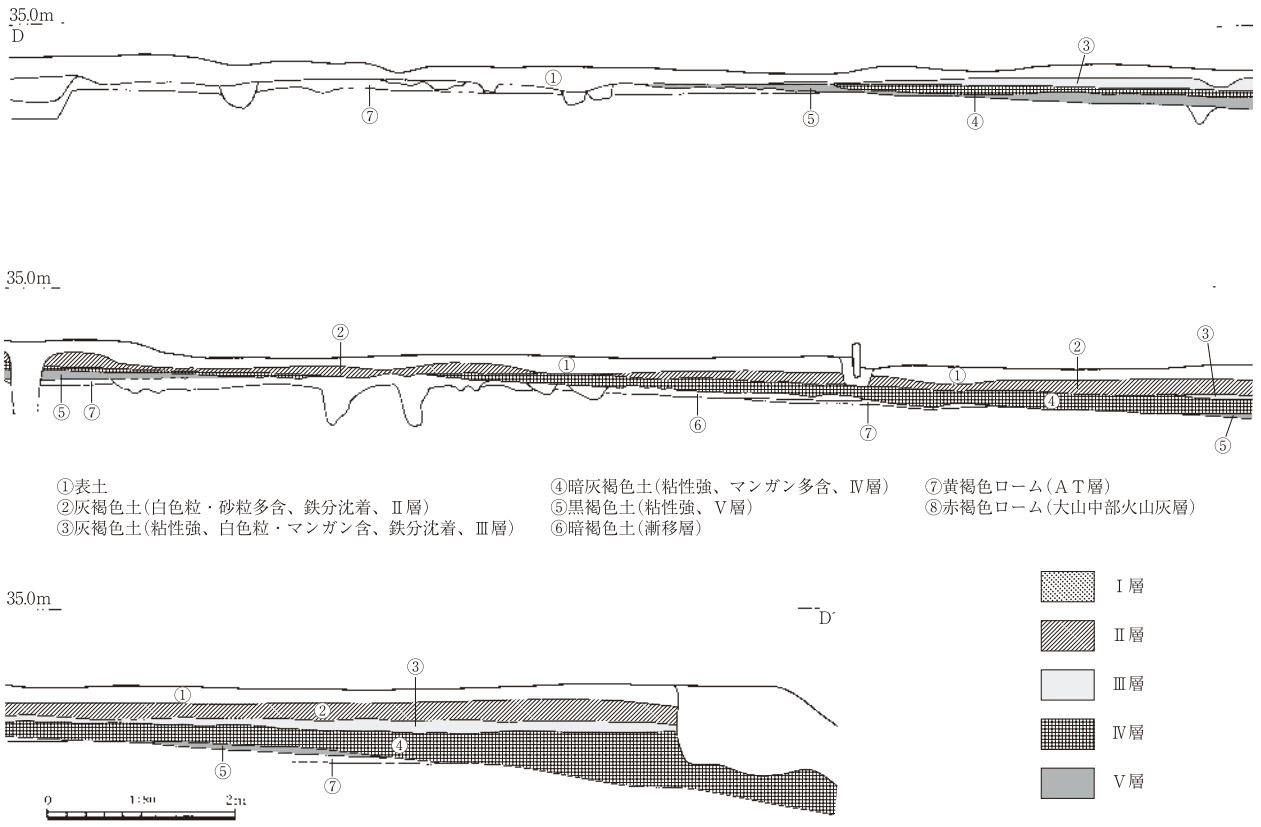


①表土
②明橙色ロームブロック
③灰褐色土（Ⅰ層）
④灰褐色土（Ⅱ層）
⑤灰褐色土（白色粒多含、Ⅲ層）
⑥黒褐色土（白色粒多含、Ⅴ層）
⑦黒褐色土（粘性強、Ⅴ層）
⑧暗灰褐色土（粘性強、鉄分含）
⑨黒褐色土（鉄分含）
⑩明緑灰色土（粘性強、砂粒多含）
⑪赤褐色ローム（大山中部火山灰層）



①表土
②黄褐色ロームブロック
③灰黄褐色土（ロームブロック多含）
④黄褐色土と黒褐色土の混合土
⑤黄褐色土と黒褐色土の混合土
⑥暗褐色土（黒褐色土ブロック多含）
⑦黄褐色ロームブロック
⑧灰褐色土（粘性強、Ⅱ層）
⑨灰褐色土（Ⅱ層）
⑩灰褐色土（鉄分含、Ⅲ層）
⑪暗灰褐色土（マンガン多含、Ⅳ層）
⑫暗褐色土と黒褐色土の混合土
⑬黒褐色土（ブロック状に堆積、Ⅴ層）
⑭黒褐色土（Ⅴ層）

第９図　基本層序①



第10図　基本層序②

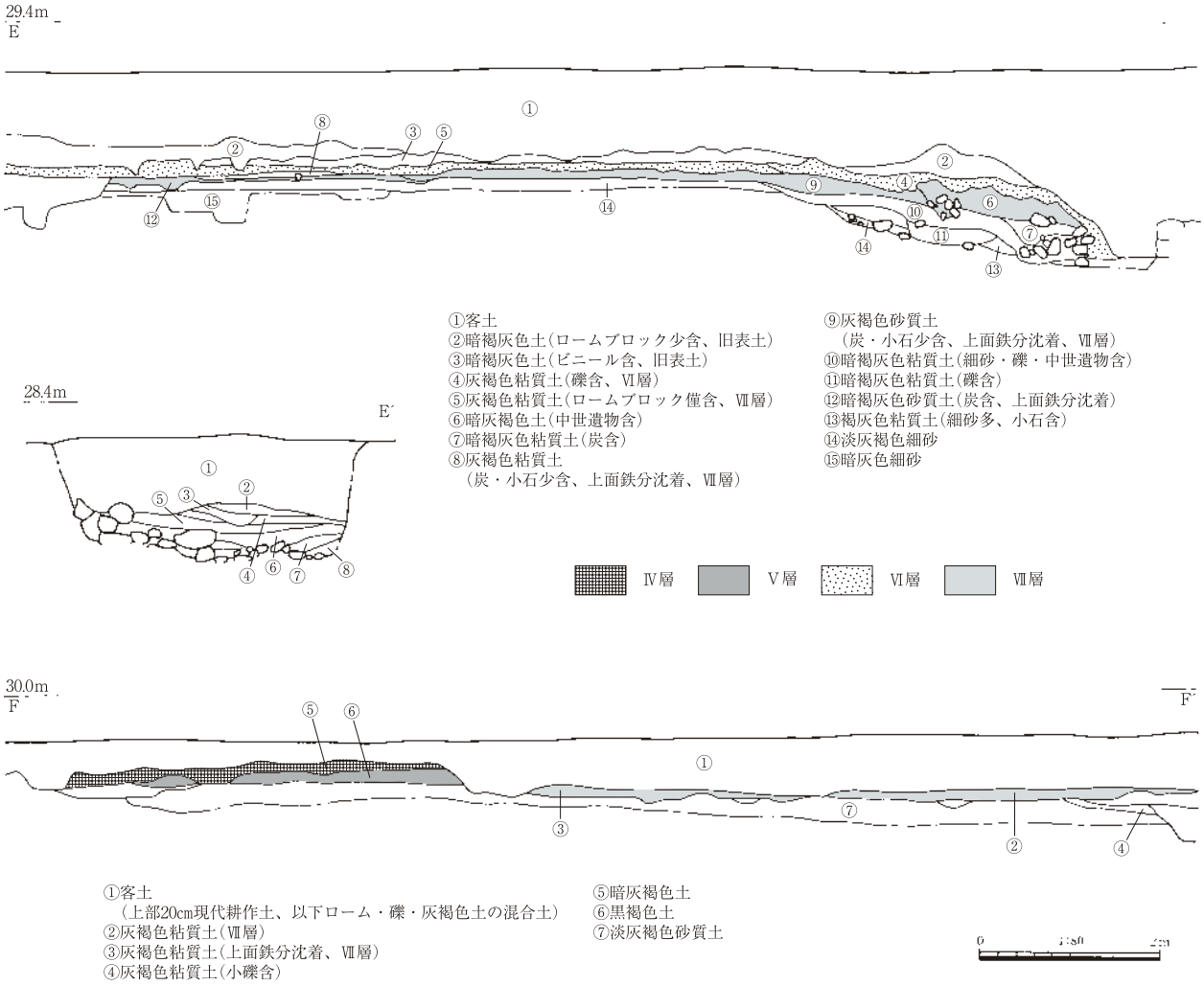
はクロボク、中段では灰褐色粘質土以上を分層して基本層序を捉えた後、これを手掛かりに掘り下げ及び遺構検出を行った。下段については表土除去後すぐに礫層となっていたため分層は行っておらず、遺構の検出を礫層上で行った。

上段では基本層序となり得る層を５層確認した。これらは平成 16 年度の調査で確認したⅠ～Ⅴ層と対応している。Ⅰ層は近世後期の遺物を包含する灰褐色土である。14・15 区ではⅡ層の直上において 15 世紀後半以降に土地造成が行われ、客土が厚く盛られていることから堆積することはないが、他の調査区のほぼ全てにおいて堆積していたと考えられる。しかし、現代の耕作によって削平されており、層として確認できたのは８・９区のみであった。

Ⅱ層は近世前期までの遺物を包含する灰褐色土で部分的に鉄分が沈着し、上段の大部分で確認されている。14・15 区では中世後期の水田や畠の耕作土となっていたことから、この段階において形成された層と考えられる。なお、16・17 区においては耕作痕と考えられる浅く直線的にのびる溝がみつかっており、広範囲にわたって田畠などの耕作地となっていたと推察される。

Ⅲ層は中世の遺物を包含する層であり、Ⅰ・Ⅱ層同様、灰褐色土である。この層は鉄分を多く含むために赤味を帯び、白色の砂粒やマンガンを含んでいる。上段の大部分において確認されており、16・17 区において耕作痕と考えられる溝がみつかっている。

Ⅳ層は中世前期の遺物を包含する層である。この層はⅠ～Ⅲ層に比べて暗い暗灰褐色となっており、マンガンを多く含む。このため他の層との識別は容易である。15 区の一部と 16・17 区において堆積しており、16 区では溝９によって切られ、16・17 区においてはこの層を埋土にもつ耕作痕を確認し



第11図　基本層序③

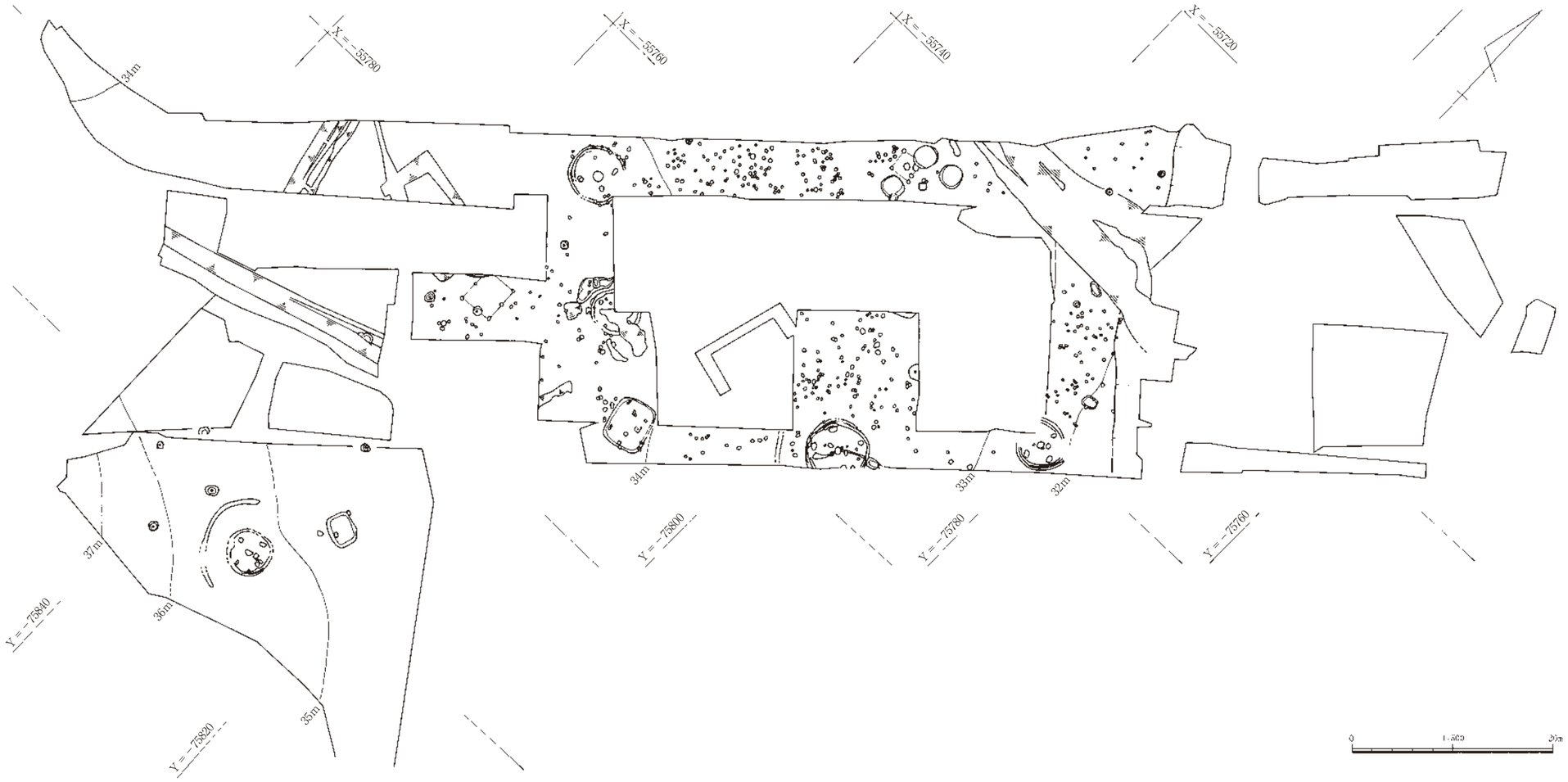
ている。

Ｖ層は粘性の強い黒褐色土であり、縄文時代から古代の遺物を包含する。ただし、15 区と門前鎮守山城跡の境となる一段高くなる部分では、掘立柱建物 12 ～ 15、土坑 66・67 といった中世から近世にかけての遺構が形成されており、この時期の遺物も包含する。おおむね、この層の上面では中世の遺構を検出し、直下の暗褐色土ないしはＡＴ上面では縄文時代から古代の遺構を確認している。

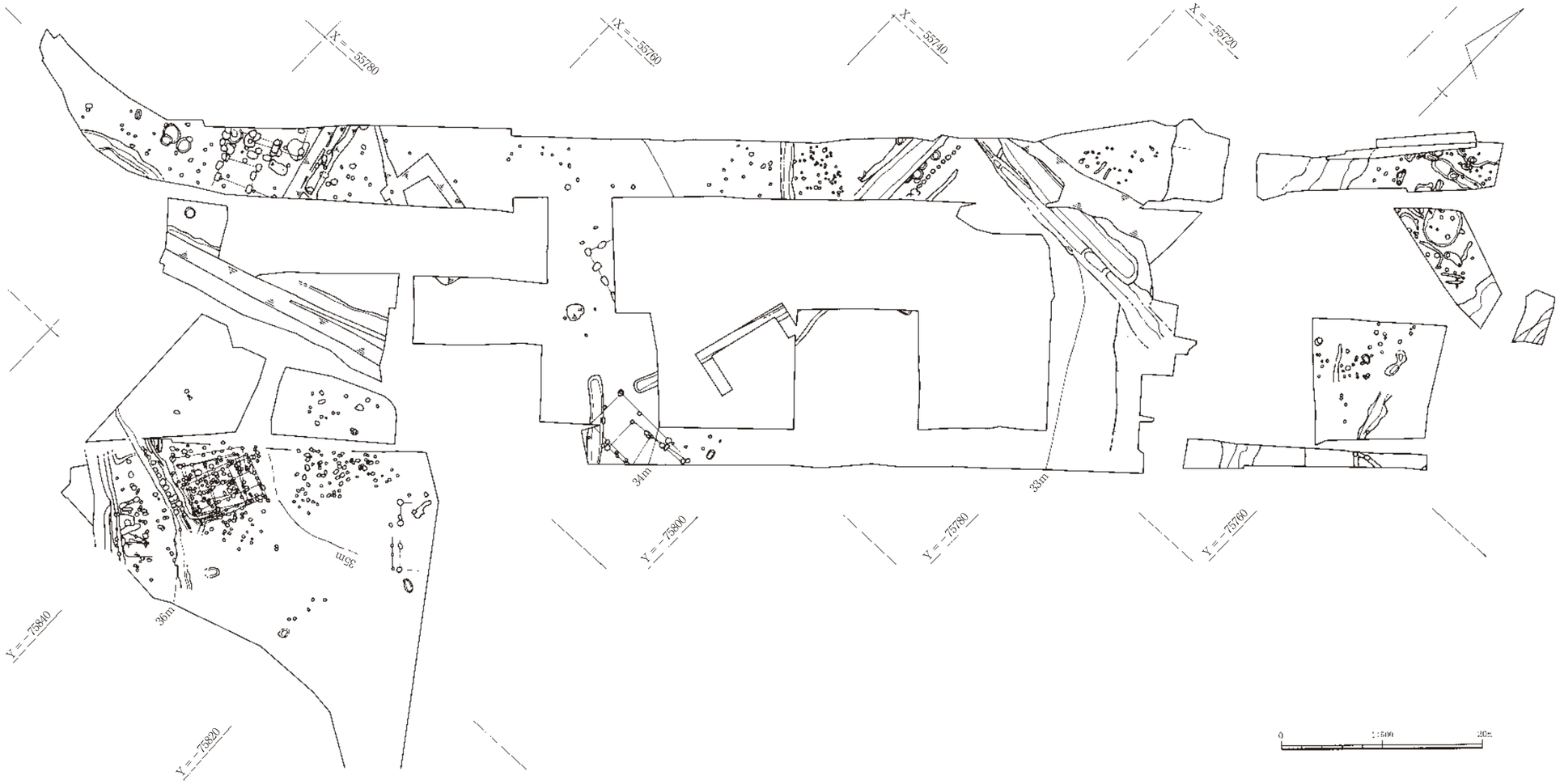
中段では基本層序となり得る層を２層確認した。これらは平成 16 年度の調査で確認したⅥ～Ⅸ層に相当する。層位の数が異なっているのは、Ⅶ～Ⅸ層は断片的にしか堆積しておらず、層として捉えることが困難であり、色調・質感も差がなかったことから同一の層として扱ったためである。

Ⅵ層は灰褐色粘質土であり、平成 16 年度の調査で確認したⅥ層と対応する。この層は近世の遺物を包含しており、11 区ではこれを埋土にもつ耕作痕を確認している。

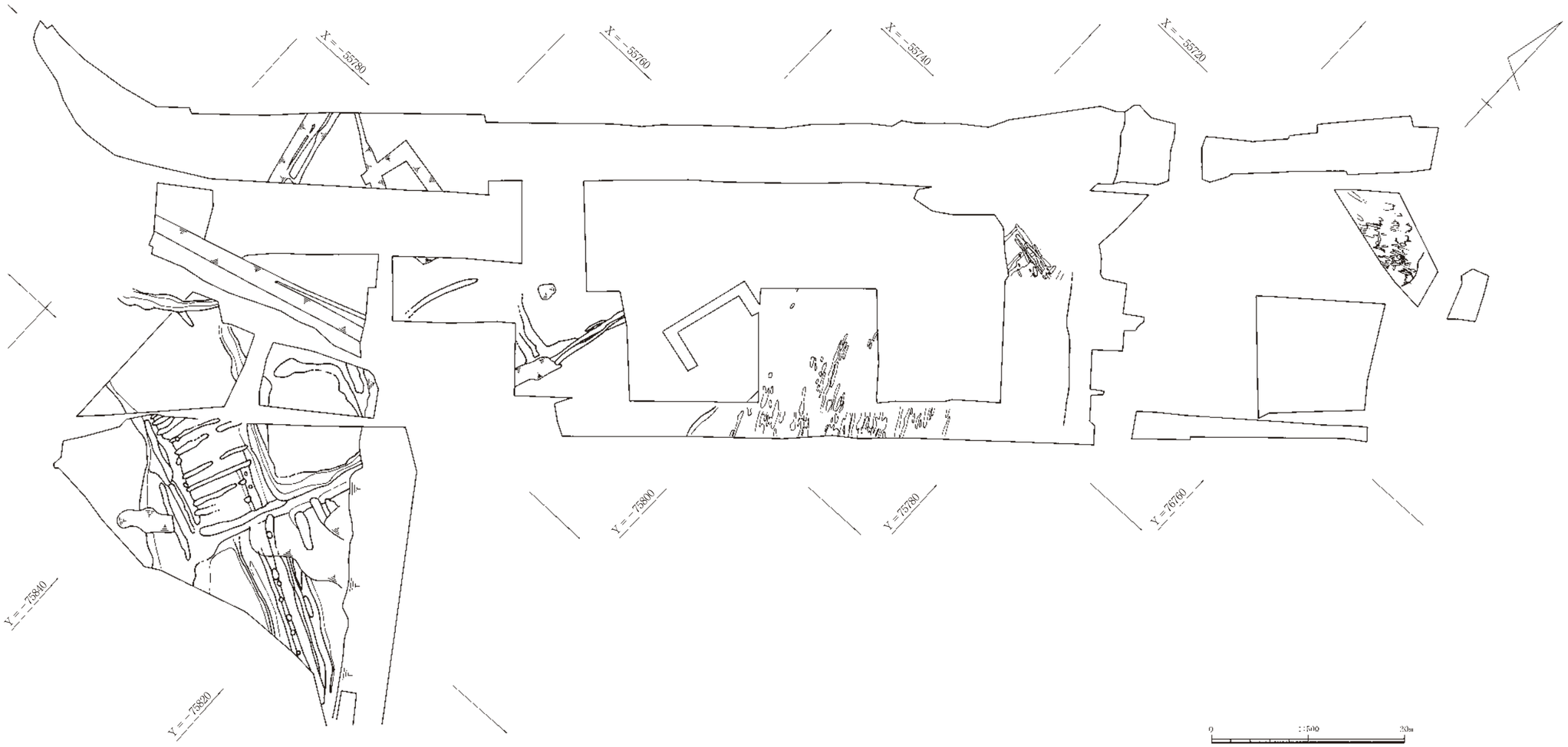
Ⅶ層は灰褐色粘質土及び灰褐色細質土で、平成 16 年度のⅦ～Ⅸ層と対応する。中世の遺物を包含し、基盤となる灰褐色細砂上面でこの層を埋土にもつ遺構を確認している。



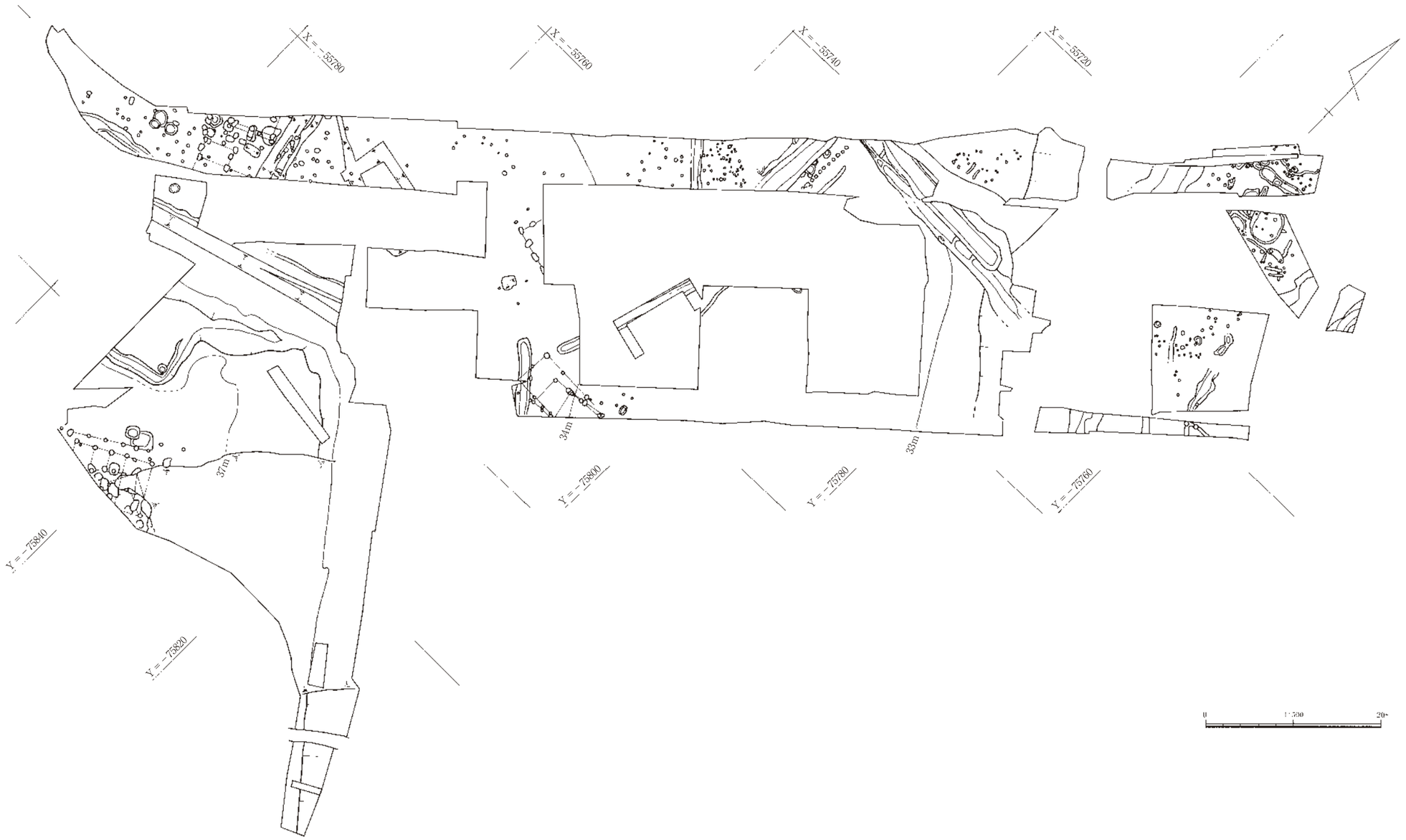
第12図　縄文～古墳時代遺構配置図



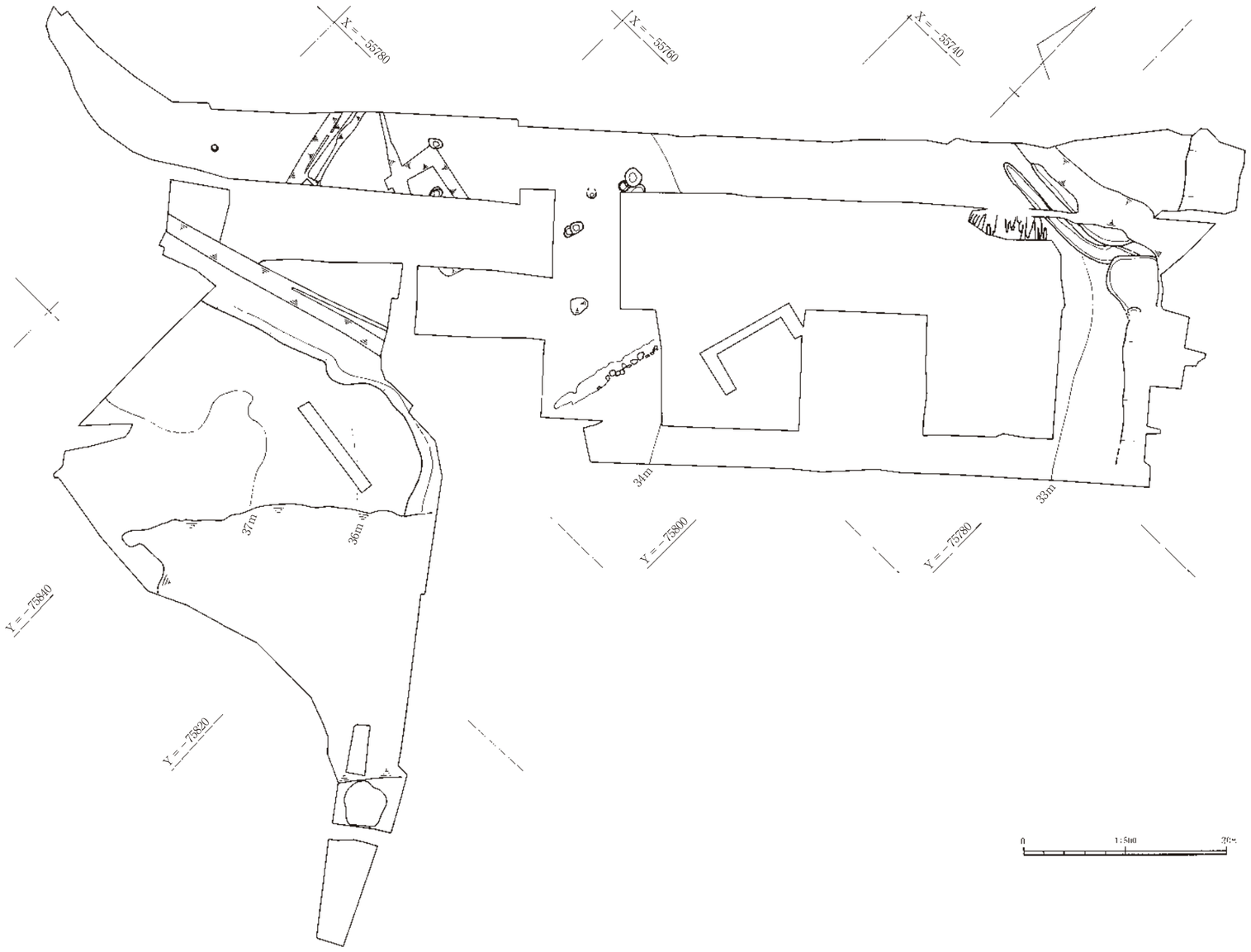
第13図　古代～中世遺構配置図①



第14図　中世遺構配置図②



第15図　中世遺構配置図③



第16図　中世以降遺構配置図

第２節　８区の調査

１　調査区の概要

８区は遺跡の西側に位置する東西に細長い調査区である。地形はほぼ平坦となっているが、調査区西側では北西方向へ緩やかに下る斜面部となっていた。調査前の状況は宅地及び畑となっており、宅地の造営や耕作のために大部分が削平されていた。このような状況であったため、調査区東側の約2/3までは表土直下がＡＴや赤褐色ローム、軽石を多く含む黄褐色ロームとなっていた。

一方、西側1/3は東側に比べてやや低くなっていたため比較的残りがよく、Ⅰ～Ⅴ層、ソフトロームの堆積が認められた。しかし、この部分は湧水があるなど地盤が脆弱であったためか、宅地基礎部分がⅤ層上面にまで達しており、これ以上の層は断片的にしか残っていなかった。

調査は表土と宅地の基礎部分を重機によって除去してから人力で遺構面まで掘り下げていくこととした。上述の通り、宅地の造営や耕作のために大幅に削平されており、宅地の基礎部分がⅤ層上面まで達していたことから、赤褐色ロームないしは黄褐色ローム、Ⅴ層上面を第１遺構検出面とした。また、平成16年度の調査ではⅤ層除去後に弥生時代の遺構を検出していたことから、ソフトローム上面を第２遺構検出面として調査を行うこととした。しかしⅤ層除去後、ここは北側へ下る谷部となることが判明したが、遺構を確認することができなかった。このため本節では第１遺構面の調査成果について報告する。

確認した遺構であるが、近世に至るまでの様々な時代のものを同一面で検出していることから、層位によって時期を把握することが困難であった。このため埋土を手掛かりに時期を捉えることとした。おおむねⅤ層に由来する黒褐色系の埋土をもつものを古代以前、Ⅲ層に由来する灰褐色土ならびにⅣ層に由来する暗灰褐色系の埋土をもつものを中世前期から後期、Ⅰ層ないしはⅡ層起源の灰褐色系の埋土をもつものを中世後期以降と判断した。

古代以前の遺構はピットを数基検出したのみである。遺物に関しても土器や石器が僅かに出土したにすぎず希薄である。これは後世の削平により消失してしまった可能性が考えられるものの、調査区中央では北側へと下る谷部の傾斜変換点となり、それ以西では斜面部となることから、古代以前においては、この近辺まで活動が及んでいなかったと捉えることができるだろう。

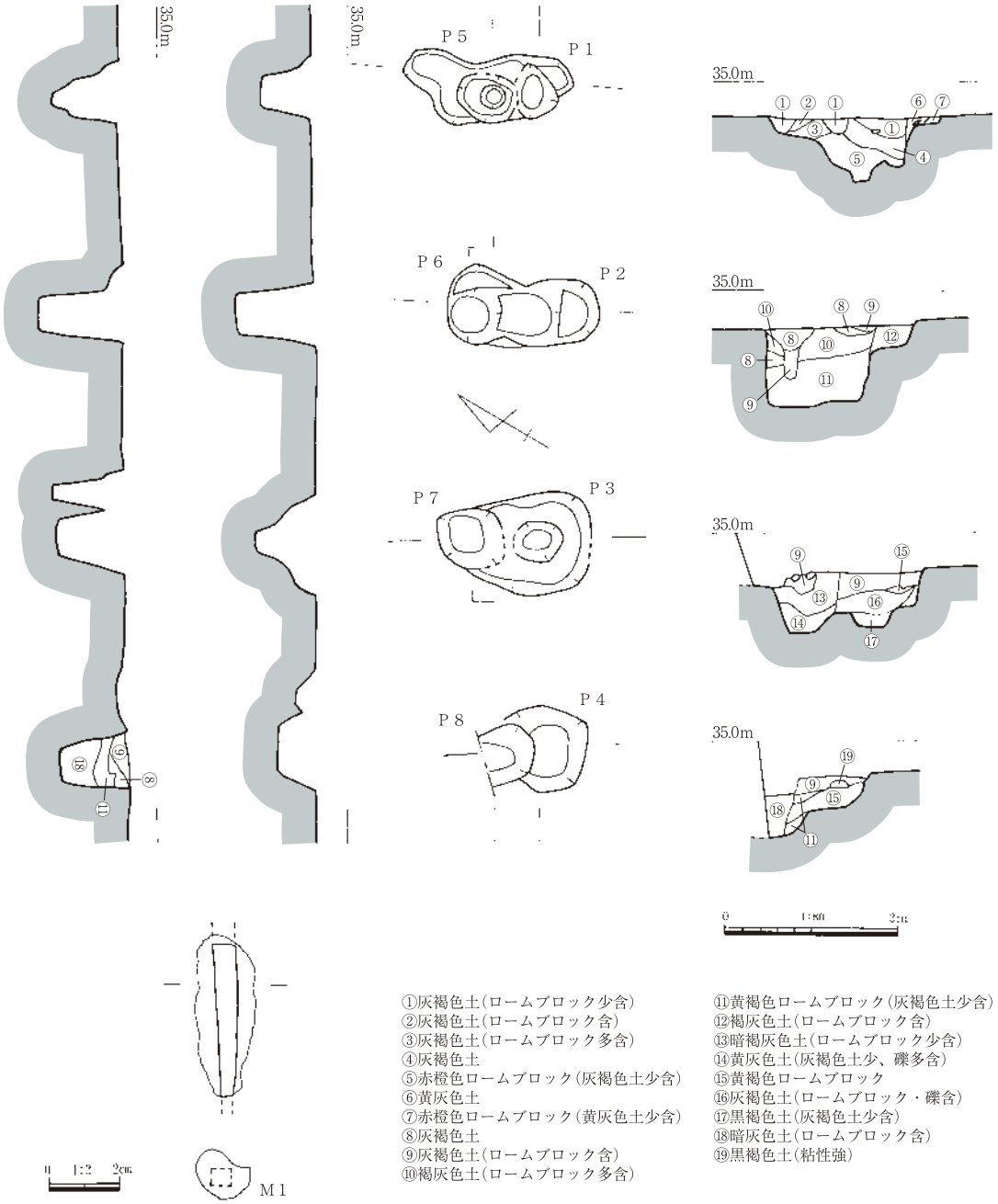
中世の遺構は、掘立柱建物２棟、掘立柱建物としてまとまらない柱穴22基、土坑５基、たわみ１基、ピットを確認した。このうち中世前期のものは土坑５基、Ⅲ層に由来する灰褐色系の埋土をもつピットである。これらは調査区西側に分布しており、Ⅴ層上面で多くの遺構が検出されている。これとほぼ同時期の遺構が14・15区でも確認されており、これらと関連するものと考えられる。

中世後期のものは、掘立柱建物２棟、掘立柱建物としてまとまらない柱穴22基である。これらは主に調査区の中心にまとまって分布しており、ほぼ同じ箇所で何回も建て替えが行われたと推察される。また、ここの基盤は赤褐色ロームないしは黄褐色ロームとなっており、掘立柱建物や柱穴といった遺構の性格上、比較的安定した地盤の上に遺構を形成していたと考えられる。これらと同時期の遺構は14・15区の造成土上面ないしは門前鎮守山城跡でも確認されており、これらと関連する施設の可能性が高いと捉えている。

これ以降のものとしては、近世後期以降と考えられる土坑３基を検出した。

土坑36
土坑37
Y＝－75850
X＝－55780
柱穴１
柱穴２
柱穴３
柱穴４
柱穴５
柱穴９
柱穴６
柱穴８
柱穴７
柱穴10
柱穴11
掘立柱建物１
Y＝－75860
柱穴14
柱穴12
柱穴16
柱穴13
柱穴15
柱穴17
掘立柱建物２
土坑38
P483
柱穴19
柱穴18
P484
X＝－55790
柱穴22
柱穴20
柱穴21
土坑39
P485
土坑40
土坑41
土坑42
P486
Y＝－75870
土坑43
たわみ１

第17図　遺構配置図

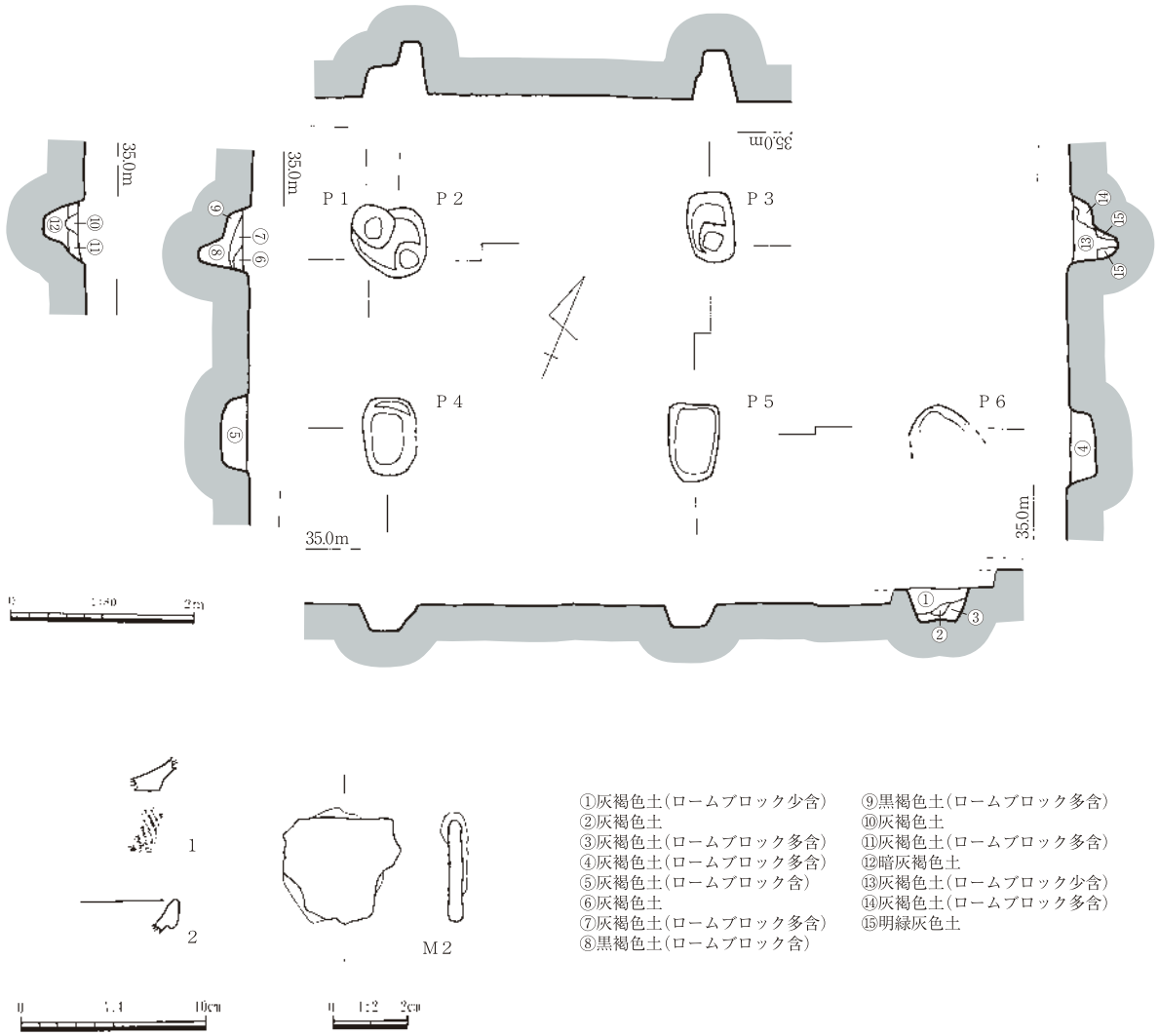


第18図　掘立柱建物１・出土遺物

２　掘立柱建物

掘立柱建物１（第18図、ＰＬ.２）

調査区の中心に位置しており、掘立柱建物２に近接し、赤褐色ロームないしは軽石の多く含む黄褐色ローム上面で検出した。確認できたのは東西３間分の柱穴のみであり、全容は不明である。南側でこれに伴う柱穴が検出されなかったことから、残りは北側の調査区外にのびると考えられる。規模は東西760㎝、柱間距離248～265㎝を測り、軸はＮ－65°－Ｅとなる。柱穴は各箇所で重複しており、少なくとも１回は建て替えが行われていたと考えられる。柱穴は全部で８基検出されており、平面形が方形ないしは隅丸方形となる。規模は長さ60～176㎝、幅54～112㎝、深さ70～134㎝を測り、Ｐ３・Ｐ５の底面には平面形が隅丸方形ないしは円形を呈する長さ30～60㎝ほどの柱穴及び落ち込みが認

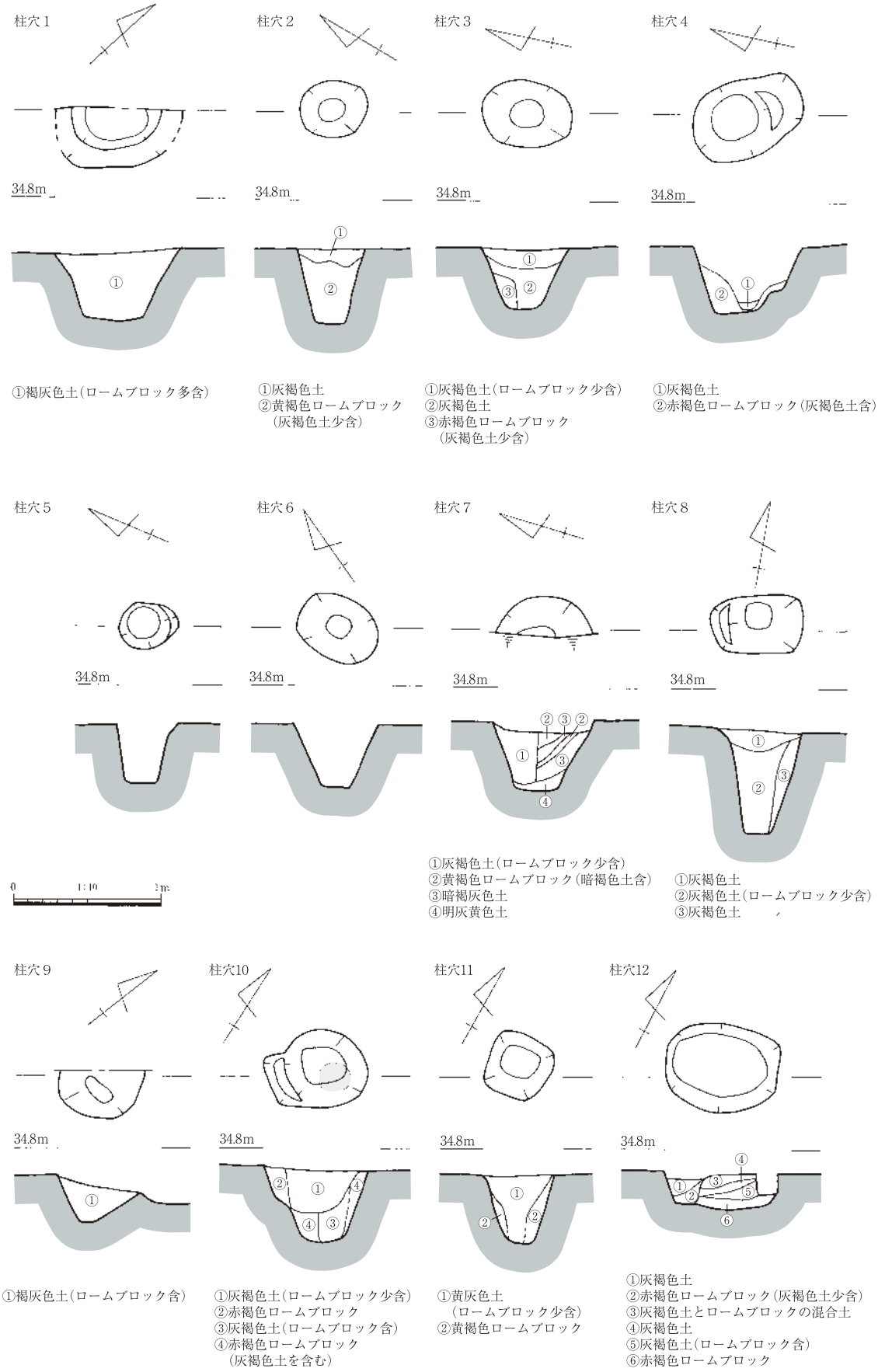


第19図　掘立柱建物２・出土遺物

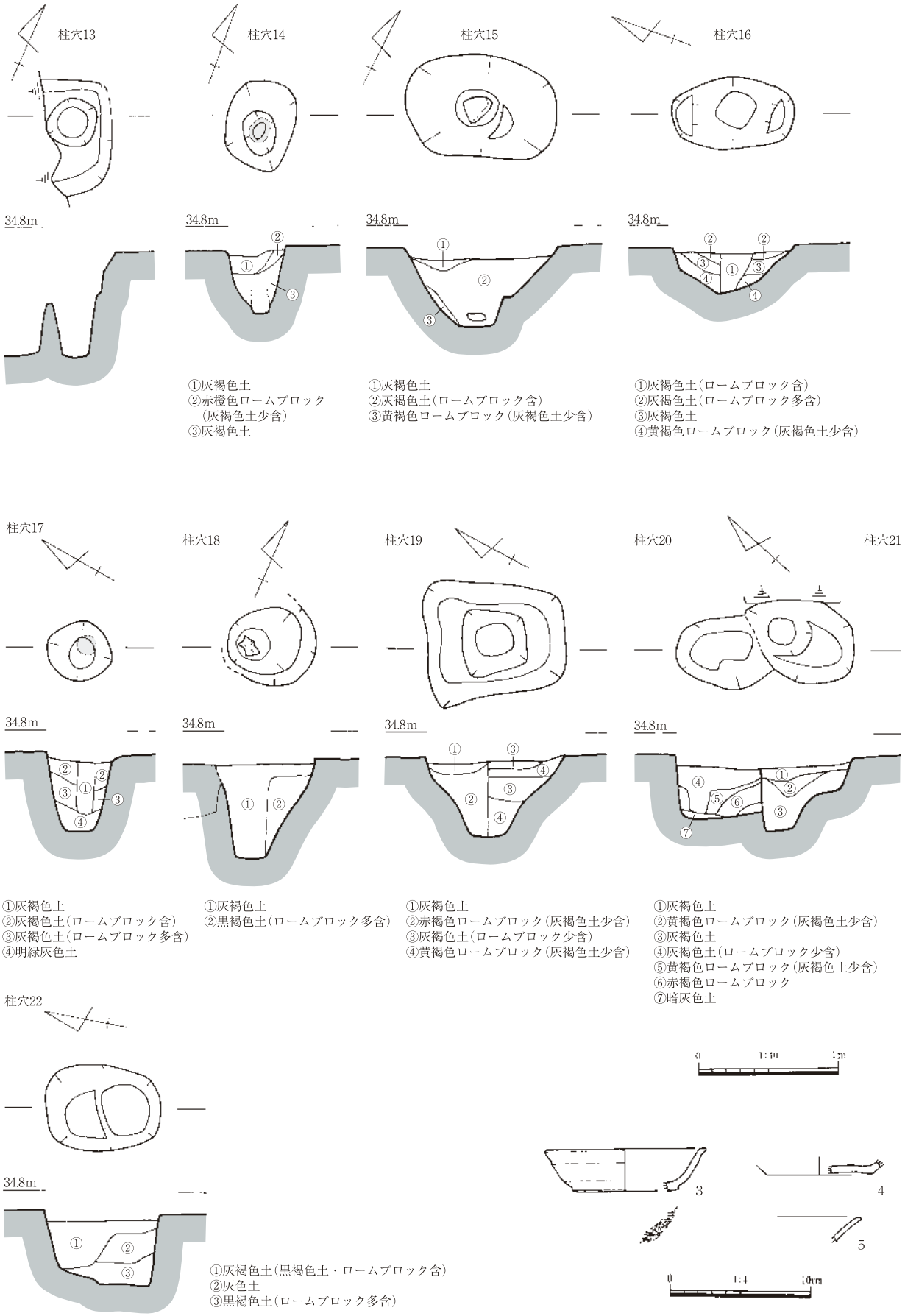
められた。また、Ｐ６では幅 16cmほどの柱痕跡が断面で観察できた。これらの柱穴であるが、形状や埋土、切り合い関係などからＰ１～Ｐ４、Ｐ５～Ｐ８がそれぞれ対応するものと判断でき、この順で建て替えが行われたものと考えられる。建て替え方法であるが、Ｐ１～Ｐ４は柱痕跡が確認できず、埋土の堆積状況が柱の裏込め土のような様相を呈することから、柱を抜き取った後に建て替えを行ったものと思われる。遺物はＰ８からＭ１が出土している。時期は中世後期と考えられる柱穴 18 を切っていることから、それ以降のものといえる。

掘立柱建物２（第19図、ＰＬ.３）

掘立柱建物１の南側に近接し、ＡＴおよび赤褐色ローム上面で検出した。確認できたのは東西２間分の柱穴とそこから南側に拡張する１×１間の柱穴である。残りは南側の調査区外にのびており全容は不明である。規模は東西 600cm、柱間距離は東西 270 ～ 330cm、南北 210cmを測り、軸はＮ－ 67 °－Ｅである。柱穴の掘り方は長方形を基本とするが、Ｐ１～Ｐ３では、長さ 74cm、幅 50cm、深さ 18 ～ 22cmの長方形の掘り方に、一辺 34 ～ 44cm、深さ 24cmの平面形が方形の穴を掘っており、他の柱穴とは構造が異なる。なお、Ｐ１・Ｐ２は重複しているが、切り合いの状況からＰ２が新しいといえる。


柱穴１
34.8m
①
①褐灰色土（ロームブロック多含）
柱穴２
34.8m
①
②
①灰褐色土
②黄褐色ロームブロック
（灰褐色土少含）
柱穴３
34.8m
①
②
③
①灰褐色土（ロームブロック少含）
②灰褐色土
③赤褐色ロームブロック
（灰褐色土少含）
柱穴４
34.8m
①
②
①灰褐色土
②赤褐色ロームブロック（灰褐色土含）
柱穴５
34.8m
柱穴６
34.8m
柱穴７
34.8m
②③②
①
③
④
①灰褐色土（ロームブロック少含）
②黄褐色ロームブロック（暗褐色土含）
③暗褐灰色土
④明灰黄色土
柱穴８
34.8m
①
②
③
①灰褐色土
②灰褐色土（ロームブロック少含）
③灰褐色土
0
1:10
1m
柱穴９
34.8m
①
①褐灰色土（ロームブロック含）
柱穴10
34.8m
①
②
③
④
①灰褐色土（ロームブロック少含）
②赤褐色ロームブロック
③灰褐色土（ロームブロック含）
④赤褐色ロームブロック
（灰褐色土を含む）
柱穴11
34.8m
①
②
①黄灰色土
（ロームブロック少含）
②黄褐色ロームブロック
柱穴12
34.8m
①
②
③
④
⑤
⑥
①灰褐色土
②赤褐色ロームブロック（灰褐色土少含）
③灰褐色土とロームブロックの混合土
④灰褐色土
⑤灰褐色土（ロームブロック含）
⑥赤褐色ロームブロック

第20図　柱穴１～12



第21図　柱穴13～22・出土遺物

さらに、Ｐ３では一段深く掘った部分に径 12cmほどの円形を呈する柱痕跡が認められた。残りのＰ４～Ｐ６であるが、Ｐ４・Ｐ５は規模が長さ 82cm、幅 56 ～ 60cm、深さ 24 ～ 28cmを測る。Ｐ６に関してはその大半が調査区外へのびているため不明である。遺物はＰ１から１、Ｐ２から２、Ｐ４からＭ２がそれぞれ出土している。１は土師器の坏、２は白磁Ⅳ類の碗、Ｍ２は鉄製品で板状を呈する。出土した遺物は中世前期のものであるが、この建物との関連性が高い掘立柱建物１の時期から中世後期以降の可能性が高いといえる。

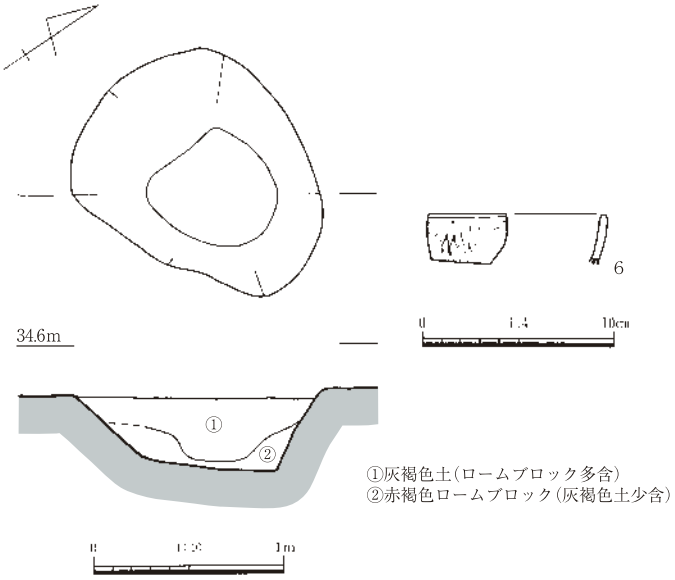
３　柱穴

柱穴１～ 22（第 20・21 図、ＰＬ.22）

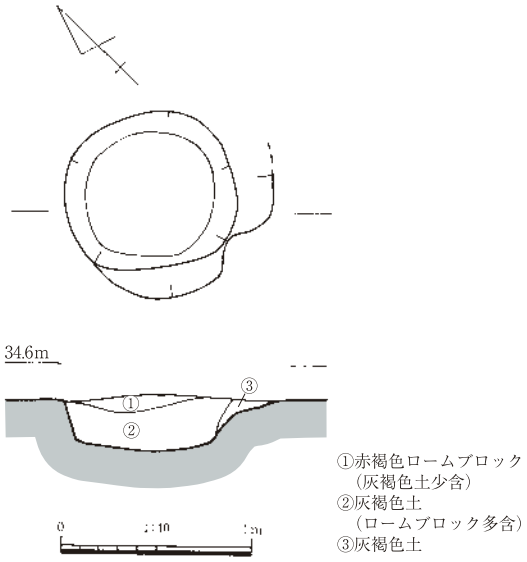
掘立柱建物としてまとまらない柱穴は全部で 22 基確認した。これらは調査区の中心にまとまって分布しており、同形・同規模のものが幾つか認められることから、同じ箇所で何回か建て替えが行われていたと考えられる。今回の調査では掘立柱建物としてまとまらなかったが、今後この付近を調査したときには掘立柱建物としてまとまる可能性が十分ある。これらの時期であるが出土遺物や埋土の状況から中世後期以降のものと考えられる。以下に各柱穴について述べていく。

柱穴１～ 10 は掘立柱建物１の東側に位置している。柱穴１は調査区外にのびており全容は不明である。規模は長さ 86cm、深さ 47cmを測る。柱穴２は隅丸方形を呈し、長さ 45cm、深さ 50cmを測る。柱穴３は隅丸長方形を呈し、長さ 61cm、幅 44cm、深さ 41cmを測る。柱穴４は隅丸方形を呈し、長さ 78cm、幅 52cm、深さ 46cmを測り、幅 15cmほどの柱痕跡を確認した。柱穴５は円形を呈し、長さ 41cm、深さ 42cmを測る。柱穴６は隅丸長方形を呈し、長さ 56cm、幅 43cm、深さ 43cmを測る。柱穴７は現代の水道管に壊され全容は不明である。残存長 67cm、深さ 46cmを測り、幅 25cmの柱痕跡を検出した。柱穴８は長方形を呈し、長さ 61cm、幅 39cm、深さ 71cmを測り、幅 27cmの柱痕跡を検出した。柱穴９は調査区外にのびており全容は不明である。残存長 57cm、深さ 30cmを測る。

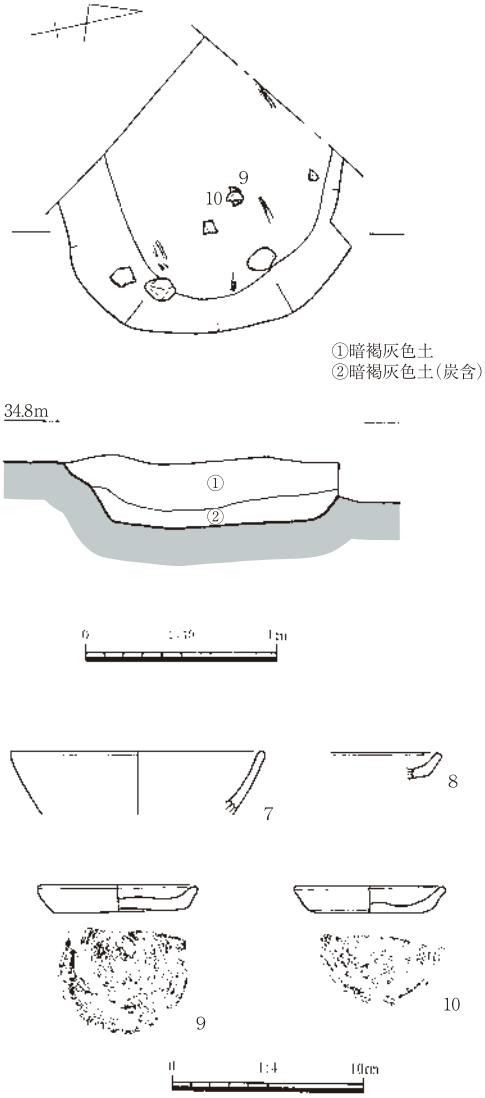
柱穴 11 ～ 22 は掘立柱建物１及び掘立柱建物２と重複ないしはその周辺に位置している。柱穴 10 は不定形な隅丸方形を呈し、長さ 67cm、幅 54cm、深さ 49cmを測る。幅 20cmほどの柱痕跡を検出し、そこから土師器の皿３が出土した。柱穴 11 は方形を呈し、規模は長さ 43cm、深さ 46cmを測る。柱穴 12 は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 76cm、幅 60cm、深さ 24cmを測り、幅 22cmの柱痕跡を検出した。柱穴 13 は長さ 83cm、深さ 29cmの長方形の掘り方に、長さ 34cm、深さ 46cmの穴が掘られ、そこから柱材の一部が出土している。柱穴 18 との関連がうかがわれる。柱穴 14 は隅丸方形を呈し、規模は長さ 62cm、幅 48cm、深さ 46cmを測り、幅 14cmほどの柱痕跡を底面付近で検出した。柱穴 15 は隅丸長方形を呈し、長さ 109cm、幅 72cm、深さ 54cmを測る。底面では長さ 20cm、厚さ５cmほどの礎板石を確認した。柱穴 16 は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 86cm、幅 52cm、深さ 33cmを測り、幅 22cmの柱痕跡を確認した。柱 17 は円形を呈し、規模は径 47cm、深さ 54cmを測り、幅 13cmの柱痕跡を検出した。柱 18 は隅丸方形を呈し、規模は長さ 62cm、深さ 67cmを測り、一辺 29cmを測る柱痕跡を確認し、底面からは長さ 15cmほどの柱材、さらには土師器の皿４が出土した。柱穴 19 は長方形を呈し、規模は長さ 99cm、幅 79cm、深さ 56cmを測り、幅 42cmの柱痕跡を確認した。柱穴 20 は不定形の楕円形を呈し、規模は長さ 71cm、幅 52cm、深さ 45cmを測り、埋土中から端反りの白磁皿５が出土した。柱穴 21 は長さ 66cm、幅 59cm、深さ 51cmの隅丸方形の掘り方に長さ 51cm、深さ 26cmの穴が掘られている。柱穴 22 は隅丸方形を呈し、規模は長さ 82cm、幅 61cm、深さ 49cmを測る。



第22図　土坑36・出土遺物



第23図　土坑37



第24図　土坑38・出土遺物

４　土坑

土坑36（第22図、ＰＬ.３）

土坑 37 の北西約５ｍに位置しており、赤褐色ローム上面で検出した。平面形は不定形の隅丸方形を呈し、規模は長さ 139㎝、幅 108㎝、深さ 37㎝を測る。遺物は埋土中から６が出土している。時期は 19 世紀以降と考えられる。

土坑 37（第 23 図）

土坑 36 の南東約５ｍに位置しており、一部が調査区外へのびる。土坑 36 と同様、赤褐色ローム上面で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長さ 91㎝、幅 82㎝、深さ 28㎝を測る。遺物が出土しておらず時期の特定はできないが、埋土が土坑 36 のものと類似していることから、ほぼ同時期のものと捉えている。

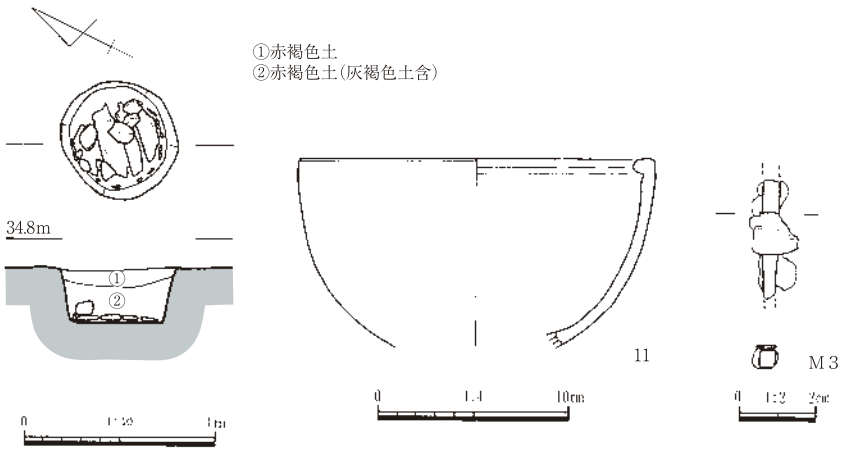
土坑38（第24図、ＰＬ.３・22）

掘立柱建物１と重複し、黄褐色ローム上面で検出した。北側は調査区外にのび、西側は掘立柱建物１に切られているため、全容は不明瞭である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は残存長 151㎝、深さ 35㎝を測る。底面中央付近において９・10 が重なり合った状態で出土し、その周辺において、細長い茎状の炭化物が一面に認められた。この他、埋土中より７・８が出土した。７～10 は土師器であり、７は坏、８～10 は皿で

ある。時期は中世前期と考えられる。

土坑39(第25図、ＰＬ.３)

掘立柱建物２の西側に近接し、Ｖ層上面で検出した。規模は長さ 62㎝、深さ 37㎝を測り、平面形は円形を呈する。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は赤褐色土の単層で締まりがなく、一気に埋められたものと考えられる。底面からは桶が検出され、その上に一辺 12㎝ほどの礫及び 11 が置かれていた。桶は円形の底板の周りに薄い板を並べていたことから、結桶と考えられる。11 は鉢であり、口縁端部が内側に拡張し、内外面に釉がかかる。時期は 19 世紀以降と考えられる。



第25図　土坑39・出土遺物

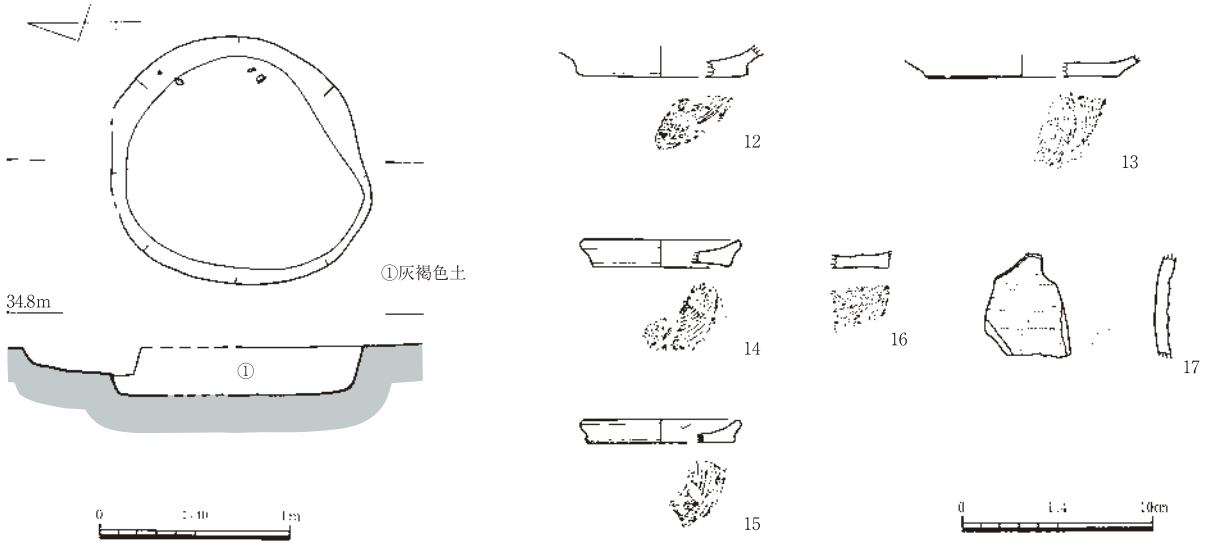
土坑40（第26図、ＰＬ.３）

掘立柱建物２の南側約３ｍに位置しており、Ｖ層上面で検出した。遺構の東側と中心部分ではⅢ層を埋土にもつピットによって切られる。平面形は不定形な円形を呈しており、規模は長さ 140㎝、深さ 26㎝を測る。底面は平坦で、断面形は皿状となる。

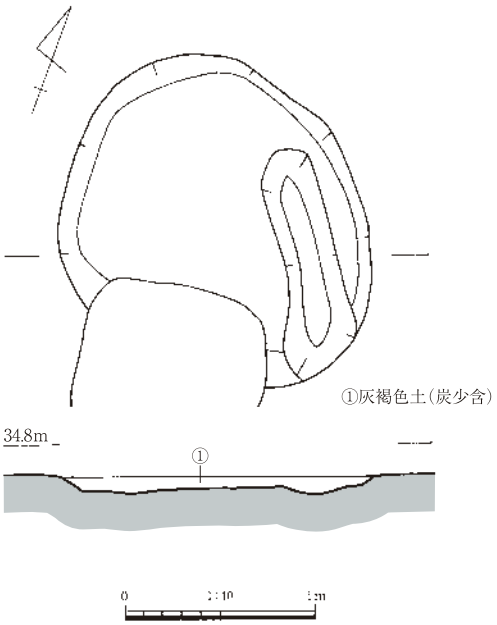
遺物は埋土中から 12 ～ 17 が出土した。17 は弥生土器の壺であり、混入したものと思われる。外面には縦方向のハケメ後、４条の凹線文を施す。12・13 は土師器の坏であり、12 の体部との境には明瞭な段が付く。ともに底部は回転糸切りである。14 ～ 16 は土師器の皿で、底部は回転糸切りである。時期は中世前期と考えられる。

土坑41（第27図、ＰＬ.３）

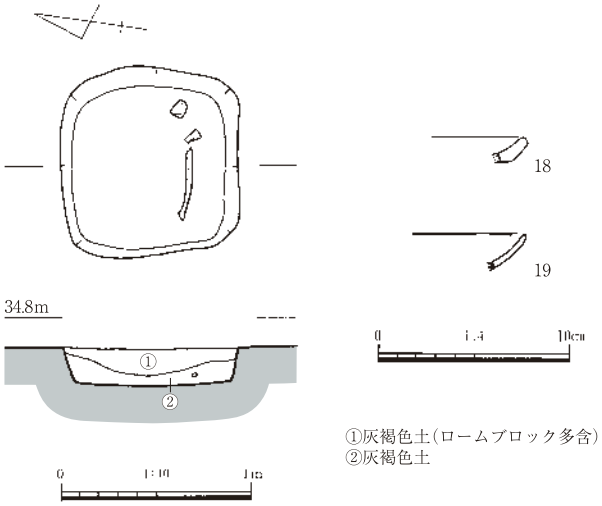
土坑 40 の西側に位置しており、Ｖ層上面で検出した。遺構の南側は土坑 42 によって切られており、



第26図　土坑40・出土遺物



第27図　土坑41



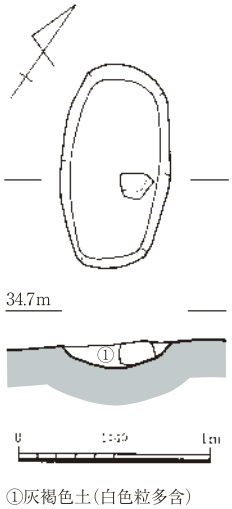
第28図　土坑42・出土遺物

一部が消失していた。平面形は円形を呈しており、規模は長さ 180㎝、幅 165㎝、深さ７㎝を測る。底面は若干凹凸が認められるものの、ほぼ平坦であり、東側においては長さ 121㎝、幅 28㎝、深さ８㎝を測る溝状の落ち込みを検出した。遺物は出土しておらず時期の特定はできないが、埋土の状況や土坑 42 の時期などから判断すると、中世前期のものと考えられる。

土坑42（第28図、ＰＬ.３）

土坑 40 の西側に位置しており、土坑 41 を切る。遺構の検出は土坑 41 と同様、Ｖ層である。平面形は方形を呈しており、規模は長さ 102㎝、幅 88㎝、深さ 18㎝測る。底面は平坦であり、そこからやや浮いた状態で長さ 38㎝ほどの木片を検出した。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は方形状を呈する。埋土は黒褐色土ブロックを多く含んでおり、人為的に埋められた可能性が高い。

遺物は埋土中から 18・19 が出土した。18 は土師器の皿であり、回転台による成形と思われるが、器面が摩滅し詳細は不明である。19 は白磁の碗である。時期は中世前期と考えられる。



第29図　土坑43

土坑 43（第 29 図）

土坑 41・42 の西側約３ｍに位置しており、Ｖ層上面で検出した。平面形は隅丸長方形を呈しており、規模は長さ 108㎝、幅 57㎝、深さ 23㎝を測る。底面はほぼ平坦であるが、中央にかけて緩やかに落ち込み、断面形が皿状を呈する。遺構の中央やや東側では、底面からやや浮いた状態で一辺 26㎝ほどの石を検出した。埋土はⅢ層に由来する灰褐色土からなる。このような埋土をもつ遺構は、調査区西側ないしは 15 区南側のＶ層上面において検出されており、関連性が窺われる。遺物は出土しておらず、時期を特定することができないが、埋土の状況から判断すると、中世前期と考えられる。

５　たわみ

たわみ１（第 30 図）

土坑 43 の南側約３ｍに位置している。重機による表土除去後にＶ層ないしはＡＴ上面で検出した。遺構の東西は調査区外にのびており、全容は不明である。掘り方は不明瞭であり、東西に細長い溝状を呈した浅い落ち込みとなる。規模は幅 82 ～ 162㎝、深さ６㎝を測り、東西９ｍほどを検出した。底面はほぼ平坦であるが、中央に向かってやや落ち込んでいる。断面形は皿状を呈する。

遺物は埋土中より 20 が出土した。20 は備前焼の壺であり、口縁部端部を外側に折り曲げる。時期は中世と考えられる。

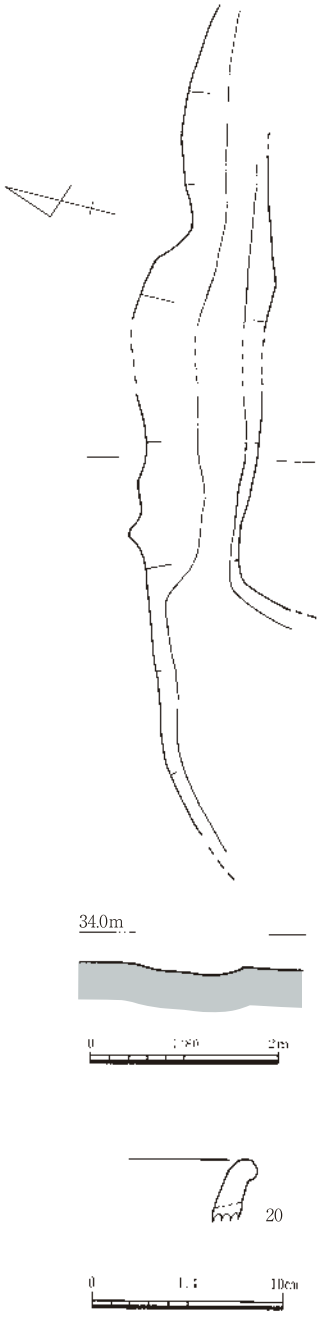
６　ピット出土遺物（第 31 図）

ピットから出土した遺物は 21 ～ 24、Ｍ４である。21 はＰ 483 から出土し、手づくねによって成形された土師器の皿である。口縁部を外反させ、横方向のナデを施す。外面には段が付き、口縁端部内側には浅い凹線がめぐる。22・Ｍ４はＰ 484 から出土しており、このうち 22 は混入したものと思われる。22 は鼓形器台であり、外面には横方向のナデ、内面にはヘラミガキを施す。Ｍ４は鉄製の釘で、頭部が不正形な円形となる。23 はＰ 485 から出土した土師器の坏である。回転台を使用しているものと考えられるが、器面が摩滅しており詳細は不明である。24 はＰ 486 から出土した土師器の坏である。底部は静止糸切りであり、内面には不定方向のナデが施される。

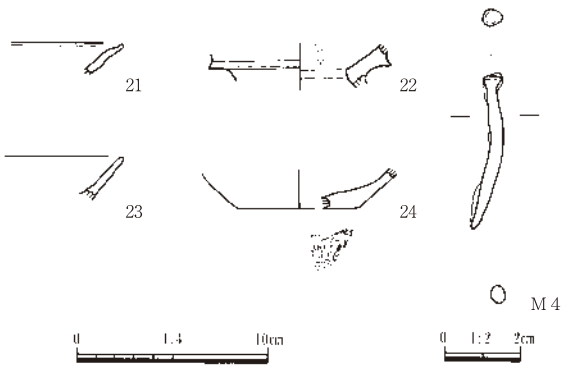
７　包含層出土遺物（第 32 図）

主にＶ層中から出土したものであり、一部に掘立柱建物２の周辺部分において堆積する黄褐色ロームブロック中から出土したものが含まれている。

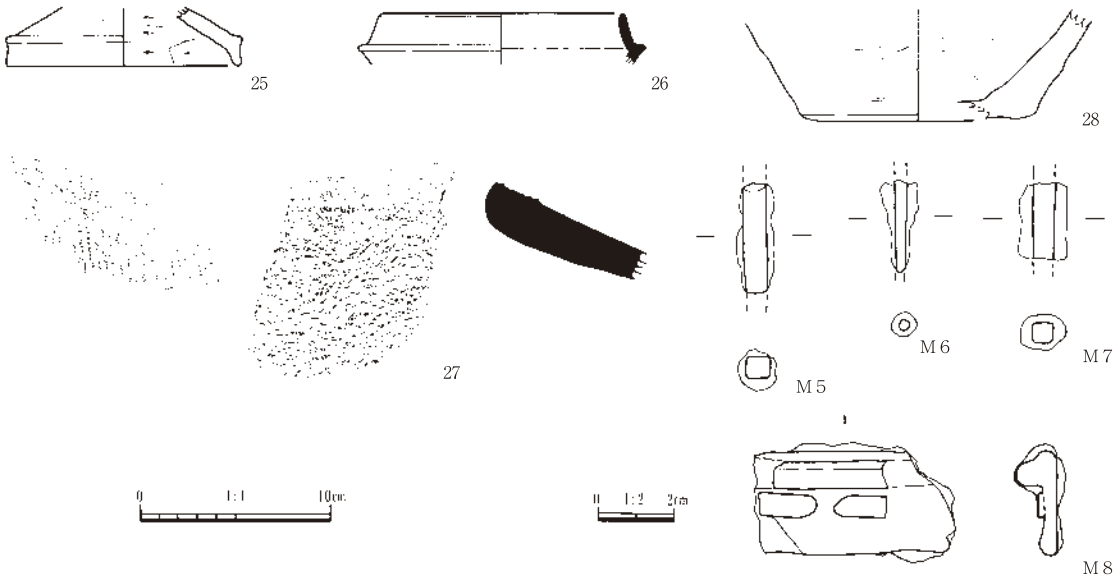
25 ～ 27、Ｍ５～Ｍ８はＶ層中から出土したものである。25 は弥生土器の蓋で、下方に拡張した口縁端部をもち、外面体部との境が突出する。外面にはナデ後３条以上の沈線文、内面には横方向のヘラケズリを施す。26・27 は須恵器で、26 は蓋坏の坏身である。27 は甕であり、外面に平行叩き、内面には当具の痕跡が残る。Ｍ５～Ｍ７は棒状鉄製品で、Ｍ５・Ｍ６は釘の可能性がある。Ｍ８は板状鉄製品で器種は不明である。28 は黄褐色ロームブロック中で出土した備前焼の甕である。



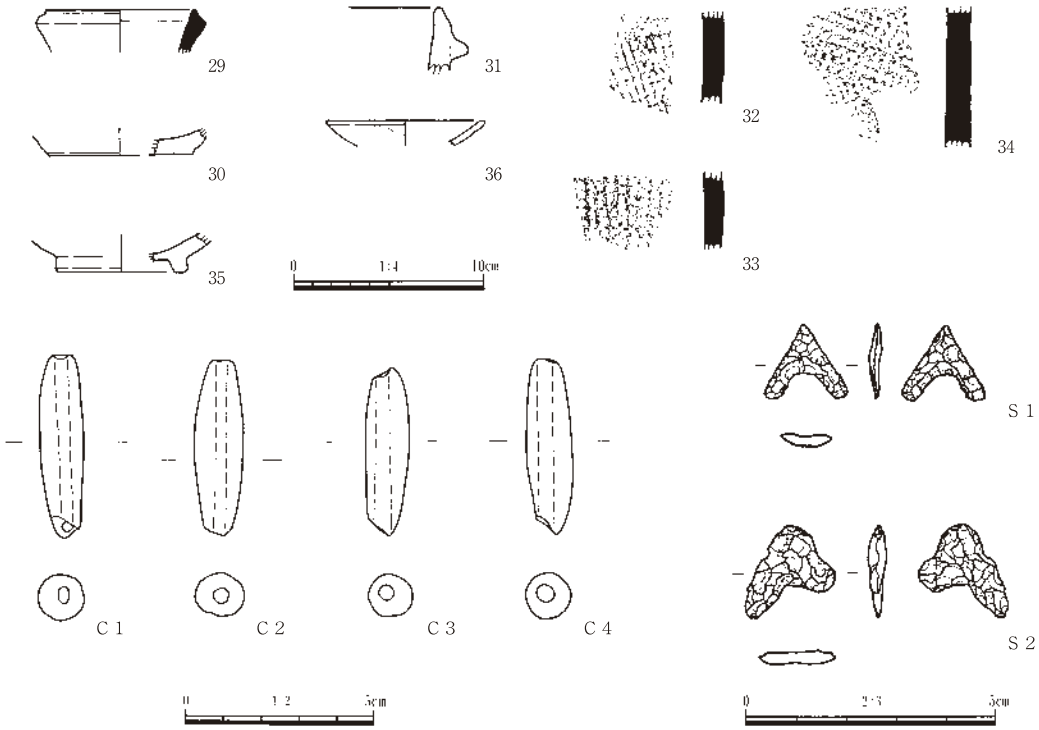
第30図　たわみ１・出土遺物



第31図　ピット出土遺物



第32図　包含層出土遺物



第33図　遺構に伴わない遺物

８　遺構に伴わない遺物（第 33 図）

遺構に伴わない遺物としては 29 ～ 35、Ｃ１～Ｃ４、Ｓ１・Ｓ２が出土した。29 は須恵器の壺、30 は土師器の坏である。31 は瓦質の羽釜で口縁部直下に短い鍔が付く。32 ～ 34 は須恵器の甕で外面に格子状の叩きを施す。35 は陶質の壺で底部に高台が付く。36 は灯明皿で口縁部外面と内面全体に釉がかかる。Ｃ１～Ｃ４は環状土錘、Ｓ１・Ｓ２は凹基式の石鏃であり、黒曜石製である。

第３節　９区の調査

１　調査区の概要

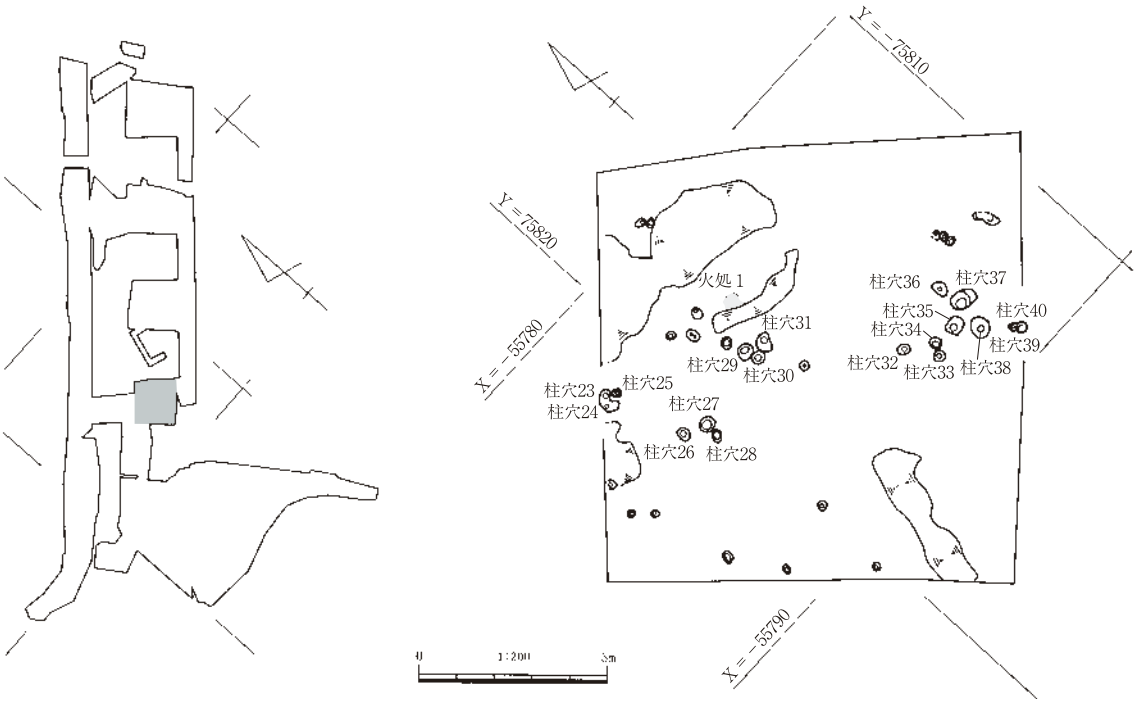
９区は遺跡の中央に位置しており、北西側は 12 区、南東側は 17 区と接する。この調査区は橋脚部にあたり、長さ 12 m、幅 10.7 mの方形となっている。地形は東側にかけて緩やかに下る緩斜面となっており、耕作に適した地形とするために改変が行われ、調査前は段々畑となっていた。このため調査区の東側は削平されて低くなり、西側は一段高くなっていた。

層序であるが、東側は地形を改変する際の削平により残りが悪く、表土直下はＡＴとなっていた。一方、西側は東側に比べて残りがよく、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ層が堆積していたが、調査区の 1/3 ほどが土取りのため黒褐色土まで掘削されていた。確認した遺構面は全部で４面あり、その内訳は古代以前が１面、中世前期が２面、中世後期以降が１面である。

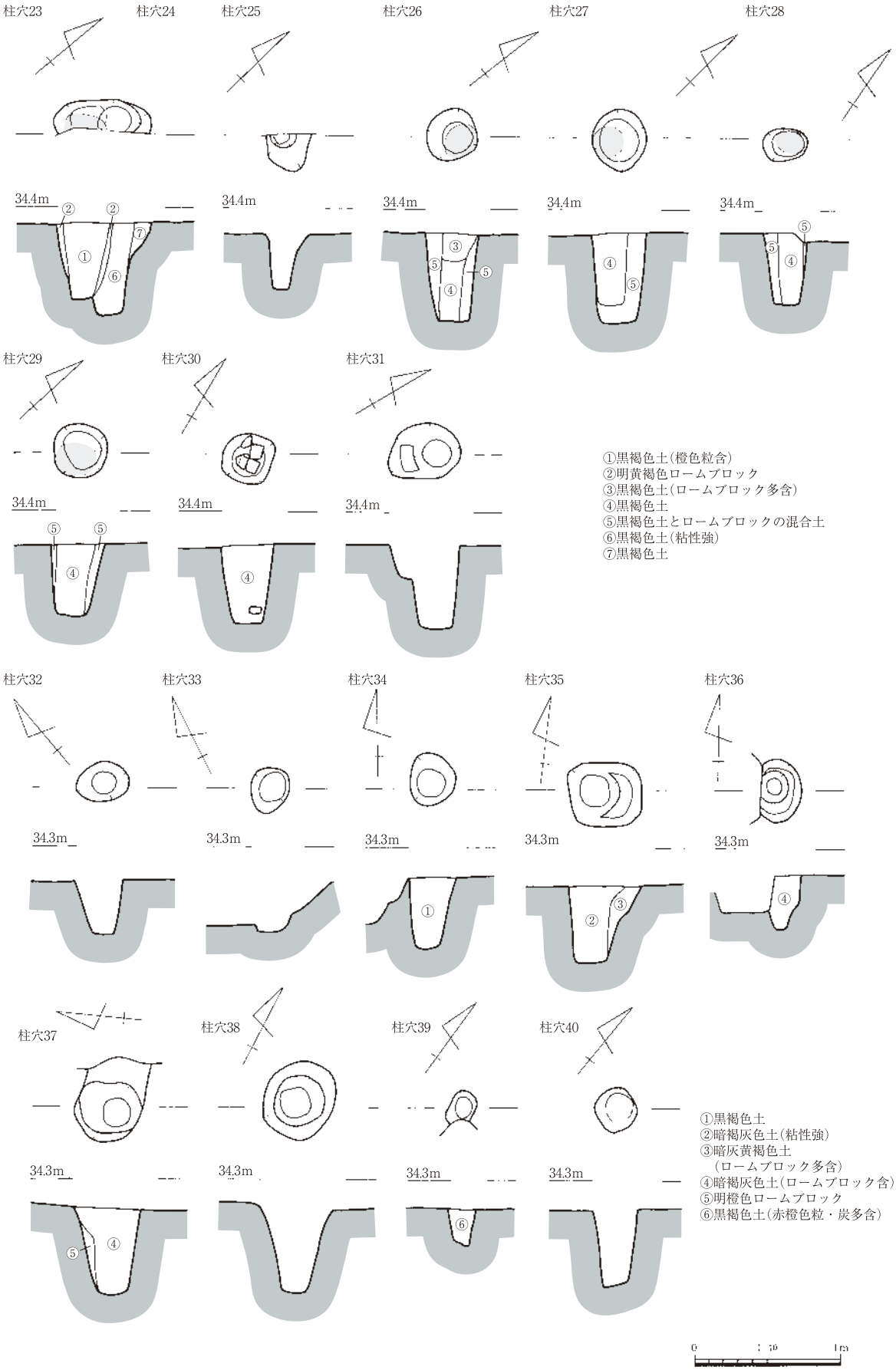
２　古代以前の調査

この時期の遺構は竪穴住居ないしは掘立柱建物となりえる柱穴 17 基、ピットをＡＴ上面で検出した。これらの遺構の時期はおおむね弥生時代のものと考えられるが、遺構から遺物が出土していることが稀であることから正確には不明である。

遺物は縄文時代から古代までのものが出土しているが、縄文時代、古墳時代、古代のものは希薄であり、弥生時代が主体となる。弥生時代の遺物は中期中葉から後期前葉のものが出土しており、これらは遺跡内で検出した竪穴住居や土坑の時期と一致する。



第34図　遺構配置図（古代以前）

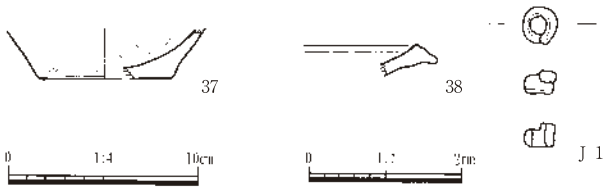

柱穴23
柱穴24
柱穴25
柱穴26
柱穴27
柱穴28
34.4m
柱穴29
柱穴30
柱穴31
①黒褐色土（橙色粒含）
②明黄褐色ロームブロック
③黒褐色土（ロームブロック多含）
④黒褐色土
⑤黒褐色土とロームブロックの混合土
⑥黒褐色土（粘性強）
⑦黒褐色土
柱穴32
柱穴33
柱穴34
柱穴35
柱穴36
34.3m
柱穴37
柱穴38
柱穴39
柱穴40
①黒褐色土
②暗褐灰色土（粘性強）
③暗灰黄褐色土
（ロームブロック多含）
④暗褐灰色土（ロームブロック含）
⑤明橙色ロームブロック
⑥黒褐色土（赤橙色粒・炭多含）

第35図　柱穴23～40

（１）柱穴

柱穴 23 ～ 40（第 35・36 図、ＰＬ.51）

柱穴 23 ～ 31 は調査区西側に位置する。これらは３基がひとまとまりとなって３箇所で検出された。これらはその配置状況から、２回ほど建て替えが行われた竪穴住居の主柱穴として捉えることが可能性であるが、周辺が風倒木による攪乱を受けており、詳細は不明である。



第36図　柱穴出土遺物

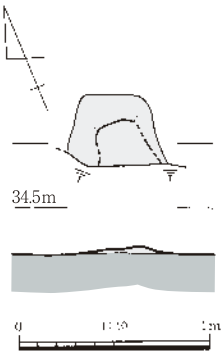
柱穴 23 ～ 25 は調査区北東側に位置している。柱穴 23・24 は切り合っており、柱穴 23 が新しい。柱穴 23 の掘り方は円形を呈し、規模は長さ 39㎝、深さ 52㎝を測る。柱穴内において長さ 30㎝ほどの柱痕跡を確認した。柱穴 24 の掘り方は円形を呈し、規模は長さ 22㎝、深さ 56㎝を測る。柱穴 25 の掘り方は上面が隅丸長方形、底面が円形を呈し、規模は長さ 26㎝、深さ 38㎝を測る。

柱穴 26 ～ 28 は柱穴 23 ～ 25 の南側約３ｍに位置している。柱穴 26 の掘り方は円形を呈し、規模は長さ 36㎝、深さ 62㎝を測る。柱穴内では長さ 23㎝ほどの柱痕跡を確認した。柱穴 27 の掘り方は円形を呈し、規模は長さ 38㎝、深さ 62㎝を測る。柱穴内において幅 22㎝ほどの柱痕跡を確認した。柱穴 28 の掘り方は楕円形を呈し、規模は長さ 29㎝、深さ 50㎝を測る。柱穴内において長さ 19㎝ほどの円形をした柱痕跡を確認した。

柱穴 29 ～ 31 は柱穴 26 ～ 27 の西側約２ｍに位置する。柱穴 29 の掘り方は円形を呈し、規模は長さ 37㎝、深さ 48㎝を測る。柱穴内には長さ 28㎝ほどの楕円形をした柱痕跡を確認し、その埋土中から 37 が出土した。柱穴 30 の掘り方は円形を呈し、規模は長さ 36㎝、深さ 54㎝を測る。底面では一辺 20㎝、厚さ４㎝を測る礎板石が割れた状態で検出された。柱穴 31 は二段に掘られており、上面は楕円形、下面は円形を呈する。規模は上面の長さ 50㎝、下面の長さ 32㎝、深さ 56㎝を測る。

柱穴 32 ～ 40 は調査区東側に位置している。これらはまとまって検出されたが、竪穴住居や掘立柱建物としてまとめることができなかった。

柱穴 32 の掘り方は円形を呈し、規模は長さ 33㎝、深さ 37㎝を測る。柱穴 33 は溝 21 によって切られており残りが悪い。平面形は円形を呈し、規模は長さ 32㎝、深さ 11㎝を測る。柱穴 34 の掘り方は円形を呈し、規模は長さ 36㎝、深さ 48㎝を測る。柱穴 35 は二段に掘られており、上面は隅丸方形、下面は円形を呈する。規模は上面で 49㎝、下面で 34㎝、深さは 53㎝を測る。柱穴 36 は柱穴 35 と同様二段に掘られており、上面は楕円形、下面は円形を呈する。規模は上面で 42㎝、下面で 22㎝、深さは 37㎝を測る。柱穴 37 の掘り方は隅丸方形を呈し、規模は長さ 46㎝、深さ 60㎝を測る。柱穴内において長さ 27㎝ほどの柱痕跡が認められ、裏込め土中からは巻き付けによって成形されたガラス玉Ｊ１が出土した。柱穴 38 の掘り方は楕円形を呈し、規模は長さ 64㎝、深さ 58㎝を測る。柱穴 39 の掘り方は隅丸方形を呈し、規模は長さ 25㎝、深さ 25㎝を測る。柱穴 40 は平面形が円形で、規模は長さ 31㎝、深さ 51㎝を測る。

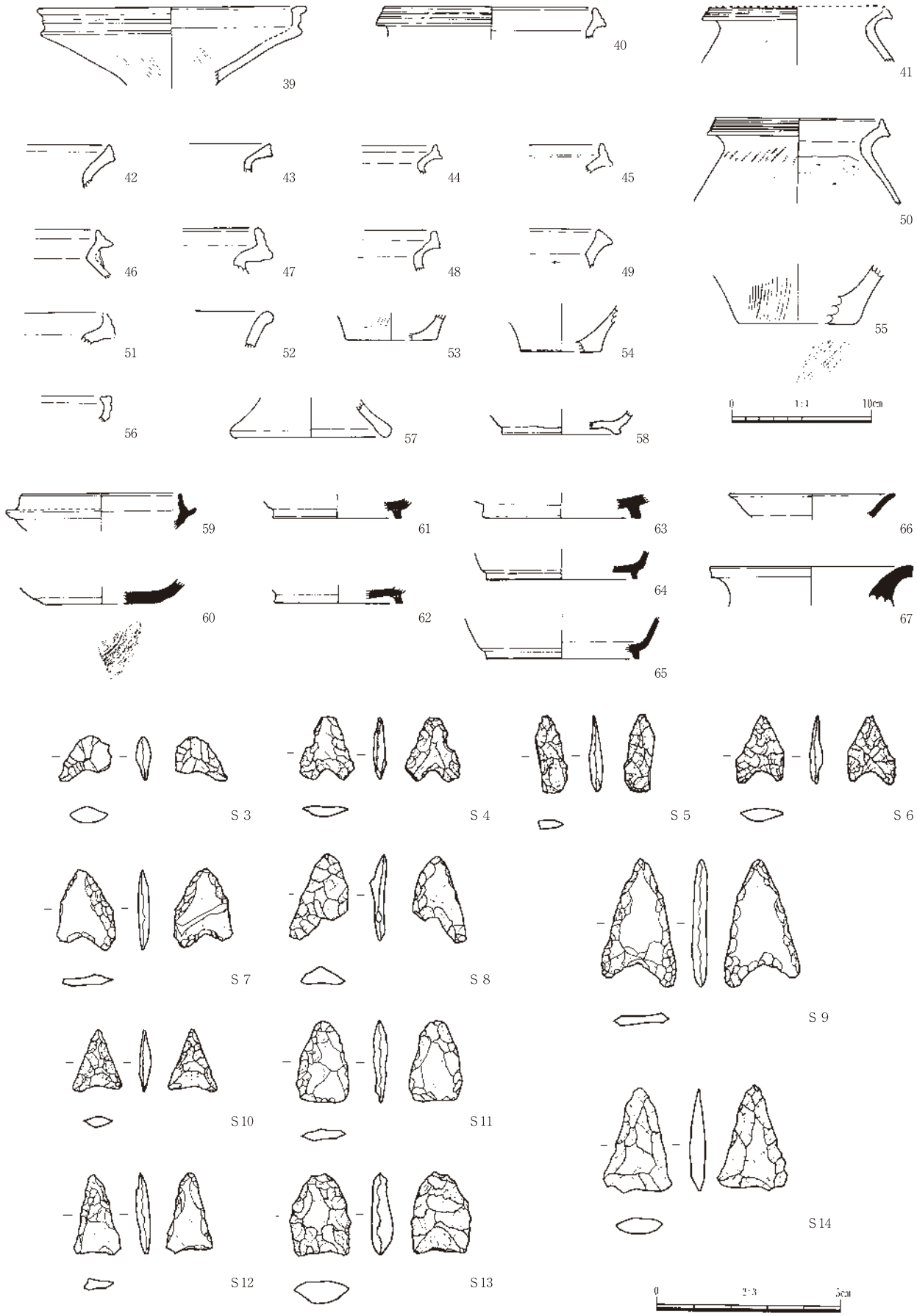


第37図　火処１

（２）火処

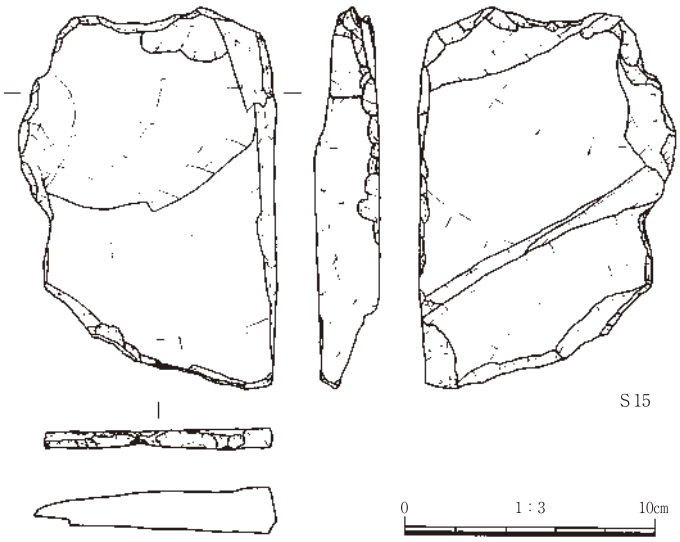
火処１（第 37 図）

調査区北側に位置しており、風倒木によって一部が壊されている。被熱は



第38図　ピット及び遺構に伴わない遺物①

長さ 50㎝、幅 38㎝の範囲で認められた。周辺には柱穴 23 ～ 31 があり、これらと関連する可能性が高いが、確認した状況からは断言できない。遺物は出土しておらず時期の特定はできないが、周辺の遺構の状況から弥生時代の可能性が高いといえる。



第39図　遺構に伴わない遺物②

（３）ピット及び遺構に伴わない遺物
（第 38・39 図、ＰＬ.22）

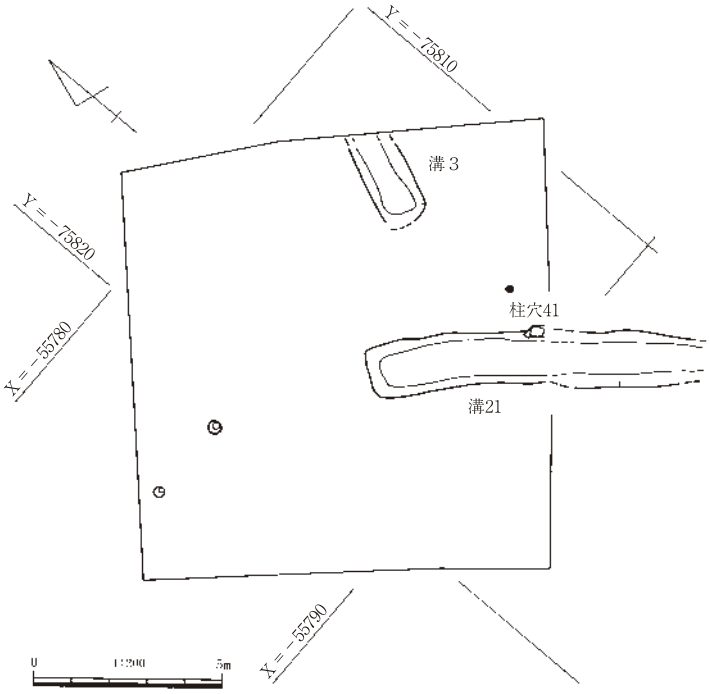
第 38・39 に掲げた遺物はピット及び黒褐色土、中世以降の遺構・包含層、表土から出土したものである。このうちＰ 487 からは 39、黒褐色土中からは 41・42、44・46、49 ～ 52、54 ～ 56、67 が出土した。

39～57は弥生土器である。55は壺、40～54は甕、39・56・57は高坏、58は土師器で高台付の坏である。59～67は須恵器で、59は蓋坏の坏身、60は無高台の坏、61～65は高台付の坏、66は皿、67は甕である。Ｓ３～Ｓ14は石鏃であり、このうちＳ３・Ｓ４・Ｓ６・Ｓ８・Ｓ13は黒曜石製、他はサヌカイト製である。Ｓ15はサヌカイトで、板状の石核である。

３　中世以降の調査

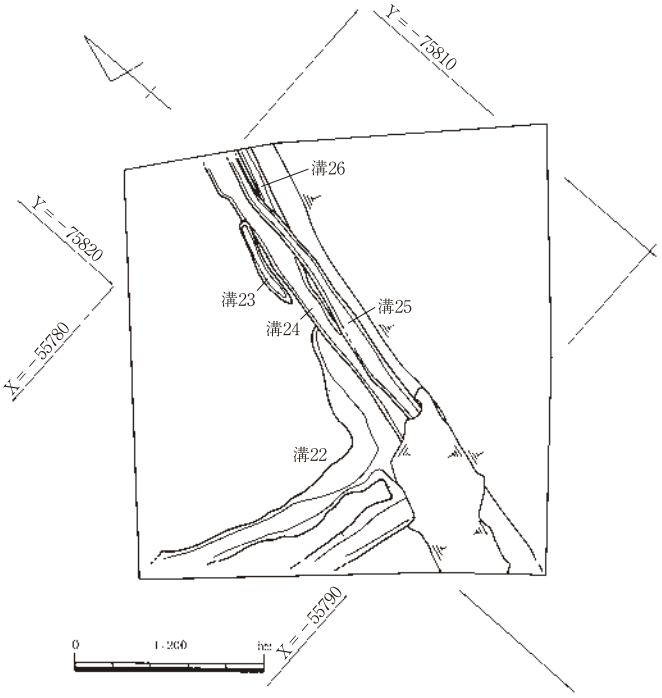
中世以降の遺構面は全部で３面あり、検出した層位、遺構の切り合い関係から第 40 図→第 41 図→第 42 図の順に変遷していくといえる。ここでは第 40 図を下層、第 41 図を中層、第 42 図は上層の遺構として報告していく。

下層の遺構はＶ層及びＡＴ上で検出し、ここでは溝２条、柱穴１基、ピットを確認した。これらはおおむね中世前期のものと考えられる。溝３・溝 21 は同規模・同形状のものであり、２つは「く」の字状に配置され、その間は３ｍほど離れていた。これらは形状及び配置状況から、建物や空間を区画するための溝と考えられ、この時期には区画施設を伴った屋敷地が形成されていたと思われる。

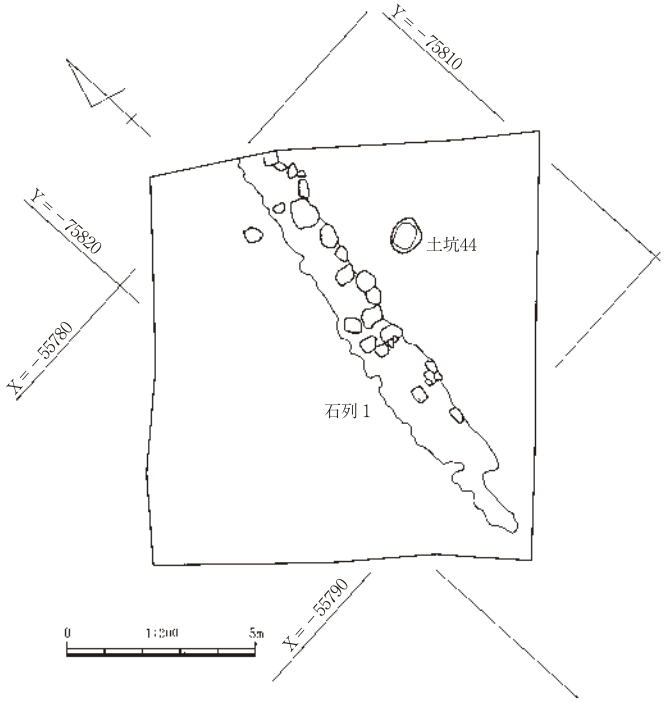


第40図　遺構配置図（中世以降・下層）

中層の遺構は下面と同様、Ｖ層上面で検出し、ここでは溝５条を確認した。これらの溝は浅く平面形が不明瞭なものであり、溝 22 のように埋土が



第41図　遺構配置図（中世以降・中層）



第42図　遺構配置図（中世以降・上層）

Ⅲ層となるものも認められた。また、15区の大畦畔１の延長上にあることや形状が水田１内にめぐる溝と類似していることなどから、15区の田畠の跡と関連するものと考えることができ、田畠の区画及び耕作に伴う溝と捉えることができる。

上層の遺構はⅠ層上面で検出し、ここでは石列１基を確認した。石列１は中面で検出された溝とほぼ同じ方向にのびていたことから、中世の段階で形成された地割りを近世においても踏襲していたといえる。

（１）下層の遺構

ア　溝

溝３（第43図、ＰＬ.４）

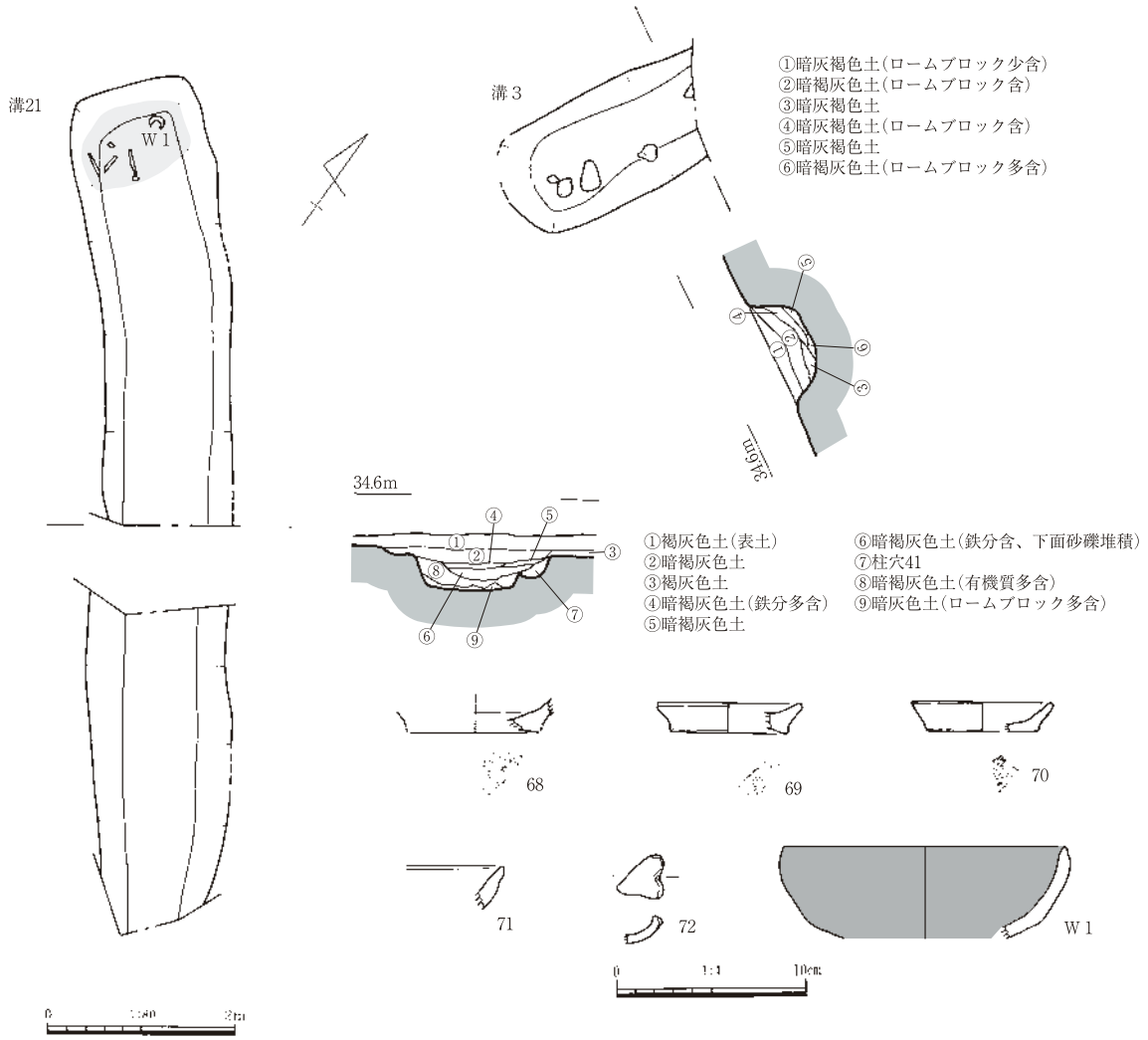
平成16年度に調査した続きにあたり、ＡＴ上面で検出した。遺構の周辺は削平を受けており、本来の遺構面より幾分か下がっていた。また、溝の端部は土坑44によって壊されていた。

南北方向へ直線的にのびる溝で、規模は幅124㎝、深さ48㎝を測り、軸はＮ－24°－Ｅと東に振れている。調査区境から西側約２ｍのところで終わっており、端部は方形に掘られていた。断面形は逆台形状を呈しており、底面は平坦であった。また、底部付近からは埋没中に落ち込んだものなのか12～32㎝の石がやや浮いた状態でみつかった。

遺物は埋土中から68～70が出土した。68は土師器の坏、69・70は土師器の皿である。これらは中世前期のものと考えられる。なお、平成16年度の調査では瓦質の羽釜が出土している。

溝21（第43図、ＰＬ.４）

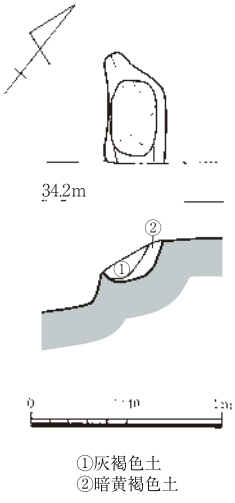
溝３の西側へ約３ｍ離れた場所から始まる溝で、Ⅴ層ないしはＡＴ上面で検出した。北西から南東方向にかけて直線的にのびる溝で、17区を通り越し、遺跡外までつづいている。端部の掘り方は方



第43図　溝３・21・出土遺物

形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦であった。規模は幅 150㎝、深さ 44㎝を測り、軸の方向はＮ－ 42 °－Ｗであった。端部付近では、長さ 117㎝、幅 82㎝の範囲で枝などの植物遺体がまとまってみつかっており、これらは投棄されたものの可能性が高いといえる。

遺物は埋土中から 71・72、植物遺体の集中箇所からＷ１が出土した。71・72 は土師器である。71 は手づくね成形の皿で端部付近が細くなる。72 は器種不明であるが皿の可能性がある。口縁部に工具による刺突が施され、火を受けたのか外面が発泡する。Ｗ１は漆塗りの椀である。

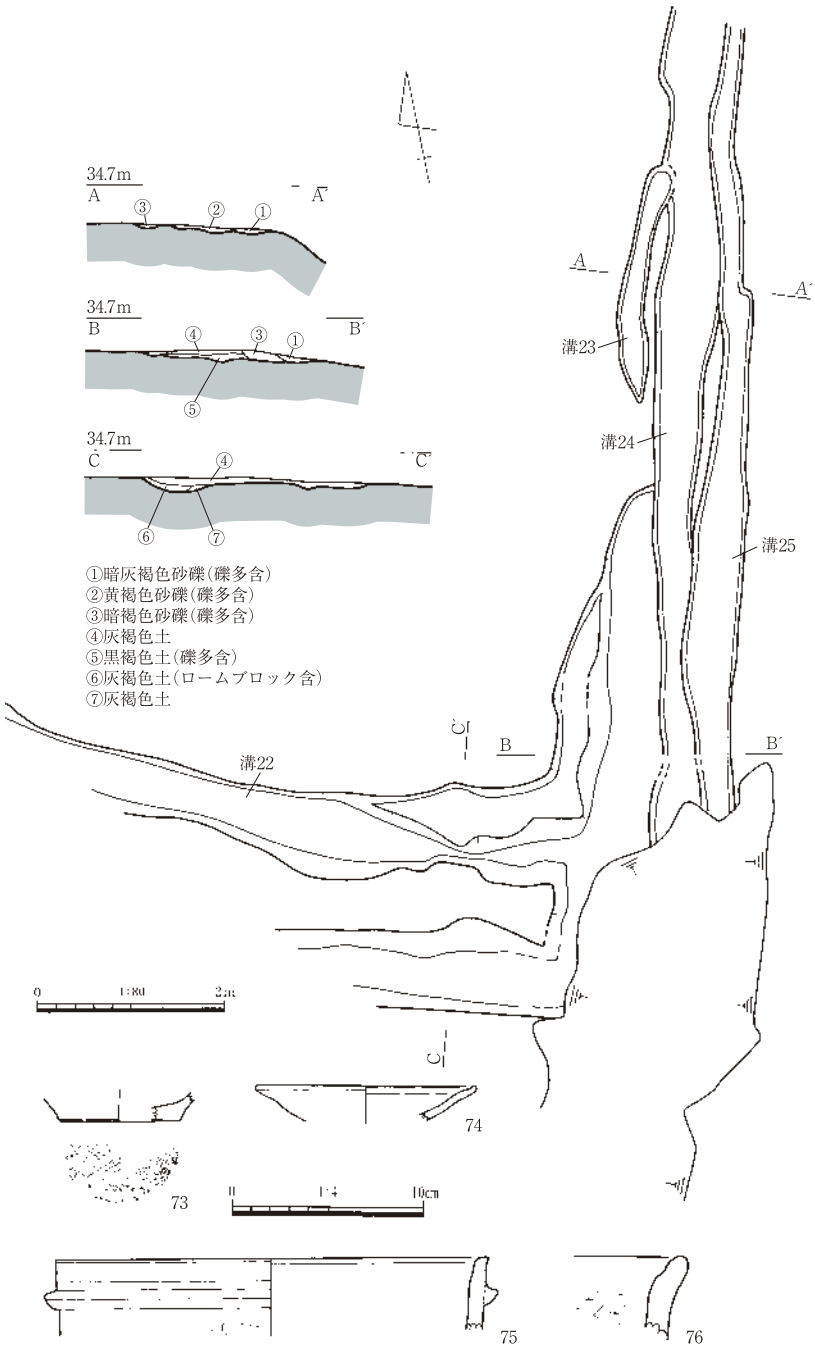


第44図　柱穴41

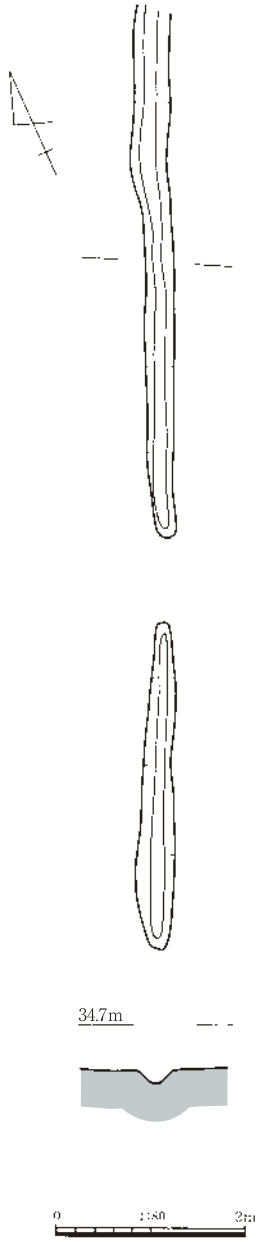
イ　柱穴

柱穴 41（第 44 図）

調査区南東側に位置しており溝 21 を切る。周辺には柱穴が認められず建物としてまとまらなかった。平面形は不定形な方形を呈し、規模は幅 30㎝、深さ 20㎝を測る。上面には長さ 41㎝の石が置かれていた。



第45図　溝22～25・出土遺物



第46図　溝26

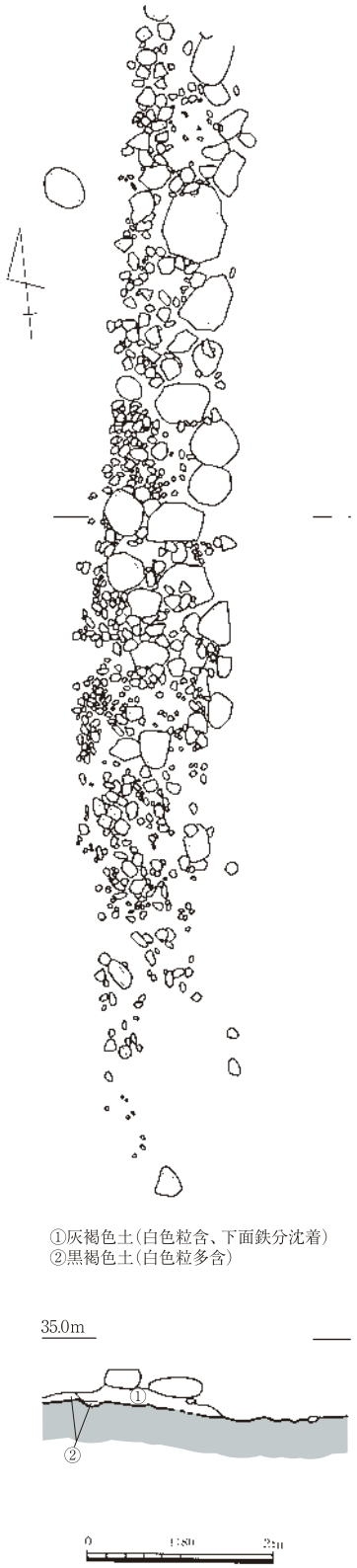
（２）中層の遺構

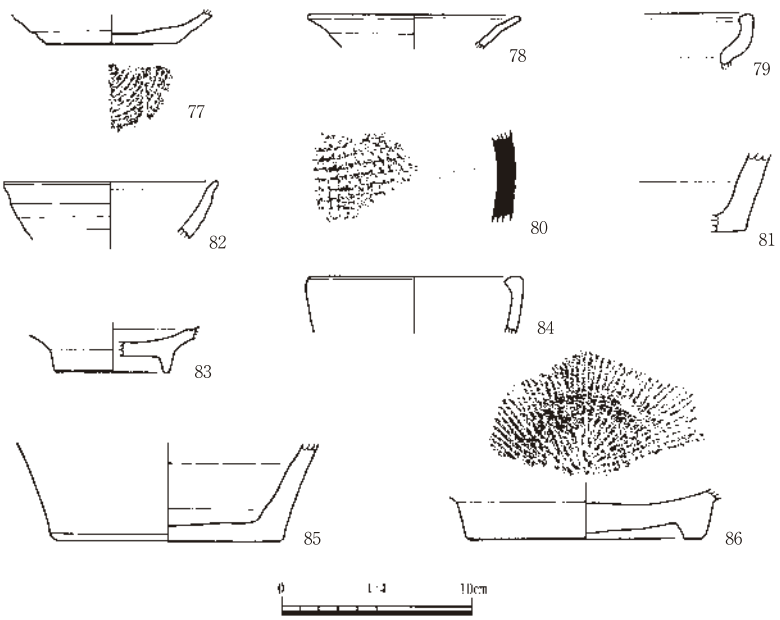
ア　溝

溝22～25（第45図、ＰＬ.５）

溝 22 は調査区中央に位置し、東西方向から南北方向に「Ｌ」字状に屈曲する浅い溝である。東西方向では中心部がやや高く２条に分かれており、後述する 15 区の水田１内にめぐる溝と類似している。規模は南側の溝が幅 96㎝、深さ９㎝、北側の溝が幅 92㎝、深さ６㎝、中央の高まりが幅 60㎝を測る。遺物は埋土中から 73 ～ 75 が出土した。時期は中世後期と考えられる。

溝23は南北方向に直線的にのびる浅い溝である。溝22を切り、溝24に切られる。断面形は皿状を呈





第47図　石列１・出土遺物

するが、明瞭ではない。規模は幅24cm、深さ４cmを測り、軸はN－17°－Eとやや東に振れる。

溝24は南北方向にのびる浅く短い溝であり、溝23を切る。断面形は皿状を呈するが、明瞭なものではない。規模は幅40～68cm、深さ４～10cmを測り、軸はN－14°－Eと溝23とほぼ同じである。埋土は黄褐色砂礫となっており、後述する石列１の周辺に堆積していた土と類似することから、これと関連する可能性が考えられる。

溝25は南北方向に直線的にのびる浅い溝であり、溝24を切る。断面形は皿状を呈するが、明瞭なものではない。規模は幅26～60cm、深さ４cmを測り、軸はN－12°－Eとなる。遺物は埋土中から土師器の甕76が出土している。

溝26（第46図）

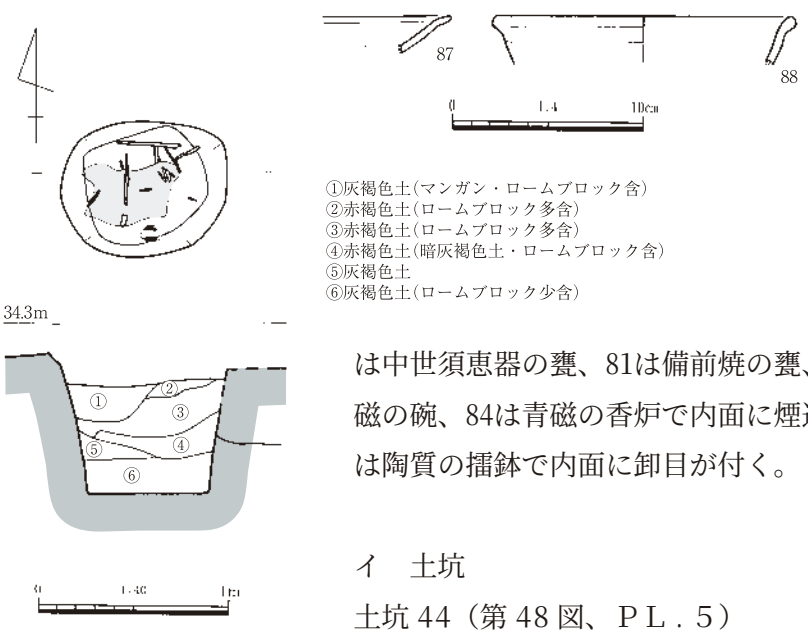
溝22～25除去後に検出した南北方向に直線的にのびる溝である。断面形は「U」字状を呈し、規模は幅32cm、深さ14cmを測り、軸はN－22°－Eと東に振る。

（３）上層の遺構

ア　石列

石列１（第47図、ＰＬ.５）

Ｉ層上面で検出した遺構である。溝22～26の直上に位置しており、軸がN－15°－Eとこれらとほぼ同じ方向にのびている。遺構は比較的大きく形の整った石を配し、石の西側には一辺６～30cmほどの礫を幅90～140cmの範囲で敷石状に敷き詰められていた。また、この礫の上及びその隙間には黄褐



第48図　土坑44・出土遺物

色を呈した砂礫層が堆積していた。

遺物は石の中から77～86が出土した。77～79は土師器であり、77は回転台成形による坏、78は手づくね成形の皿、79は鍋である。80は中世須恵器の甕、81は備前焼の甕、82は天目茶碗である。83は白磁の碗、84は青磁の香炉で内面に煙返しが付く。85は陶質の鉢、86は陶質の擂鉢で内面に卸目が付く。

イ　土坑

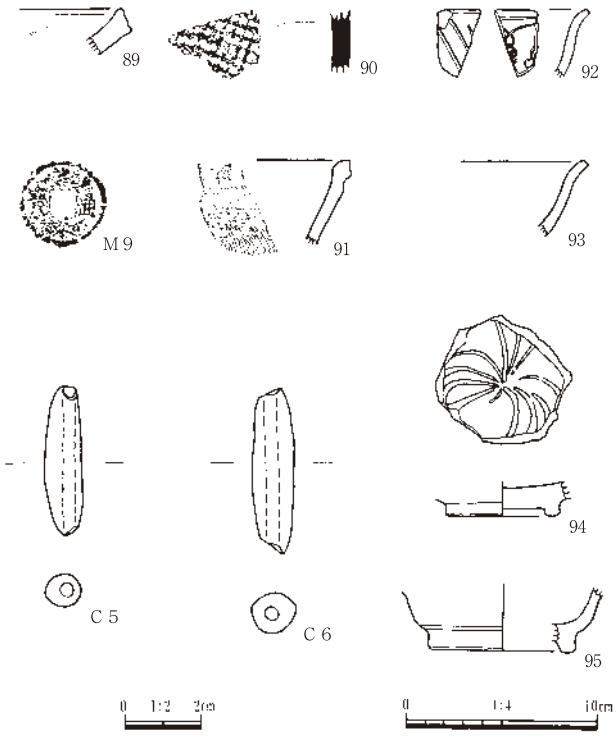
土坑 44（第 48 図、ＰＬ．５）

調査区の東側に位置しており、溝３を切る。遺構の検出面はＡＴ上面である。平面形は円形で、断面形は逆台形を呈している。底面は平坦となっており、やや浮いた状態で長さ 55㎝、幅 32㎝の範囲で木の枝や草がまとまって検出された。規模は長さ 90㎝、幅 70㎝、深さ 84㎝を測り、赤褐色土ロームの下の黄褐色ロームまで掘り込んでいた。埋土は灰褐色土と赤褐色ロームの混合土であった。これらは遺構を掘り込んだ際にでた土と考えられ、これらはブロック状に堆積していたことから人為的に埋められた可能性が高い。

遺物は埋土中より87・88が出土した。87は手づくね成形による土師器の皿、88は青磁の碗である。時期は出土遺物から中世後期以降のものと考えられる。

（４）遺構に伴わない遺物（第 49 図）

遺物は89～95、Ｃ５・Ｃ６、Ｍ９が出土した。89は土師器の鉢であり、内面にヘラミガキを施す。90は中世須恵器の甕であり、外面に格子状の叩き、内面には横方向のナデを施す。91は陶質の擂鉢で内面に卸目が付く。92は龍泉窯系青磁碗Ｉ類であり、内面には櫛目や片彫りによる花文様を施す。93は龍泉窯系青磁碗Ｄ類で外反する口縁部をもつ。火を受けたためか外面には発泡が認められる。94は龍泉窯系青磁碗Ｉ類であり、内面には片彫りの蓮華文を施す。95は龍泉窯系青磁碗である。Ｃ５・Ｃ６は管状土錘であり、中心には径４㎜ほどの孔を有する。Ｍ９は寛永通寶である。



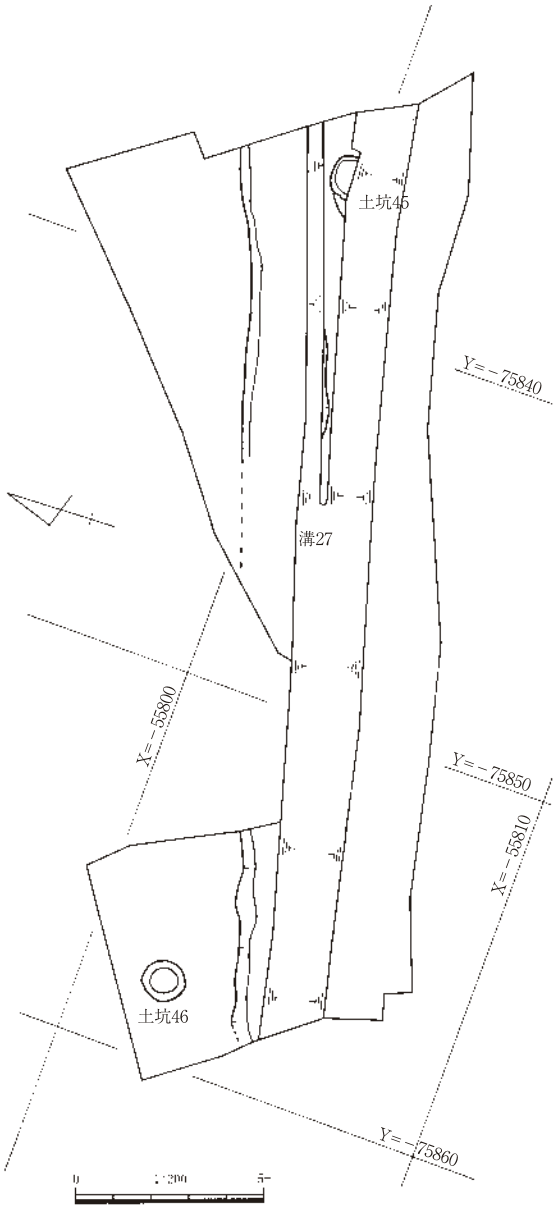
第49図　遺構に伴わない遺物

第４節　10・13区の調査

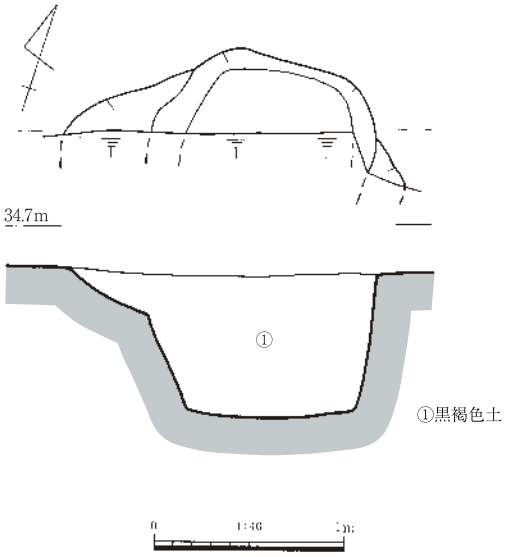
１　調査区の概要

９区は遺跡の西側に位置しており、北西側は８区、南東側は 14・15 区と接する。この調査区は長さ 24 m、幅４～ 11 mの逆「L」字状となっている。ここは当初、橋脚部分にあたる 10 区のみの調査となっていたが、排水管の設置箇所も調査対象地となったため、これを 13 区として新たに設定し、合わせて調査することになった。調査区の位置関係であるが、10 区は第 50 図に掲げた遺構配置図の東半分にあたり、13 区は西半分にあたる。ただし、調査区の設定が地形やグリッドに即したものでないこと、10・13 区を合わせて調査したことにより、その境が極めて曖昧なものになってしまった。このため本節では 10・13 区を１つの調査区として捉えて報告する。

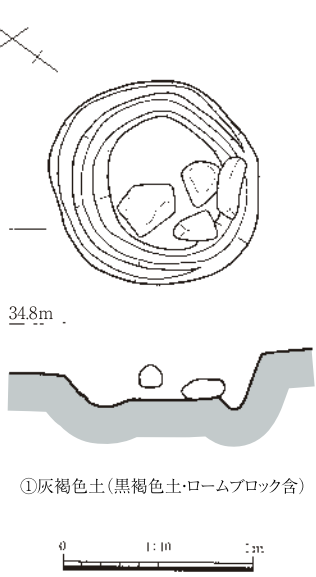
調査前の状況は、調査区北側が宅地、南側が道路となっていた。このため調査区全体が削平されており、表土及び道路の基礎部分の直下はＡＴないし赤褐色ロームとなっていた。また、道路には上水道や下水道の管が埋設されており、全体の 1/3 ほどがこれらの管の埋設部分にあたる。地形は後世の削平によって平坦なものとなっていたが、ここは南西側に門前鎮守山城跡が所在する小高い丘陵の裾部にあたるため、本来の地形は北側に向かって緩やかに下る緩斜面であったと考えられる。また、丘陵裾部ということで雨が降ると、丘陵部に降った雨水がここまで流れ込み、降った



第50図　遺構配置図



第51図　土坑45



第52図　土坑46

量にもよるが、２～３日は水の流れ込みが止まらず、排水に時間を要し調査の進捗に甚大な影響を及ぼした。

遺構の検出面はＡＴないしは赤褐色ローム上で行った。調査区の周辺には用水路が流れており、そこから染み出た水によって常に水没する状態であった。このため遺構の検出ないしは掘り下げにはかなりの労力を必要とした。検出した遺構は落とし穴１基、土坑１基、溝１条である。これらは同一面で検出されているが、遺構の形成時期は異なっている。落とし穴は埋土の状況から古代以前のものと判断できるが、正確な時期は不明である。このような落とし穴は 12 区や 14・15 区においても確認されており、これらは列状に配置されているようであり、一連のものである可能性が高いといえる。

土坑や溝は中世のものと考えられるが、土坑からは遺物が出土しておらず、正確な時期は不明である。溝は出土遺物から中世後期と考えられるもので、これとほぼ同時期と考えられる８区の掘立柱建物１・２や 15 区の造成土と軸の方向が一致しており、これらを区画するための溝であった可能性がある。また、この溝からは在地の土師器の皿と白磁の皿が一括で出土しており、在地の土器の編年の年代を決める手掛かりになるものと思われる。

２　土坑

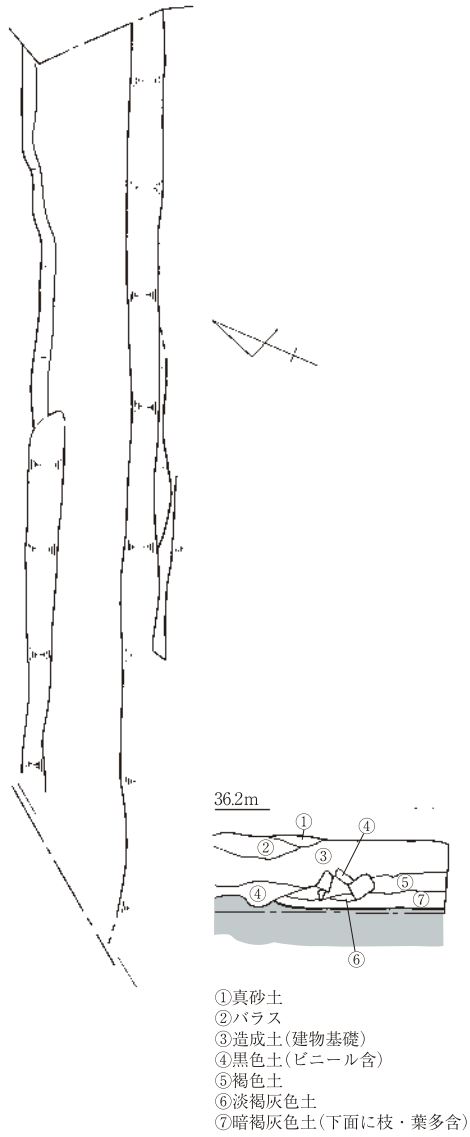
土坑 45（第 51 図）

調査区東側に位置する落とし穴である。遺構の検出面は赤褐色ロームがグライ化した明青灰色粘土上である。遺構の大半は下水道管の埋設の際に壊されていたため、形状・規模については不明瞭である。平面形は隅丸方形を呈しており、その東西には浅い掘り込みが認められる。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦でピットなどは確認できなかった。埋土はⅤ層に由来する黒褐色土である。規模は長さ 106㎝、深さ 73㎝を測る。遺物が出土しておらず時期は不明であるが、埋土の状況から古代以前に形成されたと考えられる。

土坑 46（第 46 図、ＰＬ．６）

調査区北西側、溝 27 の北側約 1.5 ｍに位置している。遺構の検出面はⅤ層ないしはＡＴ上である。

平面形は円形であり、底面には断面形が「U」字状を呈する幅 18cm、深さ６cmほどの浅い溝が縁に沿って掘られていた。また底部の南側には長さ 16cm～ 32cmほどの石がやや浮いた状態でみつかった。規模は長さ 107cm、深さ 18cmを測り、ＡＴまで掘り込まれていた。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、埋土がⅡ～Ⅲ層起源の灰褐色土であることから、中世に属する可能性が高いといえる。

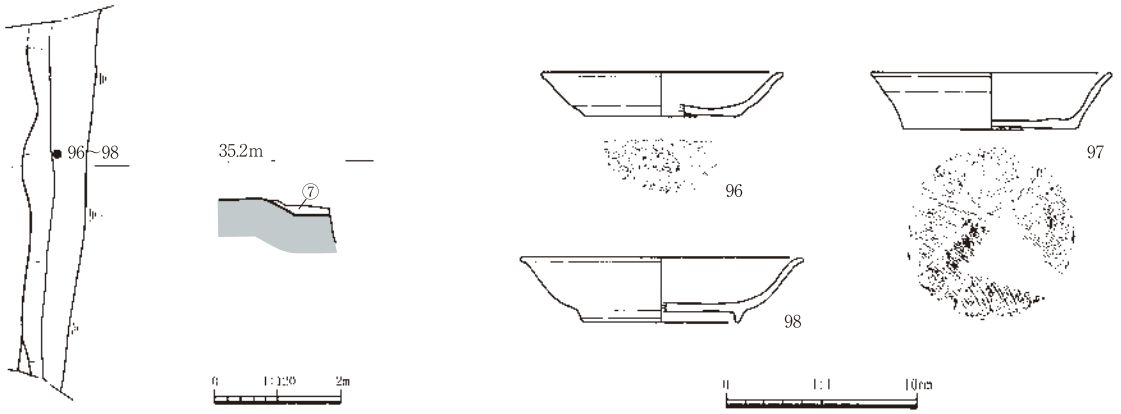


３　溝

溝 27（第 53 図、ＰＬ.23）

調査区の中心に位置しており、ＡＴないしは赤褐色ローム上で検出した。東西方向に直線的にのびる溝であり、軸はＮ－ 72 °－Ｅとやや北に振れる。遺構の大半は上下水道管の埋設の際に壊されており、形状・規模は不明瞭である。また、溝は調査区外までつづいているが 12 区では検出できなかったことから、東側に屈曲している可能性が考えられる。断面形は皿状を呈し、規模は幅 142cm、深さ 18cmを測る。埋土は暗褐灰色土であり、その下層には木の枝や葉などが堆積していた。また、図化していないがこの中には漆塗りの木製品の破片が含まれていた。

遺物は溝の西側から 96 ～ 98 がまとまって出土した。これらは出土状況から一括性の高いものと考えられる。96 は土師器の皿であり、底部は静止糸切りである。口縁部は湾曲して立ち上がり、端部付近で外反する。97 は土師器の皿であり、口縁部はやや外反しながら立ち上がる。底部は静止糸切りである。98 は白磁皿Ｅ類で、口縁部が外反する。遺構の時期であるが、出土した遺物から中世後期と考えられる。



第53図　溝27・出土遺物

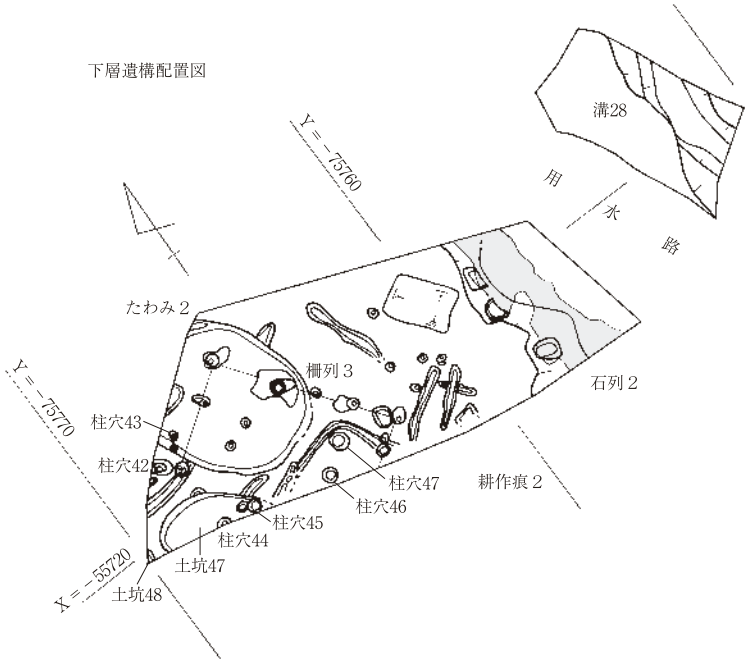
第５節　11区の調査

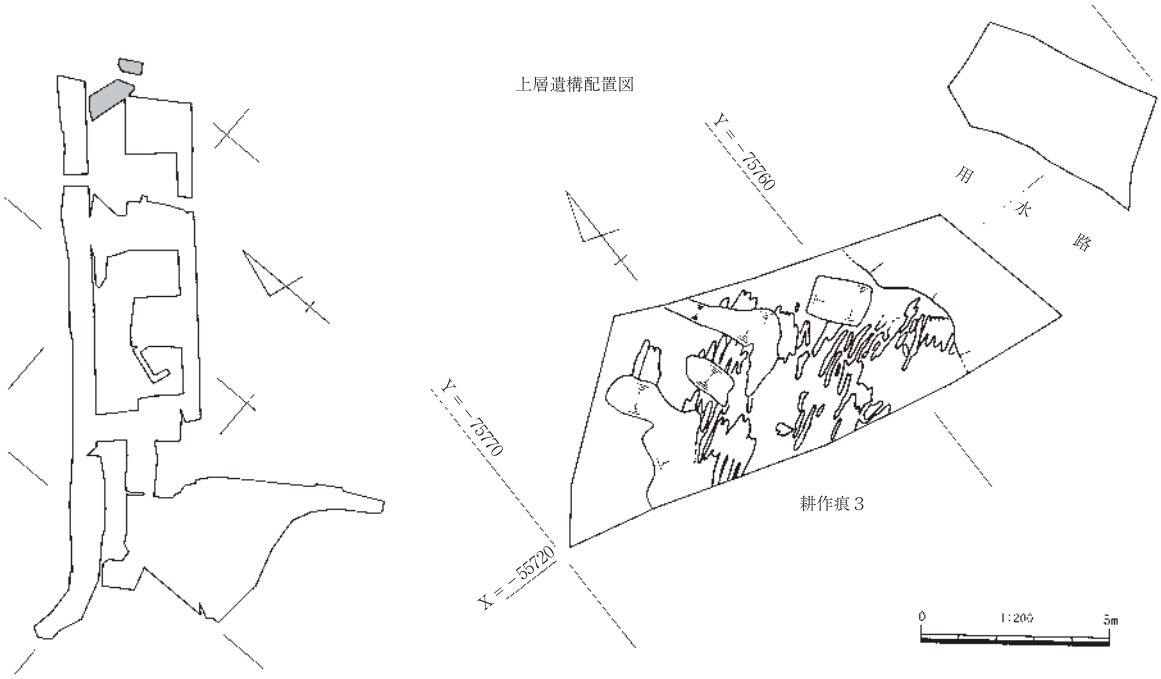
１　調査区の概要

遺跡の東側に位置しており、北側は５区、南側は２区に接している。調査区内には用水路が通っており、それによって調査区が東西に分断される。調査前の状況は用水路の西側が耕作地、東側は農道部分となっていた。なお、西側の耕作地は現在の土地造成によって客土が１m近く盛られており、一段高くなっていた。このため農道部分との高低差は1.5 m近くあった。

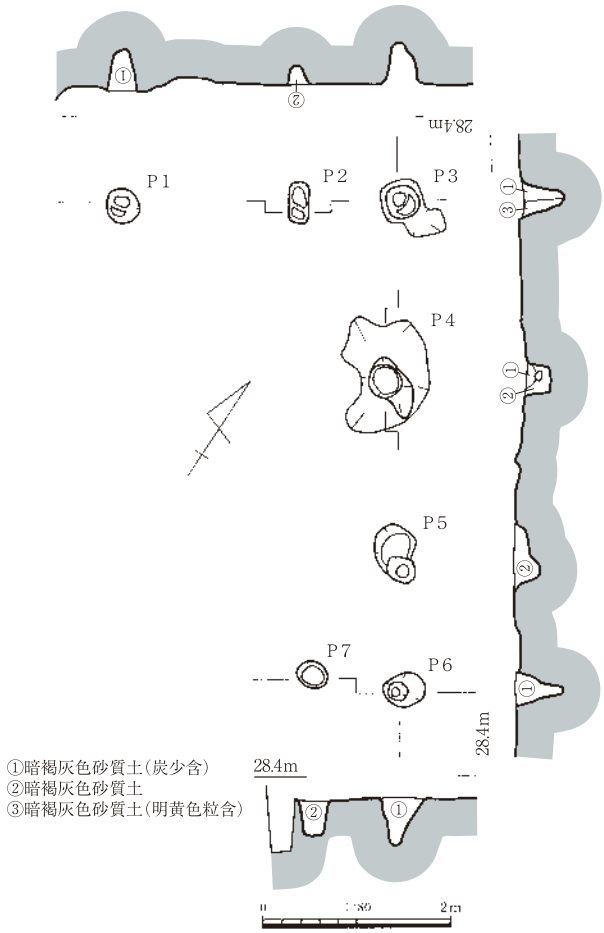
地形であるが、ここは名和川の氾濫原に位置し、その浸食作用によって段が形成され、西側が高く東側が低いものとなっていた。層序も東西で異なっており、西側では造成土、旧表土、Ⅵ層、Ⅶ層、そして基盤となる淡灰褐色細砂の順で堆積しており、東側は道路の基礎部分直下が名和川によって形成された礫層となっていた。

確認した遺構は、東側では礫層上面で溝１条、西側では淡灰褐色細砂上面で柵列１基、柱穴６基、土坑２基、たわみ１基、石列１基、耕作痕、Ⅶ層上面で耕作痕を確認した。このうちⅦ層上面で検出した耕作痕は近世、その他は中世のものと捉えてい

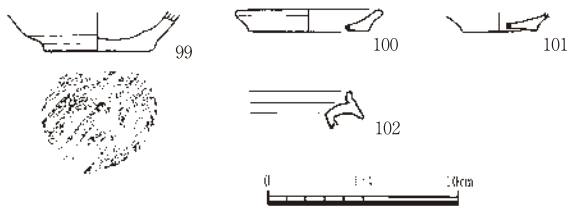




第54図　遺構配置図



第55図　柵列３・出土遺物

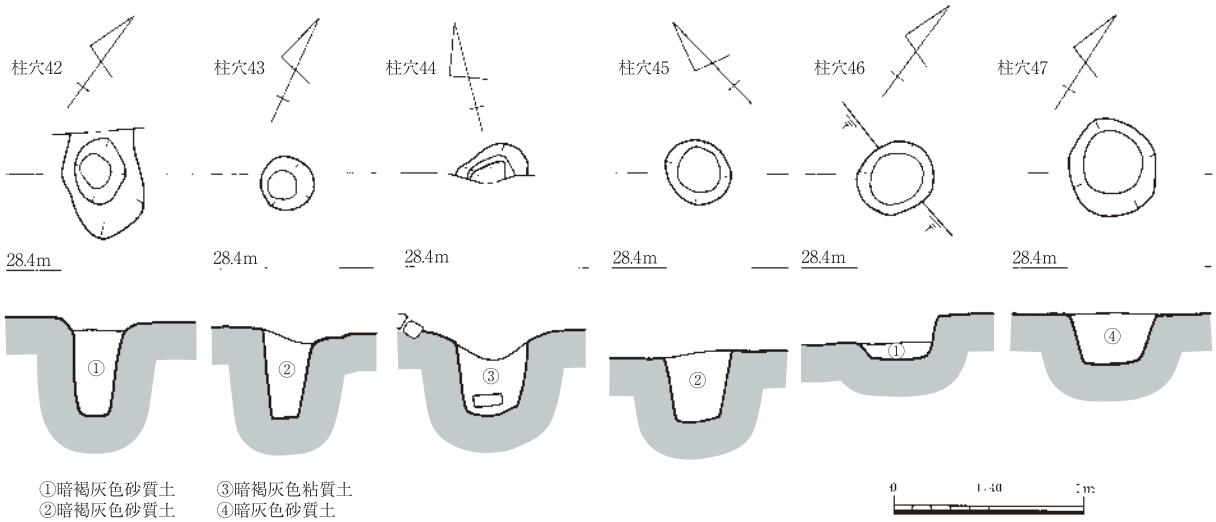


る。検出した中世の遺構は前期のものが主体となり、これらは段丘上段で形成された区画を伴う集落ないしは屋敷地と密接に関連するものと思われる。なお中世以前の遺構については検出できなかったため、中世の段階において名和川の氾濫原の一部が安定したものとなり、それ以降、現代に至るまで土地の利用が行われてきたといえるだろう。

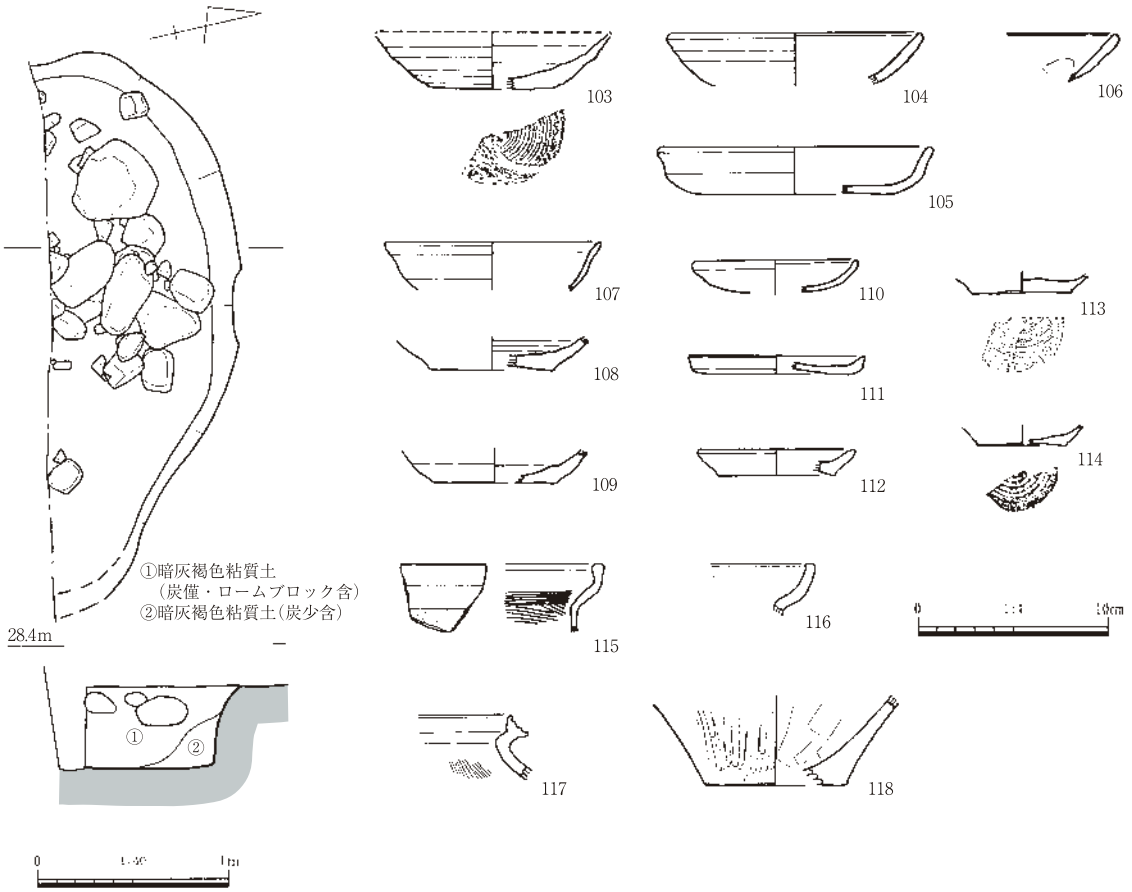
２　柵列

柵列３（第 55 図、ＰＬ．７・23）

調査区西側に位置し、たわみ２によって切られている。当初、掘立柱建物としていたが、建物としてまとまらなかったため、ここでは柵列として報告する。遺構は柱穴７基を確認した。これらは「コ」の字状に配されており、軸は南北でＮ－37°－Ｗと西に振る。規模は南北558cm、東西132～336cmを測り、柱間距離は東西90～186cm、南北128～202cmを測る。柱穴の平面形は円形を基本とするが、Ｐ２のように隅丸長方形のものも認められる。規模は長さ24～44cm、深さ20～50cmを測る。また、Ｐ３では幅14cmほどの柱痕跡を確認した。



第56図　柱穴42～47



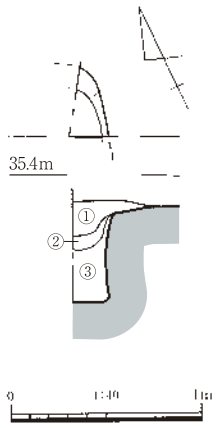
第57図　土坑47・出土遺物

遺物はＰ５から 99、Ｐ６から 101、Ｐ７から 100、検出中に 102 が出土した。99 は土師器の坏、100・101 は土師器の皿、102 は弥生土器の甕である。時期は中世前期と考えられる。

３　柱穴

柱穴 42 ～ 47（第 56 図）

調査区西側に位置している。掘り方は円形を基本とし、規模は長さ26～46㎝、深さ23～47㎝を測る。これらは底面の高さの違いによって大きく２種類に分類でき、柱穴44のように礎板石が置かれるものもある。遺物は出土していないが、周囲の状況から中世と考えられる。



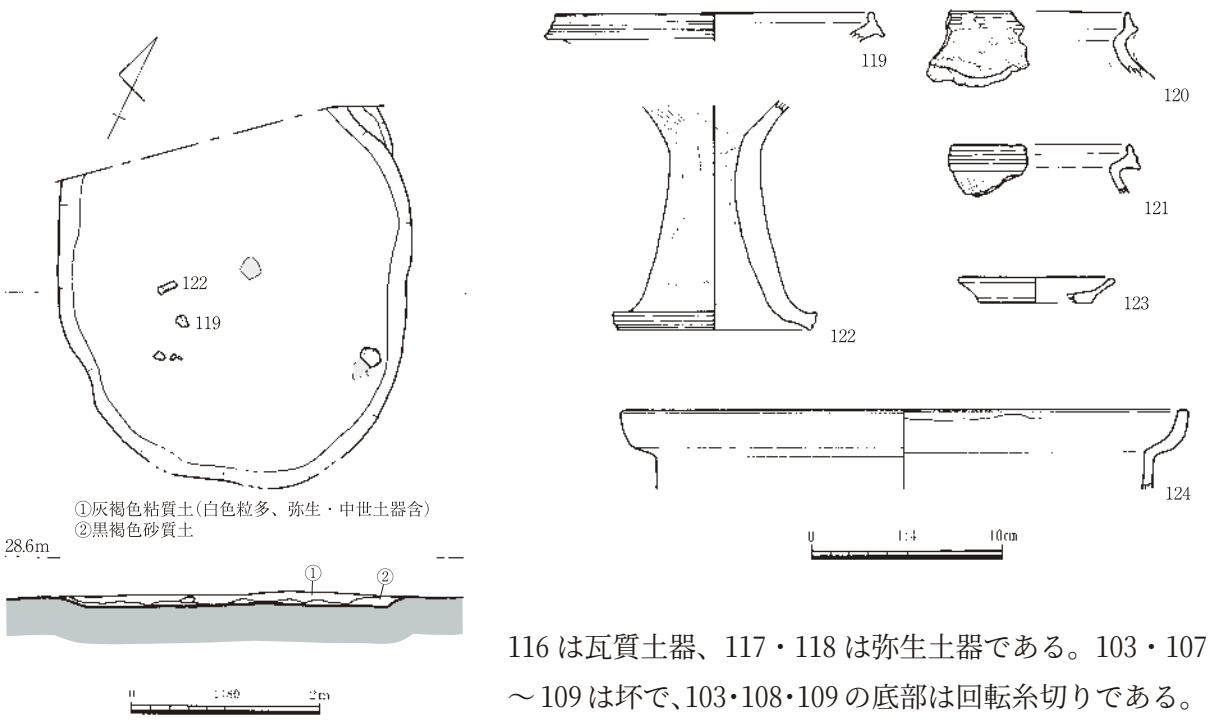
第58図　土坑48

４　土坑

土坑 47（第 57 図、ＰＬ．８・30）

調査区西側に位置しており、柱穴44に切られている。遺構の大半は調査区外にのびているため全容は不明確である。検出部分から判断すると、平面形は不定形な円形を呈するものと考えられる。断面形は中央がやや窪む逆台形状を呈し、規模は残存長291㎝、深さ42㎝を測る。西側半分では検出面から底面付近にかけて長さ８～45㎝の円礫が重なり合うようにして検出された。

遺物は埋土中から 103 ～ 118 が出土し、このうち 103 ～ 115 は土師器、



第59図　たわみ２・出土遺物

116 は瓦質土器、117・118 は弥生土器である。103・107 ～ 109 は坏で、103・108・109 の底部は回転糸切りである。104 ～ 106・110 ～ 114 は皿で、104 ～ 106・110・111 は手づくねによって成形される。115・116 は受け口状の口縁部をもつ鍋である。時期は出土遺物から中世前期と考えられる。

土坑 48（第 58 図）

調査区南西隅に位置している。遺構の大半が調査区境にのびているため形状・規模は不明確である。規模は残存長 35㎝、深さ 53㎝を測り、底面は赤褐色ロームまで達している。埋土は黒褐色系の粘質土であり、黄褐色ロームを若干含む。遺物は出土していないが、遺構の検出状況や周囲の状況などから判断すると、中世の可能性が高いといえる。

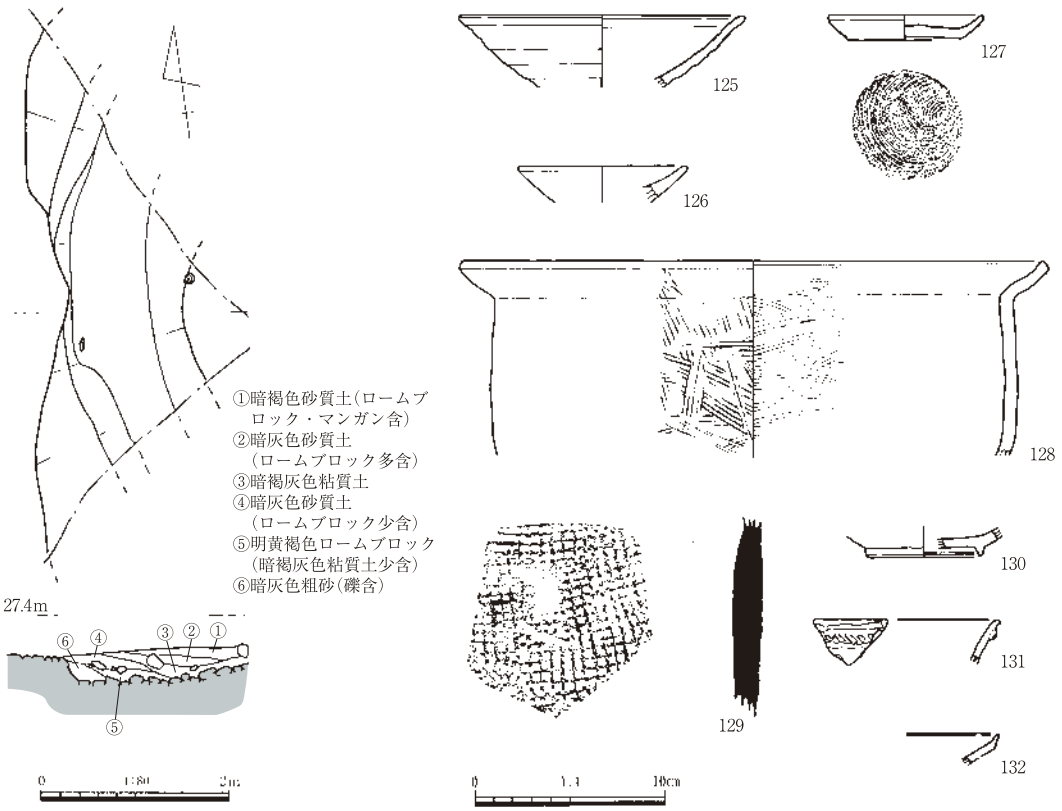
５　たわみ

たわみ２（第 59 図）

調査区西側に位置しており、柵列１を切っている。西側は工事用道路によって壊されていたため不明である。当初は小型の竪穴住居として調査していたが、柱穴を伴わないこと、掘り方が明瞭でないことなどから、たわみ状の落ち込みと判断した。

不定形な楕円形を呈する浅い窪地であり、断面形は皿状を呈する。規模は残存長 411㎝、幅 373㎝、深さ 13㎝を測る。底面からは長さ 20㎝ほどの炭のまとまりが２箇所でみつかっており、そのうちの１箇所では一辺 20㎝ほどの石が検出された。

遺物は底面からやや浮いた状態で 119 ～ 124 が出土した。このうち 123・124 は遺構に伴うものと考えられ、119 ～ 122 は他からの流れ込みによるものと考えられる。119 ～ 122 は弥生土器である。119 ～ 121 は甕であり、119 は端部が上下に拡張する口縁部をもち、外面には３条の凹線文を施す。120 は口縁端部が上に拡張し、そこに２条の凹線文を施す。外面肩部には縦方向のハケメ、内面には縦方向のハケメ後、口縁部から頸部付近にかけて横方向のナデを施す。121 は上下に拡張した口縁部をもち、そこに２条の凹線文を施す。122 は高坏の脚部で、外面全体には赤色顔料が塗布されてい



第60図　溝28・出土遺物

る。端部は上下に拡張し、その外面には２条の凹線文が施される。外面は縦方向のヘラミガキ後、端部付近において横方向のナデを施す。123 は土師器の皿で、底部は回転ヘラ切りの可能性がある。内外面ともにヨコナデで、内面底部はヨコナデ後不定方向のナデによって仕上げられる。124 は受け口状の口縁部をもつ瓦質の鍋で、内面の口縁端部直下において浅い凹線が付く。遺構の時期であるが、123・124 から中世前期と考えられる。

６　溝

溝 28（第 60 図、ＰＬ．８・24）

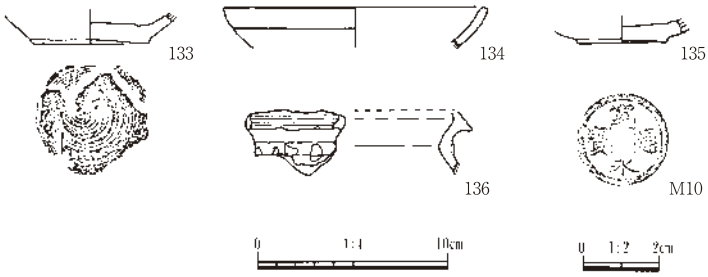
調査区東側に位置しており、礫層上面で検出した。東西方向にのびる溝で、調査区外につづいている。部分的な調査で全容は不明であるが、確認した状況から蛇行していたものと考えられる。この溝の底面付近には粗砂が堆積しており、また西岸部分の一部が抉られていることから、この溝にはある程度の水の流れがあったことが予想される。

遺物は 125 ～ 132 が出土した。125･126･129 ～ 132 は上層、128 は下層、127 は底面からの出土である。125 は土師器の坏、126・127 は土師器の皿である。128 は土師器の鍋で内外面にハケメを施す。129 は中世須恵器の甕で、外面に格子状の叩き、内面にはナデを施す。130 は青花の皿で、内外面に火を受けている。131 は縄文土器の深鉢で、外面口縁部直下に刻目付貼付突帯が付く。132 は肥前系の青磁で上層から混入したものと思われる。器種は不明である。

７　石列

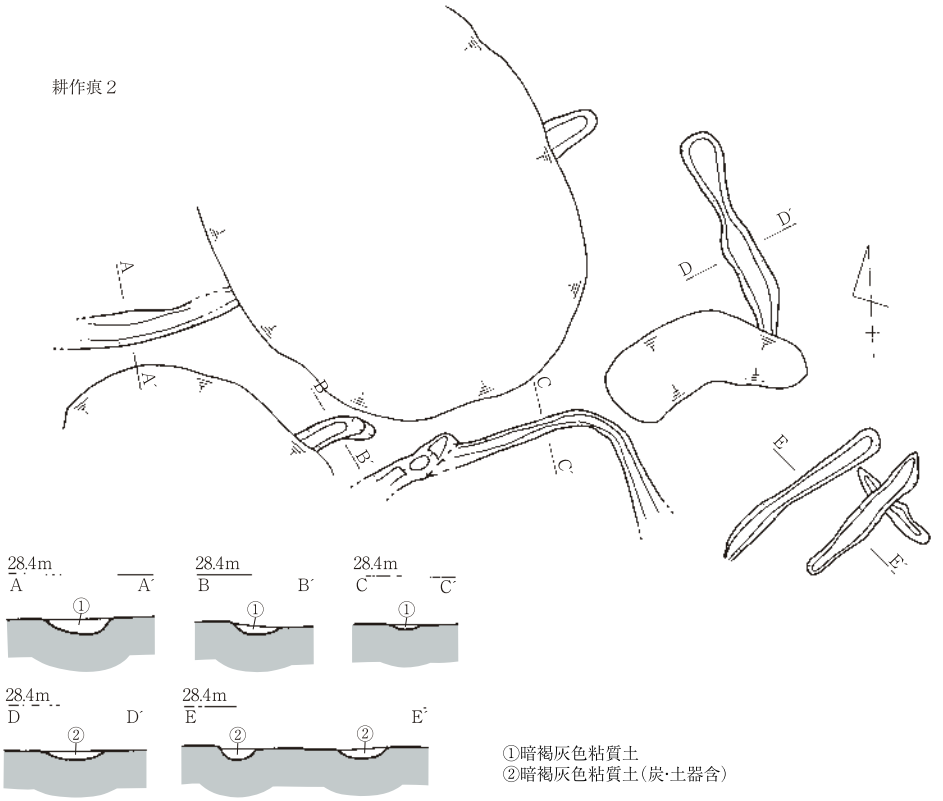
石列２（第 61 図）

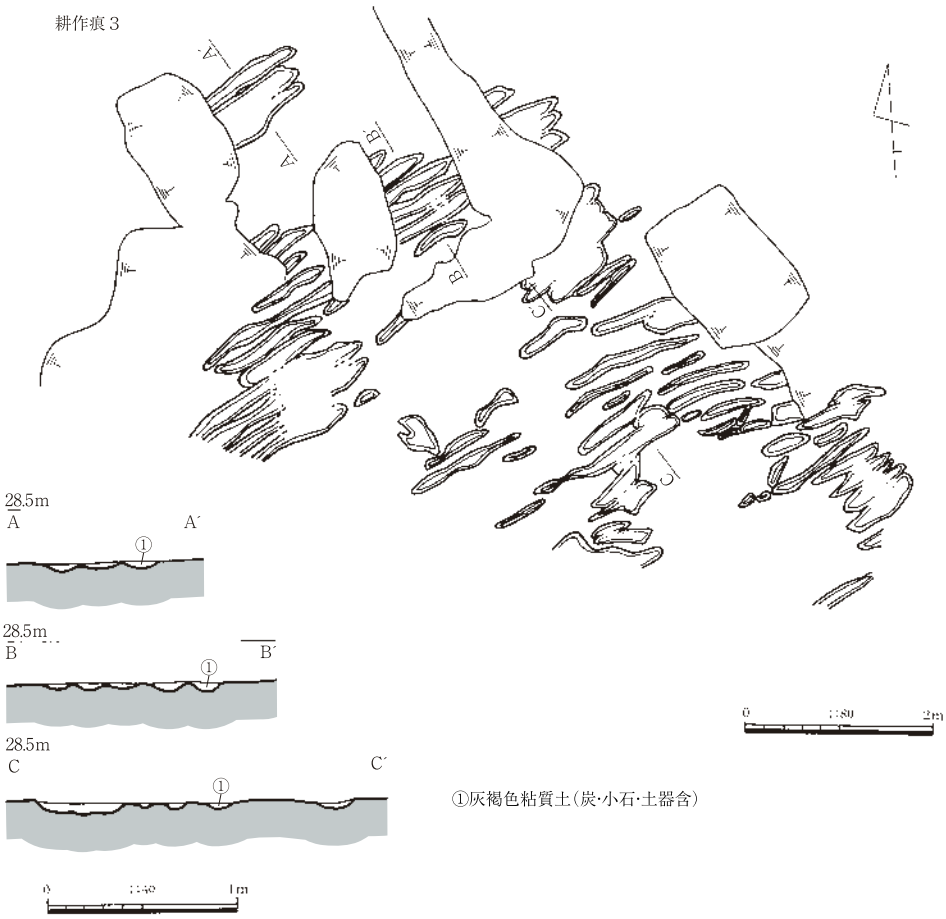
調査区中央に位置しており、Ⅵ層及び暗灰褐色土除去後に検出した。石は東側の面を揃えるようにして積み上げられていたが、石の大きさが一辺６～45㎝とバラつきがあり、その積み方も規則性が乏しく乱雑なものであった。



第61図　石列２・出土遺物

石を除去すると、淡灰褐色細砂を基盤とする段が認められた。段の高低差は約１ｍあり、角度は 55 °と比較的急であった。この段は中央において「¬」状に屈曲しており、斜面部において平面形が不定形な方形を呈し、長さ 57 ～ 66㎝、深さ 25 ～ 51㎝を測る土坑が３基掘られていた。このような状況から、この段は人為的につくられた可能性が高いといえる。


耕作痕２
28.4m
A
A´
28.4m
B
B´
28.4m
C
C´
28.4m
D
D´
28.4m
E
E´
①暗褐灰色粘質土
②暗褐灰色粘質土（炭･土器含）


耕作痕３
28.5m
A
A´
28.5m
B
B´
28.5m
C
C´
①灰褐色粘質土（炭･小石･土器含）

第62図　耕作痕２・３

さて、この石列と段の関係であるが、段と石との間に褐灰色粘質土が堆積していたことや段の平面形と石列の面が一致していないことから、段が形成されてからしばらく経った後に石列が築かれたと考えられる。

遺物は埋土中から 133 ～ 136、M 10 が出土した。133 ～ 135 は土師器の坏であり、133 の底部は回転糸切りである。136 は弥生土器の甕で、外面頸部には連続した刺突文を施した貼付突帯文が付く。M 10 は寛永通寶であり、検出面から出土している。時期は中世と考えられる。

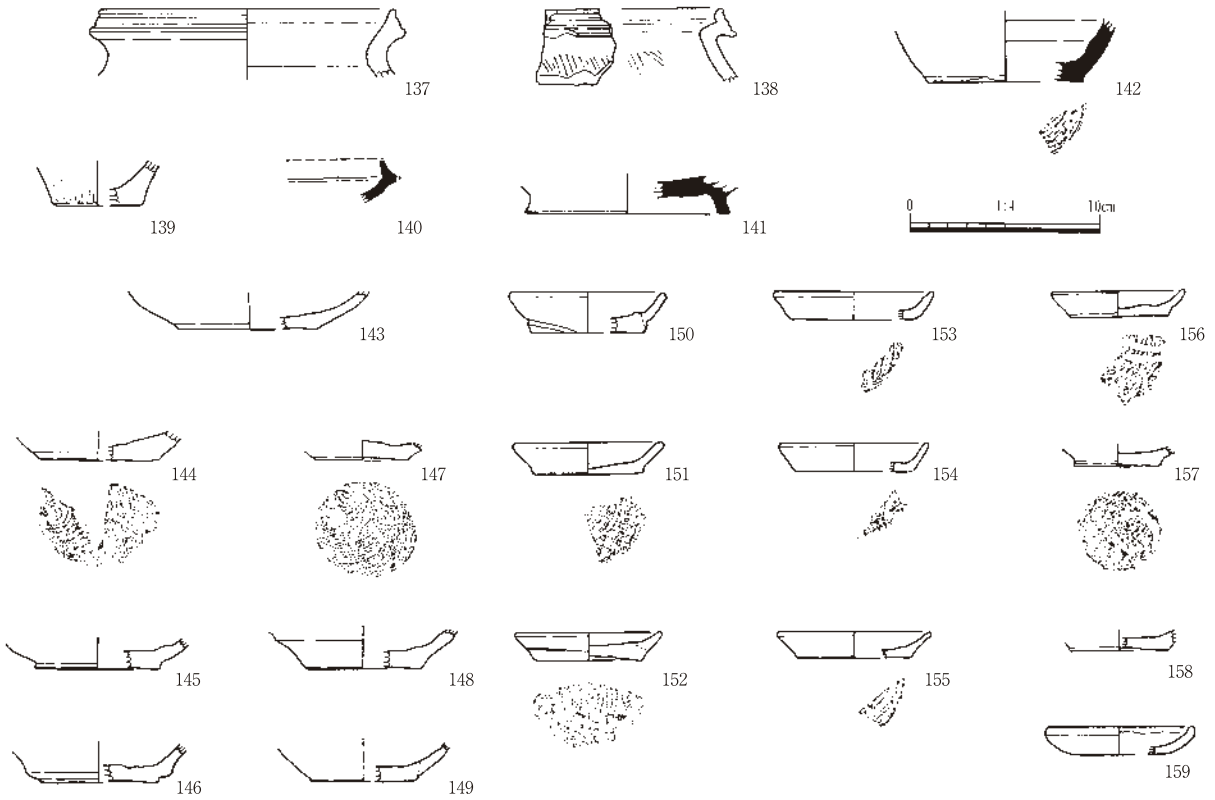
８　耕作痕

耕作痕２（第 62 図）

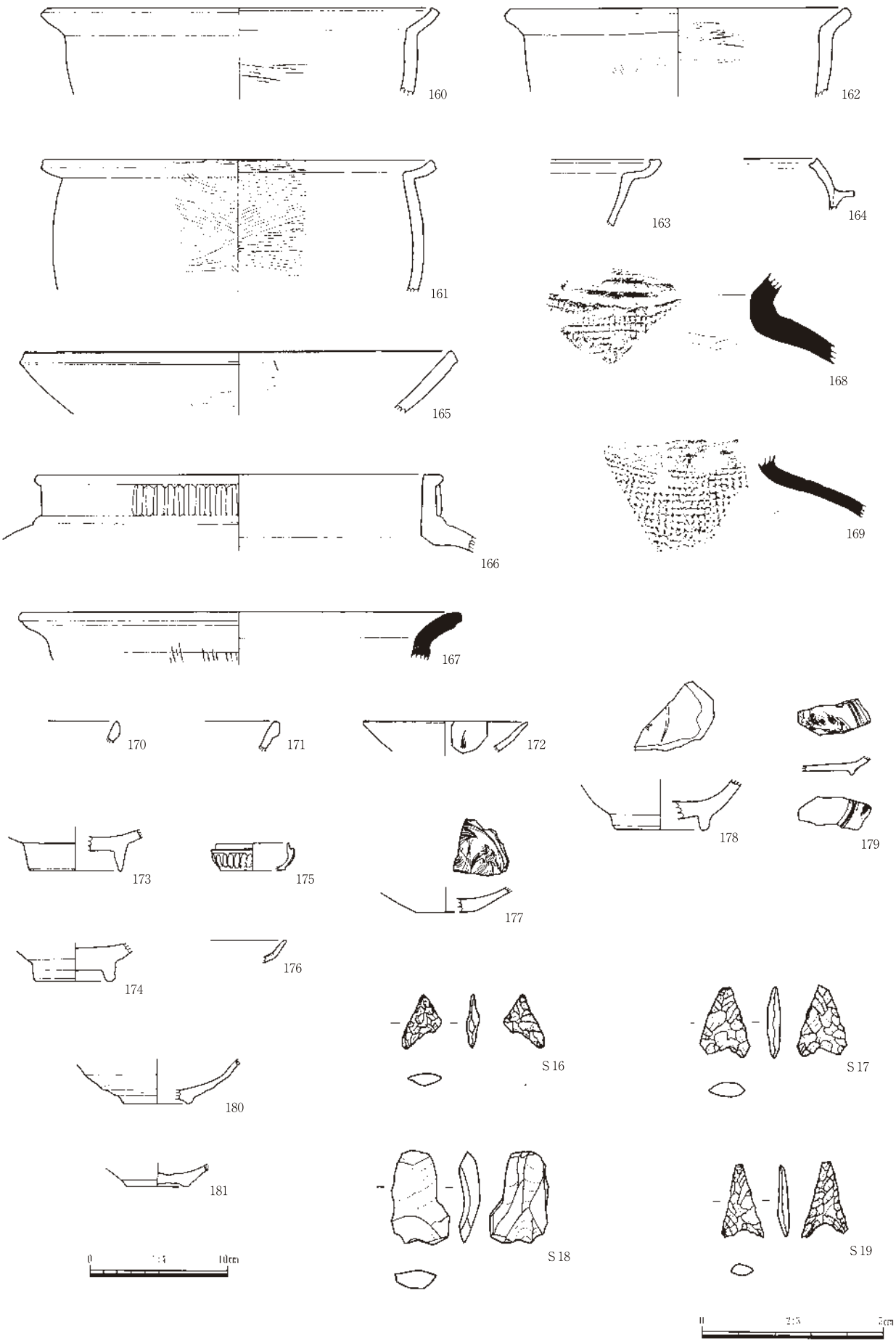
調査区西側に位置しており、淡灰褐色細砂上面で検出した。耕作痕とした明確な根拠はなく、溝としてもよかったが､同形･同規模の溝が規則性をもって掘られていると判断したため耕作痕として扱った。遺構は東西及び南北方向に直線的ないしは「L」字状に屈曲してのびる素掘りの溝であり、全部で７条検出した。それぞれ並行ないしは直交しており、断面形は皿状ないしは「U」字状を呈する。規模は幅 16 ～ 36㎝、深さ３～６㎝を測り、軸は東西でN－ 70 °－Eと北に振れている。

耕作痕３（第 62 図）

調査区西側に位置しており、Ⅶ層上面で検出した。検出面には鉄分が沈着していたことから遺構の検出は比較的容易であった。これらは規則性をもって掘られており、遺構埋土が近世の耕作土と考えられるⅥ層となっていたことから、耕作痕であると判断した。北東から南東方向に直線的にのびる細い溝群で構成され、広範囲にわたり連続して認められた。規模は幅８～ 26㎝、深さ３～６㎝を測り、



第63図　遺構に伴わない遺物①



第64図　遺構に伴わない遺物②